

ハワイ

HAWAII

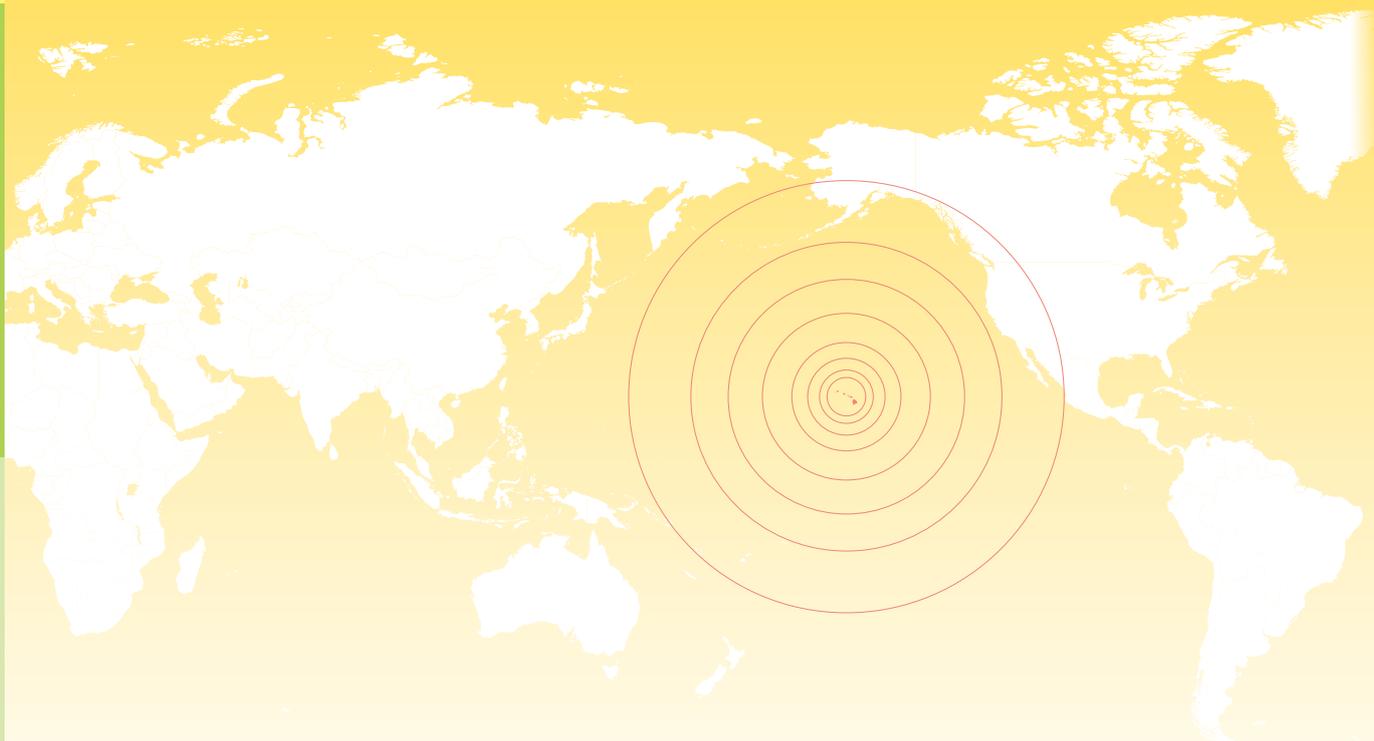
浦添からハワイへ移民したのは 1904（明治37）年が最初である。「海外旅券下付表」によると戦前ハワイに移民した浦添出身者は604人で、浦添からの移民数が最も多い地域である。明治・大正期には数多くの人が移民していたが、1924（大正13）年の排日移民法により渡航が大きく制限された。現在では戦前渡航の1世はごくわずかとなり、2世から3世・4世の時代となっている。

ハワイ・北米

南米

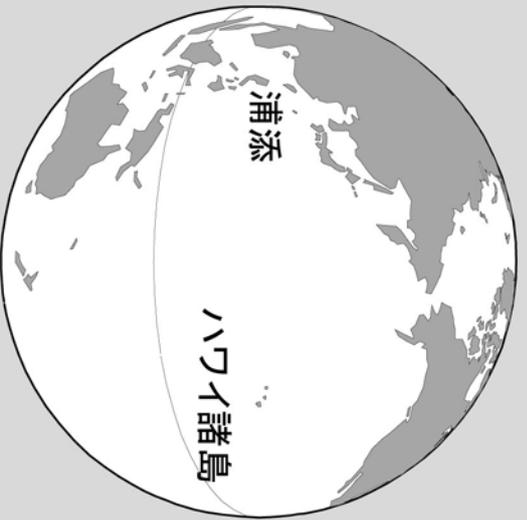
アジア太平洋

国内



カウアイ島
 ケカハ
 リクエ
 ハナペペ

モロカイ島
 カネオ
 カイルア
 ホノルル
 オアフ島
 ラナイ島
 カウルイ
 ココモ
 マカオ
 マウイ島



0
 50km

コナ
 ホノム
 ヒロ
 ベビキヨ
 マウナロア山
 マウナケア山
 コイマア
 ハワイ島

私は二世のウチナーンチュ



比嘉カメ子（旧姓島袋）

二世／ハワイ

一九一七年一月七日

私は旧姓島袋。父は前田の島袋太郎。だいたい一九〇〇年ぐらいにハワイに来たですね。おうちの名前は、沖縄でいえばヤマガーグワーでしょう。母は仲間のメーナーグシク。

私はカウアイ島の一畑舎、サキマナ（マナから三里の距離）で生まれました。きょうだいはカメスケ兄さん、ツルコ姉さん、私に妹オトメの四人。父はカウアイ島ではプランテーションで働いていました。母は仕事行かなかったけど、父はキビ畑していました。両親は沖縄から行って、日本語が知らないでしょう。サキマナでは近くにオカムラさんとイノウエさんがいて、オカムラさんは母によくしてくれました。

なぜハワイに来たかという点、沖縄で子どもができないの。子どもができないから、父が三〇歳ぐらいのとき「ハワイに行く。三年契約だから三年間行ってきます」言うて、母を沖縄において逃げて来たらしい。そしてね、その三年が終わったらね、もう三年間いるから帰らないって手紙が来た。だからお母さんが正月にハワイに来たの*。そしたら、その年の十二月に兄が生まれたの。だから、母が私たちの小さいときの写真を自分のきょうだいに送ったら「あんだ

がハワイから送ってくれる写真は、よその子どもを借りて写したの？」って思われたようです。

カウアイ島ではマナにあった学校に行きました。途中に橋がかかっていた、大雨とか何かのときには家に帰れなくて、学校で泊まっていた。昔は英語学校が二時に済むでしょう。その後には日本語学校へ行きました。土曜日は英語学校はないから日本語学校だけの日本語はとても自然なので、校長先生がいつもほめてくれました。日本語学校は七歳から通いました。女学校では、ヤマトウの先生に教わりましたが、名前は忘れてしまったね。

ホノルルに行ったのは十一歳のとき。私の兄がホノルルで働いていたときに、いい人たちに会ってね。「お父さんお母さん呼びなさい」言うてくれて、私たちはホノルルに移ってきました。だから、四年生からホノルルでした。カウアイ島にいたときは電気がなかったの、ホノルルに移ってきたときは電気が珍しくて、遊んで父にいつも怒られていました。

ホノルルでは、父は白人の金持ちの家で庭掃除の仕事をしていました。土曜日は私も一緒に行ったりしました。そしたら、白人はアイスクリーム持ってきてくれたりなんかするでしょう。だからもつと行きたかったです。

私は小さいけれど人に負けない。何でもやりたいの。だから十一歳ぐらいから夏はキビ畑の仕事したの。兄さん姉さんがキビ畑へ行

※外務省の「海外旅券下付表」によると、島袋カメは浦添村字前田二八七番地に本籍のある戸主太良の妻で三三歳一〇か月のとき夫の呼び寄せでハワイへ渡航した。明治四四年九月三日に旅券が下付されている。

くとき、私も知らん顔で鍬を持って、汽車が迎えに来たら飛び乗ってキビ畑に行きました。オーハナ言うの。ハワイ語でオーは鍬。ハナは仕事。オーハナ。こうしてキビのあいだの草を掘り返すのよね。キビ畑で働いた人はみんな分かりますよ。

ホノルルに来てから、ヤマトンチュからバカにされたことがありますよ。日本語学校からの帰り道ね。ヤマトンチュのお母さんたち二人か三人か、子ども抱いて話しているのよね。で、私がそこ通ったら、三歳ぐらいの子どもが「沖繩ケンケン豚カウカウ」言うて。で、私が追いかけて行つたからね、この子はずっと走って、自分のおうちに入ったのよ。私も靴のまま入って行ってね、叩いたの。するとそこのお母さんが「何するの」言うて、私を怒るの。これは親が教えているの。だから三歳ぐらいの子どもでも分かるのよね。とてもバカにされた。カウアイ島は小さい島だからこんなことはなかったの。

日本人みんなに言いたくないけど、ウチナンチュは馬鹿にされてね。ウチナンチュはあんなに馬鹿にされたけれどね、今はウチナンチュが一番上。自分の新聞もあるし会館もある。他の県はね、みんな自分のことだけ。ウチナンチュはお互い様。ウチナンチュはとても発展しているの。私は二世のウチナンチュです。自慢できるのよ。

私は十三歳から、元名護市長の岸本さんのお母さんから琴を習ったんです。それから琴をずっと続けていて、師範免許も持っています。九〇歳のときには琉球箏曲保存会ですか、その五〇年記念のときに

沖繩に行つて最高賞を貰いました。私の跡継ぎのアダニヤさんもとでもいい人です。

それからね、一世の人と相手になつて舞台に出ていました。何でも習つて。舞踊が好きでね、花風が一番好きだったの。でも他のウチナンチュはね、母に「あんたの娘、ジュリグワー（遊女）にするの」言うて。でも母も踊りが好きだからさせてくれたの。それでね、一世が使つた衣装が私の家にあるの。私が一番弟子だから私に残して。今はハワイではお芝居なんかありません。する人がいないの。もうみんな亡くなつて。残っているのは私ひとりでしょう。沖繩に持つて行って博物館に入れようかと思つているけれどね。珍しい着物なんかあるけれどね。もう捨てようかと思うけれど、捨てることのできないの。ハワイでは日本人博物館とかないからね。

以前、女ではお芝居をする人がいなくて、私ぐらいだったのよね。それで日本語が話せるようになったの。一世の人たちが「ああ、ゆうべの舞台はカメ子が出ていた」って。みんなカメ子、カメ子いうからね、私の名前はずっとカメ子で通つているの。英語の名前のアグネスを知っている人は少ないの。でも私はうれしいの。一世の人たちが大事にしてくれたから、それがあつたから、今も光っているの。日本語とか沖繩言葉を知っている人は、ハワイではもう少ないの。私、この言葉が好きなの。だから日本語学校でも一生懸命勉強したの。

女学校を二年出て、金持ちの白人夫婦の家でハウスメイドをしました。デイモンさんといって、その方のお父さんはイギリスから来た人でした。賃金は一週間五ドルで少ない方でしたが、デイモンさ

んは私をとてかわいがってくれて、私をイギリスやフランス・スペイン・イタリア、そしてインドや朝鮮まで、世界中あちこちに連れて行ってくれたんです。イギリスに三か月、フランスも三か月。本当によくしてくれたんです。私の子どもたちもよく見てくれました。私はその家で三〇年ぐらい働きました。よくしてくれるから辞められなかつたです。本当に幸せ者です。私のような幸せ者はいません。

二五歳のときに結婚しました。夫は中城村久場出身の二世、比嘉マサタダといえます。夫は三歳のときに沖繩に行つて十三歳でハワイに帰つて来て、プランテーションで仕事をしていました。それからプリモビヤーという大きな会社で働いていた。子どもは四人います。男の子三人。女の子一人。息子三人は五〇代だけど、結婚していないの。これが私つらいのよ。男の子二人は弁護士、女の子は看護婦さん。よく育てたの。夫は沖繩の喜納先生（喜納栄昌）の弟子で、ハワイで一番初めの民謡の先生なんです。

もう数えられないほど、沖繩へ行きました。沖繩が好きで。一番初めに沖繩に行つたのは七〇年前。二〇歳になったとき、母が私に「自分分は四人きょうだいの末っ子だからね。沖繩に行つて、おじさんおばさんが元気のうちに会つてきなさい。一か月遊んできなさい」言うて。当時、一号線（現国道五八号線）は泥道で馬車が通つていました。山形屋（現JALシティホテル）の所も、来たときはただのトタンの一軒家でした。

沖繩に来たとき、幸いに日本語をいくぶんか知っているから、おばさんたちも喜んで色々してくれたの。母のきょうだいは姉さんた

ちが三人いて、男の子が一人いたはず。みんな喜んでくれてね。来たら沖繩はいい所なの。ハワイの若い人たちはみんな沖繩嫌うの。不自由だから。でも、私は何でも好きな方だから。浦添から那覇に来たとき道に迷つてね。ある人を止めて、「私ここをこう行きたいけどどこですか？」って話してね。すると、幸いこの人のお父さんがハワイでタクシーをしていたの。それでその人が「おばさんがそこで宿屋やっている」って言つて、その宿に安くて泊まつて、一か月の予定が六か月遊びました。あ那时候、沖繩来てうれしかった。

戦後は沖繩の学校生徒は鉛筆がない、紙がないってハワイの新聞に載つていたからね。だからハワイの人がお芝居して。私も「伊江島ハンドー小」^{ザウ}したのよね。あ那时候の利益は全部アメリカの会社に送つて、鉛筆とか帳面とか送つて沖繩の学校に寄付したの。

十月の「第五回世界のウチナンチュ大会」で、沖繩に行く予定です。娘に任せているからね。沖繩に行つたときには喜納先生のおうちに行きたいの。

私思うのよね。父と母はとても苦労したはず。父は九五歳で亡くなったの。母が九三歳だったかな。今になつて恩返しもできないし。私が今九四歳でしょう。だからみんなに言うのよね。「ウチナンチュだからね」って。ハワイでも言う。「長生きしたかったら沖繩行きなさい」。新聞にも出るのよ。これ白人が書くのよ。だからうれしい。ウチナンチュ、ウチナンチュ言つてくれて。

【二〇一一年七月二日、十月二〇日津波清・石川友紀調査】

USAハワイ州ホノルル市・沖繩県那覇市

キャンププスリーで生まれる



津波清範（さいはな せいはん）

二世／ハワイ

一九二二年一月十九日

父は津波清太、母はウシ（旧姓津波）といい、二人とも浦添村字城間出身です。父には三人の姉と一人の兄がいました。長女のカマは伊波という方の家に嫁いだそうです。

父がハワイに来たのは、一九〇六年のたぶん十一月だったと思います。十月に出航して、十一月に着いたようです[※]。チャイナ号で来たそうです。両親はハワイに来る前に結婚したらしいのですが、ハワイには父一人だけで来て、母はその後、一九一〇年に呼び寄せられました[※]。当時の沖縄は貧乏で、ハワイに来てお金を稼ぐことが目的でした。本当はアラスカに行きたかったのですが、他に誰も行く人がいなかったのハワイに来たそうです。

父は教育を全然受けていなかったのですが、ハワイに来てから仮名を書くのを覚え、そろばんがとても得意で数字に強い人でした。

最初、父はハワイ島コハラで三年契約で働いていましたが、後か

※『沖縄県史料 近代五 移民名簿Ⅰ』によると、津波清太は明治十八年三月二六日生で、浦添間切城間村六七〇番地に本籍のある戸主清川弟で、二二歳のとき、ハワイへ農業の目的で、明治三十九年十月二〇日に日本を出航している。

※外務省の「海外旅券下付表」によると、津波ウシは浦添村字城間六七〇番地に本籍のある清太妻として、夫の呼び寄せで二四歳五か月のとき、明治四三年十月二二日に旅券が下付されている。

ら「ホノムには浦添出身の人がたくさんいるよ」と聞き、三年間の契約を済ませ、船代とかの借金もすべてきれいに片づけた後、コハラからホノムまで徒歩で六日間かけて移動したそうです。昼間歩いていると他のプランテーションから脱走する人と間違われて逮捕されちゃったら困る、というので、人目につかないよう夜歩いたので、六日間もかかったと言っていました。

私はキャンププスリーにあるアカカ滝の近くの自宅で生まれました。産婆さんが取り上げてくれました。きょうだいは男五人で、私は三男です。みんなホノムで生まれました。長男のハリー・ショウキチは浦添村人会の会長を務めたことがあります。上の兄二人は、高校卒業後オアフ島に移りました。四男のラルフ・セイキチは現在カリフォルニアに住んでいて、五男のロイド・タダオも兄たちのいるホノルルに移り住み、二〇〇五年に亡くなりました。きょうだいでここに残っているのは私だけです。

一九三八年、父は長男と一緒に二、三か月ほど沖縄に戻っています。母も四男を連れて一九四一年に沖縄に一度帰っています。しかし、弟はお金を稼ぐためにそのまま残り、戦争のときには沖縄で召集されたようです。戦後も軍の通訳のために沖縄に残されたそうです。

キャンププスリーには当時、十二軒ほどの家がありました。風呂場は離れた所にあり、泥道を下駄を履いて歩いて行きました。昔は車があるわけじゃないので、プランテーションがある所に住むのが普通でした。キャンププスリーは耕地を増やすために家を潰してしまい、少し上の方にあったキャンププオーに移らないといけなくなりました。

め、一九二九年にキャンプフォーに移動しました。キャンプフォーには二六軒の家がありました。

私はホノム小学校を八年生まで通い、学校が終わると本願寺の日本語学校に行っていました。本願寺には柔道の稽古をする所もあって、私と弟のセイキチは柔道をしていました。現在学校はもうなくなっていますけど、本願寺の建物は残っています。学校はプランテーションから四マイルも離れた所にあり、そこまで毎日裸足で歩いて行きました。途中でロバの糞があちこちに落ちていたので、それを避けるように歩いていきました。また、石につまづいて足の爪がはがれたりすることもありました。

学校には日本語に不慣れな先生もいて、私のように日本語の名前しか持っていない生徒は、ニックネームをつけられることがありました。私は「ランディ」というニックネームをもらいました。小学校が終わった後、両親とともにシュガープランテーションで働きました。父は副業として、会社から土地を借りてパッションフルーツの栽培などしていました。その成果は、たとえば十トンとれたら一トンはリース料として支払うというシステムでした。ただ、会社からリースしてもらえる土地は、機械が入りにくいような悪い土地が多く、畑に行くのを「パリ（ハワイ語で崖のこと）に行く」と言っていました。

父は背が低かったのですが、サトウキビを刈るのはとても上手でした。手先も器用で、下駄や三線・石臼などを自分で作り、酒も作っていました。母は豆腐や味噌・醤油を作っていました。豚も飼って

いて、近所でパーティがあるときなどに売っていました。家で育てた豚を自分たちで食べるということはありませんでした。

戦前、父は一番上の姉にあたるチヨおばさんに仕送りをしていたようです。どんなものを送っていたのかはよく分かりませんが、父は読み書きができなかったので、物を送るときはキャンプの中で読み書きができる方に書いてもらっていたようです。ただ煩わしいので、そんな頻繁に何かを送ったということではないと思います。また、長男のショウキチは戦後、自分の着ていた服を集めて沖繩に送っていたようです。

戦後、私はサトウキビを運ぶトラックのドライバーをしました。戦前はアカカ滝の水でサトウキビを流して運んでいましたが、戦後はトラックで運ぶようになったんです。昔は二四時間営業で三つのシフトがあり、昼勤・夜勤交替で働き、一九八四年頃までドライバーの仕事をしていました。

子どもは三人です。長女キャネットは一九四四年生まれ。キャネットの一人娘はワイアケア・ハイスクール四年生です。孫は三回も沖繩に行っています。三線も太鼓も踊りもでき、彼女の夢は沖繩に移住して働くことです。

長男マイリン・セイジンは一九五三年生まれでハワイ島に住んでいます。最初は私と同じ会社でトラックドライバーをしていましたが、今は自営業としてトラックを持っています。彼には子どもが三人いて、一人目は看護婦、二人目が地元の新聞社、三人目は獣医のアシスタントとして働いています。



津波清太と親戚一家 [2010年 津波清撮影]

二男のセイチは一九五九年生まれで、ヒロ・ハイスクールを卒業後、五年ぐらい陸軍にいました。その後ハワイ大学ヒロ校に進み、学校の補助員やカウンセラーの仕事をしていました。

国籍はアメリカで宗教は仏教です。仏壇は兄が持っていて、沖縄から持って帰ってきた位牌もあります。墓はホノルル市にあります。

家族の会話は英語です。両親は日本語で話していましたが、父は日本語が得意じゃなかったように思います。沖縄料理はアシテビチなんか食べますが、子どもたちの代からはホットドッグです。

一九八九年に一度沖縄に行きました。十日間ほど訪問したんですが、フリーになる時間があったので、沖縄の軍で働いていた弟セイキチの所で泊まったり、親戚の家で泊まったりしました。父も一九六〇年に沖縄に一時帰国しましたね。

【二〇一〇年十月二日石川友紀調査】

USA ハワイ州ハワイ島ヒロ市

パイナップル農業で成功した父



栗国亀子
あわくに

二世／ハワイ

一九二二年十二月十七日

父は浦添村字城間出身の西原久亀きゅうきといい、きょうだいが一人、姉か妹がいたように思います。ハワイ移民の父はパイナップル栽培の農業で非常に成功していて、沖繩とハワイを何度も行き来していました。三度目に沖繩へ行ったときに、母をハワイに連れてきたと聞かれています*。

私は四人きょうだいの長女として、マウイ島マカワウで生まれました。学校は世界恐慌があったときだったので、八年生からあとが続けることができず、ソウイングスクールで勉強し、縫製工場に勤めました。結婚後も同じ仕事を続けていました。

一九四一年にハワイ島ホノム出身の二世栗国ヒデオと結婚しました。夫は結婚してすぐの頃は、運転手として島中を走り回っていましたが、リタイア後はカイルア・ハイスクールの用務員をして七四歳のときにガンで亡くなりました。

現在、子どもは四人（男三人・女一人）いて、長男ブライアン・ヒデシは、MIHという会社でディレクターをしています。二男ヒ

※外務省の「海外旅券下付表」によると、西原久亀は浦添間切城間村四〇九番地に本籍のある戸主久那長男で、二五歳のとき、明治三十九年二月六日下付の旅券で渡航したことになっている。

サオ・デニスはボハ大学を卒業して、CPA（会計士）として働いています。長女アイリーン・ヒデオは子宮がんで亡くなりました。三男ウイン・キヨシも亡くなりました。孫の一人はエアフォースに所属し、医者をめざしてペンシルベニアの医学部に通っている孫もいます。もうすぐひ孫も生まれるんですよ。

国籍はアメリカです。言葉は英語。時々日本語を使いますが、あまり分かりません。ウチナーグチも少ししか分かりません。宗教はプロテスタントです。趣味は若いときに習ったハワイアンキルトですが、今はやっていません。沖繩料理は豆腐やらチャンプルーなんか、若いときは食べました。テレビはNHKも観ます。私の一番下の弟のヤスオは三味線を弾きます。母が昔、模合をやっていました。月に一回、銀行ではなく模合にお金を入れていました。浦添市人会に入っています。仏壇はないがお墓はあります。

沖繩には三回ほど行ったことがあります。二〇〇八年には孫を含めて八人で九日間行き、バスを借り切つてあちこち回りました。とても楽しかったです。孫の一人、二五歳になる男の子がもう一度行きたいと言つてね。三味線なんか習いたいと言うの。沖繩の言葉とか音楽とかも、分からないんだけど、とにかく習いたいと言つてます。

【二〇一〇年十月十五日石川友紀調査】
USAハワイ州オアフ島ホノルル市

父とともにダンパチャー（理髪業）を経営



花子・レイチエル・城間

二世／ハワイ

一九二七年四月二七日

父は与座仁松（城間出身）、母はカメ（旧姓宮城）といひます。きょうだいは五人。父が沖繩からハワイ島のコハラという所に来ました。キビ畑の仕事をするためです。父は初めの奥さんと結婚してすぐ、ハワイに来ました。一緒に来たのか、別に来たのか知らないです。初めの奥さんは女の子ひとりを生んで病気で亡くなったので、私の母と結婚しています。前の奥さんの子どもも亡くなったね*。

コハラいう所はよう雨が降つてね。弁当忘れても合羽は忘れるなつて。だけど、あまり雨が降るから、みんな仕事へ行かないで、集まつて話すでしょう。そのときに父は人の髪つむ（広島方言で髪を切る）。それから三年過ぎたら、マウイにシマンチュのヤビクという人と、オヤフソという人がおつて。あのときはみんなパイナップル植えて儲かるから、父もパイナップル植えてたんだが、ぜんぜん儲けがなかった。ココモで三年ぐらいパイナップルの仕事をした後に、マカワオでダンパチャーした。母が一九五六年、五六歳で亡くなり、

※外務省の「海外旅券下付表」によると、與座仁松は浦添間切城間村五九四番地に本籍のある戸主仁和長男で、十八歳のとき、明治三九年十月十日に旅券が下付されている。なお、妻は與座ウシヤで戸主仁松妻として、二八歳四か月のとき、大正四年十月六日に夫の呼び寄せとしてハワイへ旅券が下付されている。

父は一九五八年に沖繩に帰つた。父は一九六二年、七五歳のときに沖繩で亡くなった。

私はマウイのココモという町で生まれました。父は子どもたちみんなにダンパチャーを教えました。もしつまん男と結婚しても、自分一人でも仕事できるから。

マカワオいう所は、パイナップル事業をする日本人が多かつた。日本人とかウチナーンチュがパイナップル栽培をしていて、ポチギース（ポルトガル人）は酪農だつた。マカワオでは、ポルトガル人の子どもがおるから。ひとつの家族に子どもが十人とか二〇人とかいて。子ども連れてくるときにみんな来るからの。父はポルトガルのお父さんに「何人切つたからなんぼ」言うて。そして、ポルトガル人の親が来て、父に支払ひしていた。

私はまだ学校時代、エレメンタリースクールに行つていたとき、前の奥さんの子ども、義理の姉が父と一緒にダンパチャーして父の手伝いしよつた。この人は結婚してあと、ホノルルを出ました。義理の姉はシズエといつて、私とは十歳違ひだつたね。

小学校はマカワオで出ました。日本語学校へ六年生まで通つた。ハワイの学校が終わつて三時ぐらいから一時間ほどだつた。クラスが六つあつて生徒はだいたいぶおつたよ。学校には校長先生と奥さん、五人ぐらい先生おられた。先生は厳しかつたよ。次はマウイ・ハイスクールへ。ハマカポコにありました。昔自動車ないでしょう。でも、パイナップルとか砂糖を運ぶ汽車がハイスクールの所を通つていて、学生たちはそれに乗つて学校に行きました。ハイスクールは

四年制で、私は二年生まで通ったが、戦争が始まったからの。学校はとられて病院になって。それから父が「今は儲からんなら」って学校行かんようにしての。手伝いしてからの。儲かるようにと言われて。だから私、学校辞めて父と一緒に髪つむ。母はプランテーションでパイナップルの仕事していたね。

当時ですね、散髪は一回切つて、男の人は二五セント。子どもは十セント。髪つんで髭そつたら三〇セント。ポチギースだったらサNDERはお寺(教会)へ行く、だから土曜日にみんなシェイプ(散髪)しに来ます。ポチギースは髪が硬いから父はバリカンで剃っていました。

バーバーショップは朝七時から夜十時まで開けていました。床屋の向こう側に映画館があつて、それが済んでから来る人もいたので、父は遅くまで仕事をし、その合間に碁を打っていました。最初は店を毎日開けていましたが、戦争中は午後六時には閉めました。今はフィリピン人がバーバーするが、昔は日本人。なかでもウチナーンチュが多かったです。

子どもは二人。長男ライデン・イワオ・城間はワシントン州立大学を出て、ロサンゼルス化粧品会社に勤めています。子どもは男の子二人、女の子二人います。長女ジャニス・レイコ・サルバドールは、マウイ・コミュニティ・カレッジを出て、郵便局に勤めています。子どもは男一人に女一人。マカワオに住んでいます。

当然アメリカ国籍、宗教は臨済宗。言葉はみんな英語。あまり日本語話さない。父とは時々悪いウチナーグチをしました。

沖縄には四回行ったことがあるね。最初は一九六二年で、父が亡くなったとき。私ときょうだいで行ったよ。二回目は一九六五年。あのときは夫と観光で行ったね。そして六六年、六七年。みんな夫と行ったよ。

新聞は英語だと『マウイニュース』を購読する。ラジオはあまり聞かない。テレビジョンは日本語を観る。浦添市人会というのはないね。私、よう沖縄ソングテープで聞くとよ。

頼母子は聞いたことあるが。昔あつたんだけど。私、話聞いたからの。「あれするもんじゃない。隠したお金があるならしてもいいが。自分で、平生の分から出すもんじゃない」って。

今でも私、まだ髪つむよ。まだ家でするの。辞められんよ。長らくお客さんだった人がの、私辞めるっていったら、辞めたらどこに行くか知らんからの。一生懸命しなさいって。八〇歳過ぎたら辞める思うが、辞められない。でも毎日じゃない。一か月にいつぺん来る人もいるが。二週間ごとに来る人もいる。

【二〇一〇年十月十九日津波清調査】

USA ハワイ州マウイ島ワイルク

日系二世と結婚、共働きで活躍



オトメ・宮平・サイキ

二世／ハワイ

一九三〇年二月十一日

父は一世の宮平安三（牧港出身）です。父のきょうだいで分かるのはジラーという男性だけです。母はウト（旧姓宮平）といえます。父は明治三十九年^{*}にハワイに来ました。シュガープランテーション、サトウキビ農園で働くためにね。お金が沖縄に送られたのかは分かりません。母は父と結婚するためにやってきました。写真花嫁です。そのときの写真は多分、姉が持っているかもしれません。父は小学校を終えていないんですけれども、弟が泣き虫だったので弟を連れて小学校に行ったそうで、カタカナだけ書けました。そうやって勉強を続けたらしいです。

私はマウイのワイエフで生まれました。きょうだいは七人で私は四女です。私が生まれたとき、父はプランテーションの仕事を辞めて農業をしていました。二エーカーの畑でハス・大根・人参・豆などを作って市場に持って行って売って、市場で売り切れなかった分は、今度は街を歩いて売っていました。やっぱりみなさん貧しいので、ついで買われる方もいらつしやったらしいです。だから帳面があつ

※外務省の「海外旅券下付表」によると、安三は明治十七年一月二日生で、浦添間切牧港村二六番地に本籍のある戸主安幸長男で、二三歳のとき自由移民として明治三十九年十二月一日に旅券が下付され、明治四〇年一月五日にコレア号でハワイへ渡航している。

て、それに買った方のお名前と、あといくら借金があるのかですね、カタカナと地図で書いてました。父は九〇歳で亡くなるまで、その仕事をしていました。

小学校はワイエフ・エレメンタリースクールに通いました。アメリカの学校が終わってから、一時間おいて日本語学校にも通っていましたが、戦争が始まったので日本語学校は終わってしまいました。日本語学校は五年間ぐらい通い、そのときに日本語で字を書いたりしました。読み方で一等賞を貰ったことがあります。姉のトシ子は日本語学校をちゃんと修了したので、時計を貰っていました。

高校を卒業後マウイ島で仕事をし、戦後、二〇代ときに銀行の仕事でカリフォルニアのロサンゼルスに行きました。一九五七年九月一日、カウアイ島の日系二世と結婚しました。夫は両親が山口県出身で、お互いバケーションで来ていたホノルルで出会いました。カリフォルニアで結婚した後、夫の両親がいるカウアイ島に行きました。夫は医療関係の会計の事務所において、その後会計士として独立しました。私は建築関係の会社に十二年間勤めました。子どもは一人です。娘のサンドラ・ヨシエは一九五八年生まれで、呼吸器系の医療施設で看護婦をしていて一緒に住んでいます。

国籍はアメリカです。宗教は両親は仏教ですが、私はカトリック。仏壇は長男が持っています。料理は下手なのであまり作りません。ほとんどアメリカ食です。味付けはアロハ醤油です。サーターアンダギーは好きですが、豆腐はあまり好きではありません。ンブサーだったら野菜と一緒に食べます。父が野菜を作っていたから。父は

豚も飼っていて、中身はよく食べました。豚は一ダース以上飼っていたように思います。昔はつぶした豚を塩漬けにしていますでしたが、冷蔵庫が入って来てからはそういうのはなくなりました。ハワイの塩は粗いの。ヤマトンチューとかポルトガル人も豚を食べますが、沖繩の人がやはりたくさん食べていますね。戦後もほとんどの沖繩の家庭が豚を飼っていました。

夫とは英語で会話していました。両親とは日本語と英語の両方です。ウチナーグチもありました。聞いていれば分かるんですけど、自分から話すことはできないですね。新聞は『マウイニュース』を購読しています。ラジオは英語のトークショー的な番組が好きです。マウイ沖繩県人会に入っています。会費は払っていますけど、あまり会合には行かないです。会費は年間二五ドルです。

両親は親戚と一緒に模合をしていました。昔来た方は銀行からお金借りることができなかったの、頼母子が銀行代わりだったんですね。頼母子があつたから日本に行くこともできたりしたようです。現在、銀行は「バンクオブハワイ」を利用しています。沖繩には二回行ったことがあります。両親は戦前戦後に一回ずつ沖繩に帰ったことがあります。

【二〇一〇年十月十九日石川友紀調査】

USAハワイ州マウイ島ワイルク

ハワイ島で技師として活躍



西平宗光 そうこう

二世／ハワイ
一九三七年三月三日

父は西平宗龜(宮城出身)^{*}といい、一九〇一年に沖繩で生まれました。祖父は私と同じ宗光^{*}という名前でした。父のきょうだいは三人でした。母はシズエといい、ハワイ生まれの二世です。両親はホノムのカンパセプンティーンに住んでいました。父はキビ畑で仕事をし、母は経営者の方々の家の清掃や洗濯をパートタイムでしていました。一番長く続いたのはベビーシッターの仕事です。

私はヒロを北に行った所にあるペペキヨのクリニックで生まれました。四人きょうだいの三番目で長男です。長女マサコは八〇歳ぐらいになると思うが元気で、カリフォルニア州にいます。二女ツルエは二歳のときに亡くなっています。四番目の二男ケネスは三歳違いで、ヒロに住んでいます。

キャンプでは祖父が豚を育てていて、同じキャンプに住んでいた沖繩出身の方々と一緒に仕事をしていました。豚は正月の前に、つぶしていたこともあります。他に覚えているのは、戦争が始まると

^{*}※外務省の「海外旅券下付表」によると、西平宗龜は浦添村字宮城二二四二番地に本籍のある戸主宗光二男で、十七歳のとき父の呼び寄せで大正元年十一月二十八日に旅券が下付されている。
※外務省の「海外旅券下付表」によると、西平宗光は浦添間切宮城村二二四二番地に本籍のある戸主で、四二歳のとき、明治四〇年二月二三日に旅券が下付されている。

きにですかね、祖父が天皇陛下のお写真を持っていたんですけど、家に調べに来る人がいるということで、それを全部焼いて処分したことです。戦争中は門限というか、消灯時間というのがありました。でも戦争中には日本人がボランティアして、兵隊になって頑張ってきたので、日本人に何か言う人はいなくなりました。

小学校はホノム・エレメントスクールに八年間通い、その後一年だけペペキョスクールを出て、ヒロ・ハイスクールに進学しました。そのときに父が亡くなったので、昼間は働いて、夜は一年間技術系の学校に通い、ドライヤーや冷蔵庫などを修理する技術を学び、家庭用品の修理の仕事を去年まで続けていました。

結婚は一九七二年九月二日です。妻は旧姓タニモト(谷本)といい、大阪生まれの二世です。九つのときにハワイに来ました。子どもは、一番上は長男ジーン。三六歳でオレゴン大学とハワイ大学を卒業し、コンピューターで絵を描く仕事をしています。長女のジェーンは正看護婦です。二人ともホノルルに住んでいて、家は夫婦二人ですね。家は一階建てで、台所とベッドルームが三つあります。敷地だけだったら一万平方米フィートはあります。

国籍はアメリカです。宗教は浄土真宗で、ホノム本願寺に所属しています。昔は四〇〇人ぐらいメンバーがいましたが、今はもう一〇〇人ぐらいですね。両親の位牌を持っていて、機会のあるときに拝みをしています。墓はヒロ郊外の共同墓地の方にあります。

私はチャンプルー、ラフテーとかアシティビチが好きですが、妻は沖繩の料理は作れません。夫婦の会話は英語です。父は帰化する



エンジニア仲間と共に [2010年 津波清撮影]

ために英語学校にちょっと通っていたので、英語が少し分かりました。祖父はいつもウチナーグチで話しかけていたので、全然分かりませんでした。新聞は『ハワイトリビューンヘラルド』を購読しています。ラジオは耳が遠いから聞きません。テレビは英語の番組を観ています。NHKはありません。

ヒロの沖縄県人会に入っています。県人会は以前「ファイナリキ」っていいました。沖縄県人会の建物があるのはホノルルだけです。ハワイ島でも前に建設する話があったらしいんですけど、実現はしなかったそうです。

趣味はガーデニング。野菜作りをしています。頼母子はやっていないですけど、両親がやっていたかもしれませぬ。銀行は「ハワイナショナルバンク」を利用しています。沖縄訪問は一九八九年以来四回目です。

【二〇一〇年十月二〇日津波清調査】

USAハワイ州マウイ島ヒロ市

二世としてハワイで暮らし、子どもたちはアメリカ本土へ



トーマス・ホマレ・仲西

二世／ハワイ

一九三八年五月十四日

父はジェームス・蒲・仲西（宮城出身）といいます*。一世なのですが、一九五一年頃に市民権をとり、そのときにジェームスという名前をつけています。母はチヨ（旧姓タマシロ）といいます。父は四人きょうだいの末っ子ですが、上のきょうだいはみんな若いときに亡くなっています。

母は五人きょうだいで聞いています。マウイ島で生まれて沖縄で育ち、十三歳のときに戻ってきたそうです。何歳のときに行ったのかは分かりません。誰と行ったかも分かりません。母たちがハワイに帰るとき、祖母が末っ子のキヨおばさんを離さなかったらしく、この方だけ今も宜野湾市に住んでいます。沖縄に行ったときに二回ほど会ったことがあります。キヨおばさんは九二歳ぐらいですが元気です。沖縄にいた祖父母は、戦争中に亡くなってしまったらしく、どこに遺骨が埋まっているか分かりません。

父がハワイに来たきっかけは、祖父が頼母子で借金をつくってしまい、お金をつくる必要があったからだそうです。父がハワイに来

※外務省の「海外旅券下付表」によると、仲西蒲は浦添村字宮城一〇九番地に本籍のある仲西産利の子で、十二歳四か月のとき、大正元年七月三十一日に旅券が下付されている。



トーマス・ホマレ・仲西さんの両親 [2010年 津波清撮影]

て働いて、そのお金を戦前沖縄に送っていたと聞いています。

父はプランテーションで働き、母はランドリーの仕事をしています。両親とも小学校を終わったぐらいの学歴しかなかったせいとか、特に母は教育に熱心でした。だから私たちきょうだいはみんな大学まで通いました。そのため小学校のときには二年生から六年生まで新聞売りをしていましたし、高校生のおときは学校に通いながら、ホテルのベルボーイやパイナップル缶詰工場で働きました。教育を続けるため、例えば姉はサンフランシスコで働いて弟たちが学校を出るためのお金をサポートしたり、兄もアルバイトをして自分の学費や妹たちを助けたりと、きょうだいみんなで互いにサポートをしています。誰も銀行からお金を借りることはしなかったし、自分たちで奨学金をとる努力もしました。

私が生まれたのはマウイ島の病院です。きょうだい六人の二男として生まれました。セイントアンソニーというカトリック高校を卒業し、ミシガンテクニカルユニバーシティで電気エンジニアリングを学びました。一九六〇年から一九六一年までインディアナ州ココモのジェネラルモーターズで仕事し、その後二年間はシカゴでミサイル防衛をして、再びジェネラルモーターズに戻り、三四年間勤めました。今は年金生活です。

結婚は一九六一年九月十六日です。妻は日系三世のスナエ・レアトリス・島といいます。彼女はハワイ島のヒロで生まれました。小学校も高校もパハラで通っています。看護学校で三年間勉強をして看護婦をやっていました。一九九五年に退職しました。

長男のダレン（一九六二年生）はインディアナテクノロジーカレッジを修了し、インディアナ州のシセロに住んでいて、長女のレイナ（一九六六年生）もダレンの家の向かいに住んでいます。二男ドウエイン（一九六八年生）はインディアナステート大学を卒業し、スーパーエンジニアとして働いています。

国籍はアメリカで、両親もアメリカ国籍です。宗教はカトリックで、仏壇はホノルルに住む兄が持っています。墓は城間にあります。沖繩には墓の手入れもあるので毎年戻っています。沖繩料理は、私が入り込んで作ったり、アンダミソにピーナツバターを入れて食べたりします。年越しのご飯はアシテビチを作りますよ。両親との会話は日本語と英語でした。夫婦は英語ですね。テレビはKIKU・TVで英語字幕のついた「龍馬伝」を観ます。新聞は『ハワイヘラルド』を購読しています。趣味は三線。週に一回集まってグループで習います。頼母子講は父がやっていました。

【二〇一〇年十月二日津波清調査】

USAハワイ州ハワイ島ヒロ市

両親の理解あってハワイ大学へ



ノワキ・比嘉ジュンコ

二世／ハワイ

一九三九年十一月三〇日

父は比嘉三良（安波茶出身）、沖繩ではサンラーですね。移民一世です。浦添で生まれました。父は一九一八年五月三十一日にセイヨウ丸に乗ってハワイに移民してきました[※]。母は二世のナカマツヨシコです。どんな漢字なのかは分かりません。父は私が生まれた頃ぐらゐから、一九九四年に亡くなるまで日記をつけていました。日記には日本にいる祖母のことや故郷を思っている内容があります。日記はほとんど英語で書かれています[※]が、より鮮明に言い表せるところは日本語でさらっと書いてあります。

父がハワイに来る前、父のお父さん、私の祖父とその長男が先にホノルルに来ていました[※]。そして後から家族を呼び寄せるってことで連絡をしたらしいです。でも、父がホノルルに着いたとき、祖父はもう亡くなってしまっていて、父はホノルルのイミグレーション

[※]外務省の「海外旅券下付表」によると、比嘉三良は浦添村字安波茶三〇番地に本籍のある戸主常清の三男で、十四歳のときハワイへ父の呼び寄せで、大正七年四月十日に旅券が下付されている。

[※]『沖縄県史料 近代五 移民名簿I』によると、祖父比嘉常清は浦添間切安波茶三〇番地に本籍のある戸主で、二八歳のときハワイへ、明治三十九年一月十六日に日本を出航している。その長男比嘉松は同番地に本籍のある戸主常清二男で、十四歳七か月のときハワイへ父の呼び寄せで大正元年八月十四日に旅券が下付されている（外務省「海外旅券下付表」）。

オフィスに四日間閉じ込められました。なぜかという、長男はイミグレーションオフィスの場所を探しまわっていたからです。その後、長男は父を引き取りました。父は十四歳のときにハワイに来て、いますので、引き取るときに働かせないでちゃんと学校に行かせる、という念書みたいなのにサインをさせられたそうです。

父は兄と一緒にワイパフに行き、ワイパフ・エレメンタリーを出ました。中学まではワイパフにいて、ホノルル市のイオラニ・ハイスクールという有名な学校に行きました。そして、ワシントン州のユニバーシティに進みました。ストレートにイオラニから大学に行つたわけではなく、とにかくお金がなかったので、フルーツを積む仕事をしながらカルフォルニア・オレゴン・アラスカまでお金を稼ぐ旅をして学校に行きました。入った後もお金がなくなったら、また少しアルバイトに行つて、という風にして大学を出ました。途中、白人の弁護士の家に住み込みでハウスボーイもして、そこで調理士のアシスタントをしていたようです。それから、カリフォルニア州でアルバイトしているときに、一度逮捕されたようなんです。母がいうには、ホノルル港に入ってきたときの働くんじゃなくて勉強するって書いた念書が見つかってしまったようです。そのとき沖繩で一番えらいロイヤル（弁護士）の仲村権五郎さんが保釈金を払ってくれたんだそうです。大学は一九二八年ぐらいに入学して一九三四年ぐらいに卒業しました。専攻は英文学でした。

父は学校を卒業して一九三五年にヒロに来て、一九三九年に結婚しました。父は教職に就きたかったようですが、一世で外国人なの

で仕事ももらえなかったそうです。そんなときに、アダルトスクール、成人学校ですか、その校長先生が夜間学校で教えられるよう採用してくれたそうです。父はその日本語学校で、移民に英語を教える授業や、市民権をとりたいたいと思ってる方に教えていたそうです。これは日本人だけじゃなくて、フィリピン人やコリアン（朝鮮人）、最近になってからはベトナム人とかそういう方々にですね。一九三五年から一九八〇年代までそこに勤めていました。母は又吉病院の事務長として働いてました。母は父と結婚する前に、又吉先生の奥さんの弟と結婚していましたが、離婚して二回目の結婚で父と一緒になりました。きょうだいは五人で、私は長女です。

父は非常に公正な人でした。男の子も女の子もみんなハワイ大学に行きなさい。そこを卒業してからは別に何してもかまわないから、とにかくみんな平等に行きなさいって。私が学校に行けたのも、両親がしっかり理解してくれてたからで、すぐラッキーでした。当時、頭のいい女の子はいましたけど、親が理解を示してくれないので大学に行けなかった子がたくさんいたんです。

私はヒロで小学校を出て、ヒロ・ハイスクールを卒業、ハワイ大学に行き修士号をとるため、ミシガン州立大学に進みました。専門は図書館学です。

最初の仕事は小学校の図書館司書。ハワイ島のハカラウで二年間勤め、一九六六年からハワイ大学のヒロ校の図書館に行き、二〇〇二年のリタイアまで勤め、今も非常勤で勤めています。

一九六六年八月二七日に結婚しました。山口県三世のノボル・ロ

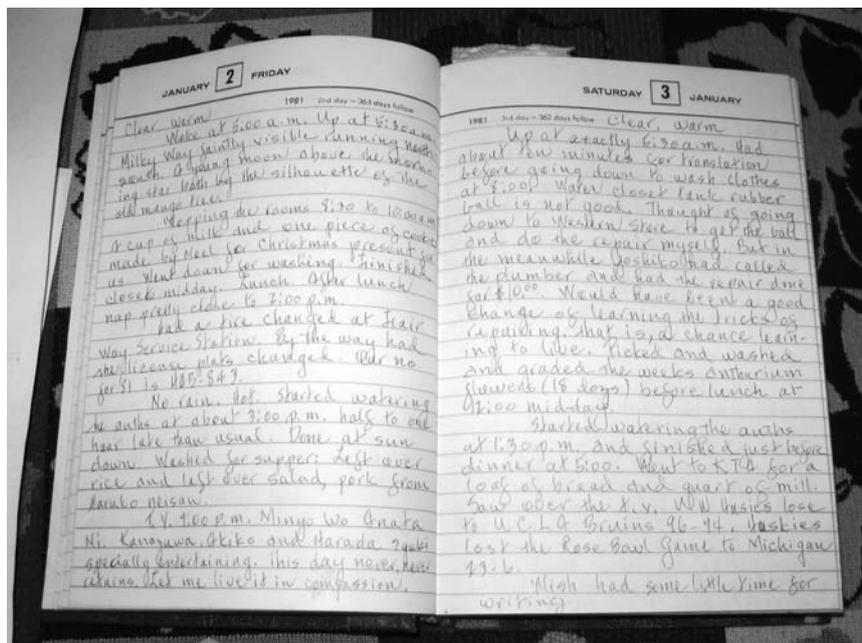
ナルド・ノワキです。お友達で紹介でヒロで知り合いました。両親は、本当はウチナーンチュと結婚させたかったみたいですけどね。夫は一九九二年に亡くなりました。

子どもは三人とも女の子。長女はロワン・ノブコ。一九六八年八月十四日生まれでハワイ大学の短期大学を卒業し、コーヒー会社に勤めていて、一緒に住んでいます。二女ロッシェル・ノリコは一九七一年八月十四日生まれ。コロラド大学で生物学を学びました。三番目のアン・ローリナ・ナオコは一九七三年五月十七生まれ。ヘリコプター会社で働いています。祖父母と一緒に住んでいたため、子どもたちには日本語の名前をちゃんをつけるようにしたんですよ。

国籍はアメリカです。父は一九五〇年代に帰化しています。両親とは英語で話すことが多く、時々日本語でした。夫とは英語と日本語。夫は横田の米軍基地に四年間勤めていたので、日本語がかなり堪能だったんです。子どもたちとは英語。『ハワイタイムス』を読んでいます。『ヒロタイムス』は父が読んでいました。テレビはNHK。英語の字幕がついていますから。「龍馬伝」を観ていますよ。私は現地新聞はもちろん、『ハワイパシフィックプレス』と『ヒロタイムス』を購読しています。沖縄県人会に所属し、趣味はテニスをするんです。私は模合はしませんが、父母が戦前からやっていた。

【二〇一〇年十月二〇日 石川友紀調査】

USA ハワイ州マウイ島ヒロ市



ノワキ・比嘉ジュンコさんの父親がつけていた日記 [2010年 石川友紀 撮影]

真珠湾攻撃を体験、第一〇〇大隊に入隊



宮城盛吉 みやしろ

婦米二世／ハワイ

一九一九年十一月五日

私はハワイ島ヒロのワイアケア・ウカのキャンプシックスで生まれました。父宮城蒲戸（伊祖出身）・母カメがいつハワイに来たか分かりませんが、「ジンモウキー（金儲け）」のためにハワイに来たと聞いています*。小学校一年まではハワイの小学校に通っていましたが、八つのときに母・長男の幸徳・三男のタダオ・四男の重忠^{しげただ}・私の五人は沖繩に行き、両親の実家のある浦添に行きました。ハワイから出るときに母のお腹の中にいた長女のスエコも沖繩で過ごしています。

私は浦添尋常高等学校を卒業した後、那覇にある県立二中に通いました。二中へは汽車（軽便鉄道）を使って、嘉手納線の城間駅から与儀駅まで乗り、そこから歩いて通いました。当時の校長先生は、戦後知事になられた志喜屋先生でした。他にも比嘉秀平先生が英語の先生でおられました。英語の堪能な先生でした。

長男の幸徳は、小学校六年生のときにハワイから来たおじさんが

*『沖繩県史料 近代六 移民名簿Ⅱ』によると、宮城蒲戸は明治四〇年一月十日にハワイへの農業労働として旅券が下付され、同年一月二三日に横浜を起航している。宮城カメは大正五年十二月二〇日に戸主我眞三男蒲戸妻として、夫の呼び寄せでハワイへの旅券が下付されている（外務省「海外旅券下付表」）。

連れて帰りました。四男の重忠は戦争中、台湾の学校にいましたが、病気の治療のために沖繩へ戻ったときに兵隊にとられ、それから行方不明となりました。

ハワイへは十九歳のときに戻りました。あの当時、支那事変が始まり、みんな否応なしに兵隊にとられて出征したため、母が心配したのです。また、ちょうど兄がハワイから一時帰国していたので、一緒に行ったらどうかということで、兄と一緒にハワイに帰りました。一九三七年、数え十九歳のときです。

那覇港から波の上丸で神戸まで行きました。那覇港へはヤーニンジュ、エーカヌチャー（家族、親戚）が見送りに来て、テープを投げて送られました。波の上丸は最新式の船でした。私は二世だったためか、神戸での検査などはありませんでした。神戸から横浜へ行き、プレジデント・クーリッジ号に乗ってホノルルへ帰りました。ホノルルでは父が出迎えてくれ、そのまま父の住むヒロのワイアケア・ウカにあるプランテーションに行きました。そこで一年過ごし、英語を勉強するためホノルルの太平洋学院に行くことにしました。現在でも私立の学校として残っています。学費は頼母子を利用したようです。プランテーションの人はみんな、頼母子をやっていました。太平洋学院に一年ほど通った後、ホノルルのタイムスグリルというレストランでバーテンをしていました。

真珠湾攻撃が始まったとき、私はリバー・ストリートの方で飛行機が飛んでいるのを見ました。そして砲弾の音が聞こえ、黒い煙が見えました。ラジオでは「市民はすべてハウスの中へ入りなさい、

外を歩くな」って何度も放送していました。それから、私たちはすぐスコフィールド（米軍基地）に連れて行かれました。途中、真珠湾から黒い煙が上がるのを見て恐怖を覚えました。まるで映画を観るようで、どうしてこういうことになったのか、と思いました。スコフィールドでの訓練後、第一〇〇大隊に入り、南アフリカとイタリアに出征しました。三、四年ぐらい軍にいて、幸いにも怪我もせず元気で帰ってくることができましたが、戦争の話はしたくありません。

戦後、ハワイ島ヒロに戻り、内藤汽船で一年ほど勤め、ヤンバル出身の二世比嘉友枝と結婚しました。長男アルビンはハワイ大学の職員を勤め上げ、フィリピン出身の妻とヒロで生活をしています。二男の準は電気関係の仕事に就いていました。三男のシゲタダは体に障害があるので今は何もしていません。長女のエミーはハワイ大学を卒業後、ソーシャルワークの仕事をしています。

国籍は二重国籍ですが、日本の旅券を使うことはありません。チャンプルー・テビチ・クーブイリチャーとかをよく食べます。アンダーギーも作りますよ。妻と話するときには日本語も英語も使います。妻はウチナーグチを理解することはできませんが、話すことは難しいです。子どもたちとは英語ですね。私は父の弟の家に養子に行ったので、その家のトートローメーがあります。

若いときにはよく、ヒロのスーパーマーケットやらショッピングセンターなどへ、ウチナーのごちそう作って集まって話をしていましたが、そういうこともなくなりました。

邦字新聞は『ハワイ報知』と『ハワイヘラルド』を購読しています。ラジオ・テレビ・雑誌も英語のもので、NHKの日本語放送も観ます。ヒロ市のフィオキナワ（沖縄県人会）の会員で、趣味は三味線です。沖縄へは何度も行っています。母が生きている間、世界のウチナーンチュ大会にも参加したことがあります。

【二〇一〇年十月二日石川友紀調査】

USA ハワイ州ハワイ島ヒロ市

オキナワであることに誇り



ジェイムス・シンスケ・宮城

三世／ハワイ

一九三五年十一月十八日

私の祖父母が浦添の屋富祖出身で、祖父が沖縄からハワイに来ています。私のおじが書いた記録によると、祖父のジスケは一八七二年に屋富祖で生まれ、一九〇六年に、屋富祖を出て移民したそうです。神戸から船に乗って、ホノルルにやってきたとあります。ホノルルに着いたのが一九〇六年の十一月三日のことだそうです*。

※『沖縄県史料 近代五 移民名簿I』によると、宮城次助は浦添間切屋富祖村二七九番地に本籍のある戸主真志弟として、明治三十九年十月十八日、二九歳のときに日本を出国している。

父宮城シントクはハワイ島コハラで一九一〇年一月三〇日に生まれました。父が三歳のとき、祖父はひとり沖繩に帰ったそうです。その後沖繩で父のきょうだい達が生まれました。男が三人、女が二人いて、名護市に九四歳になるおばのアキがいます。母ハツエ（旧姓ヒガ）はマウイ島で生まれました。結婚当時、父は家具職人を、母はおかず屋の仕事をしていたのですが、両親は離婚してしまいました。

私はホノルルで生まれ、カリヒにあるバレンタイン・ハイスクールに行きました。卒業後に四年間海兵隊に入隊したのち、ホノルルのリーワードコミュニティカレッジに入学しましたが、一学期間だけで退学しました。

仕事は建設業で樋の基礎となるものを作ったり、パールハーバーの停泊場の修理などもやってきました。一九九四年にリタイアした後には網戸を作る仕事をしていましたが、今はやっていません。

戦争が始まったとき、私は六歳か七歳でした。幼かったのであまり記憶に残っていないのですが、ただ覚えているのは、その日飛行機が飛んでいて、パイロットは見えませんでした。日本だとかアメリカだとかというのは分かりませんでした。またそのときに、電気を消して窓を閉めなさいという指令が出たのは分かります。そして門限が決められて、八時以降は外出ができなくなりました。その後日本人は大変でした。日系だから、オキナワだから苦しかったというよりは、みんなが苦しかったです。真珠湾が攻撃されたとき、妻はオアフ島のワイアナエに住んでいたそうです。当時四歳ぐらいで



ジェームス・シンスケ・宮城さんの母方の親戚 [2010年 津波清 撮影]

したが、パールハーバーの方を見たら煙が出ていて、とてもうるさかったのを覚えているそうです。

結婚したのは一九五九年九月十二日です。妻のハツミ・宮城は泡瀬出身の二世で、母が南風原出身の人です。結婚当初からホノルルの今の場所に住んでいます。子どもは娘が一人、トシエ（四一歳）といえます。ハワイ島の男性と結婚し、男の子が一人（二歳）おります。家は二階建てで、ベッドルームが六つあります。一九六九年に家を購入、二〇〇三年に二階を増築し、そこに娘一家が住んでいます。

国籍はアメリカ。ここにいると、よく民族を聞かれるんですよ。どの民族に当てはまりますかっていうのを。それを聞かれたときは「オキナワ」と答えます。「ジャパニーズ」とは違います。オキナワであることを誇りに思っています。

宗教は真言宗。家に仏壇がありますが、父の位牌は沖縄にあります。一日・十五日とかに拝みをやろうと頑張っているのですが、定期的にやるのって難しいです。

夫婦の会話は英語です。子どもたちとも英語を使います。日本語は時々で、ウチナーグチは少し使います。日本語学校に通っていましたが、戦争で学校が閉鎖されたのであまり習っていません。

沖縄料理はゴーヤーチャンプルー・テビチ・ソーキブニ・豆腐はよく食べます。かまぼこも好きです。ゴーヤーは薄く切って、塩を振って梅と砂糖と一緒に漬けて食べるとおいしいです。白米は玄米と混ぜて炊いて食べます。

新聞は現地の『ハワイヘラルド』と『スターアドバイザー』を読んでいます。邦字新聞は読んでいません。テレビはK I K Uで、日本のドラマなどを観ています。あとはNHKです。浦添市人会に入っています。趣味は三味線と家庭菜園です。

沖縄には三回行ったことがあります。最初は一九七九年で、浦添に住んでいた宮城の親戚に会いに行きました。次は二〇〇五年、そして二〇〇九年に行きました。このときは妻のいとこカミー・ヒガを訪ねて名護に行きました。

【二〇一〇年十月十五日石川友紀調査】

U S A ハワイ州オアフ島ホノルル市

浦添市人会長として長年活躍



ジョージ・コーゼン・宮城

三世／ハワイ

一九三七年十月十日

私は三世のジョージ・コーゼン・宮城です。コーゼンという漢字があるのかどうか分かりません。父は二世のミヤシロ・コースケ、母はツルコ・栗国あわくにといえます。父は五人きょうだいの二男です。長姉さん、二姉さんがいたそうです。長男兄さんは若いときに亡くなったみたいです。

父はカウアイ島のサキマナで生まれました。母はどこで生まれたのか分かりません。両親は一九三六年に結婚しました。仕事はケカハでシュガープランテーションをしていて、七万トンのシュガーを産出していました。父は今もカウアイ島にいて、九七歳になります。母は一九九七年に亡くなりました。父は元気でタバコも吸っています。カウアイ島には私の弟妹たちとその孫もいて、毎晩、いつも誰かが一緒に父と夕食をとります。私はカウアイ島ケカハで生まれました。二人の女きょうだいと四人の男きょうだいの長男です。ケカハには沖繩の人がたくさんいましたが、今は以前と比べると少なくなりました。

私はワイメア・ハイスクールを卒業後、ハワイ大学マノア校に進学しましたが修了はせず、六か月間ナショナルガード（国家警備隊）

として働いた後、オアフ島ワイパフにあるオアフ・シュガー・カンパニーで、会社が閉鎖した一九九五年までの三四年間働きました。

その後はハワイ州の臨時の仕事で建築検査の仕事を二年半、それから建築系のコンサルタント会社で、同じように建築検査の仕事をしていました。今はリタイアして、四歳と一歳三か月の孫の子守りをしています。

結婚は一九七〇年七月十八日にしました。妻は三世のユキエ・ジョイス・ギノザといえます。妻の祖父母は金武の人です。商業学校で会計を学び、卒業後は州の運輸関係の部局で働きました。

子どもは娘二人です。長女はニーナ・ミドリといえます。日系人と結婚しました。二番目はクリス・ミユキです。母親が具志川出身というデンロウ・タニオカと結婚し、男の子が二人います。

国籍はアメリカ、宗教はクリスチャンです。位牌はカウアイ島に住む父が持っています。墓は持っていません。言葉は英語です。妻はいくつか沖繩料理を作ってくれます。好きなのはアシティビチ、ゴーヤー。豆腐も好きです。頼母子講は聞いたことはありませんが、やったことはないです。新聞は現地の『ハワイヘラルド』と『アドバタイザー』を読んでいます。

沖繩県人会、浦添市人会に入っています。浦添市人会長を長年務めています。市人会の会費は家族会費が年間十二ドル、個人は六ドル、学生は三ドルです。六五歳以上はシニア割引で家族が年間六ドル、個人が三ドルになります。そして、各市町村人会は沖繩県人会（UHOA）に年間一〇〇ドルを支払い、ホールの清掃も年に二、三回ほ

ど市人会として行っています。

二〇〇〇年の浦添市制三〇周年のとき、市から招待を受けて一週間ほど沖繩に行きました。初めての沖繩です。沖繩は暖かくて、ウチナーンチュもチムダグクルがあり、人が素晴らしいです。

【二〇一〇年十月十六日石川友紀調査】
USAハワイ州オアフ島ホノルル市



ジョージ・コーゼン・宮城さんの父、ミヤシロコースケさん [矢部久美子提供]

二四年間の空軍生活



ローレンス・春雄・西原

三世／ハワイ

一九四四年四月二四日

父は二世の西原ジュンスケ。ハワイ島のハヴィで生まれています。母ヨシコも（旧姓栗国）二世でマウイ島のハイクで生まれています。両親とも城間にルーツがあります。父のきょうだいは男性が二人、女性が七人いました。母は女性四人、男性五人のきょうだいがいたと思います。ハワイへは祖父が十六歳のときに来たようです。

私はカウアイ島のワイメアで生まれました。きょうだいは四人いて、私はその長男です。長女のバーバラ・ミツヨはウィスコンシン州に、二女のリンと二男ナウヴィン・ヒサオはハワイ島に住んでいます。

小学校はハワイ島のカオマカニ・エレメンタリースクールに八年間通いました。生徒は一五〇人ほどで、フィリピン人と日本人がそれぞれ半分ずつでした。小学校を卒業してワイメア・ハイスクールに通い、ユタ州立大学に進みました。大学を三年で中退し、一九六六年一月二六日、二二歳で志願してエアフォース（空軍）に入りました。

最初はテキサスでトレーニングを受けてニューヨークのシラキュース大学へ行き、ロシア語を習いました。それから再びテキサ

スでトレーニングを積み、一九六七年五月にネブラスカの基地に行きました。そこにいるあいだ、沖繩を何度も行き来していました。一番初めに行ったのは一九六八年一月三日。このときは五日間ぐらいいだけの滞在でしたが、一九六九年から一九七〇年の四月までは沖繩の嘉手納基地にいました。そして一九七一年にワシントンDCでラオス語を学んだ後、コザ騒動の五日前、十二月十五日に再び沖繩に行きました。

一九七三年六月にタイ、一九七四年四月に嘉手納、一九七七年七月にネブラスカと転々とし、一九八一年から一九八四年四月まで沖繩に駐在した後、ハワイに帰ってきました。

結婚は一九七二年一月十七日。沖繩にいるときです。妻は嘉手納町出身の古堅マサ子です。ハワイから両親が来て、親戚だけで波之上宮で結婚式を挙げました。沖繩式でやったのですが、日取りが問題で、カレンダーを見たら「この日結婚したらダメ、これもダメ」って、こんな風でしたね。

最後はヒッカム空軍基地に六年間いて、一九九〇年三月にリタイアしました。最後はチーフマスターサージェントという地位でした。空軍には二四年間いました。

リタイア後は歯医者の方に入りました。オフィスはカウアイ島の病院に勤め、去年までハワイ州を退職された方々の福利厚生を担当する部署で働き、今は自宅で医療関係のコンサルタントをしています。

子どもは男が一人、女が三人の計四人です。長男のグレッグリー・ナオキは一九七三年一月十七日に沖繩で生まれています。ハワイ大学を卒業し、長崎で結婚をし、男の子と女の子の双子の子どもがいます。妻は鹿児島の人です。彼は日本の国籍もアメリカの国籍も持っています。

長女ローラ・ナツも一九七四年二月五日に沖繩で生まれました。ハワイ大学の観光学科を卒業しています。子どもは八歳と三歳の男の子二人です。

二女キム・アイコは一九七八年十一月六日生まれました。オアフ島にあるリワード・コミュニティカレッジで学び、連邦政府で働いています。三女キャサリンは一九八〇年十月五日生まれ。ハワイ大学卒業後、カリフォルニアのバークレーで働いています。

国籍はアメリカです。仏壇は持っていません。ハワイでは仏壇や位牌などはだいたい二世からは拝まないですね。でもお盆のときや正月、五月最後の月曜日のメモリアルデーには、線香とお花を持ってお墓へ行きます。

妻との会話は日本語と英語です。子どもたちとも同じですが、長男は日本語を使いますね。方言はあんまり使いませんが、ローラが悪い方言を使っています。「ワジワジー」と言うのを「ワジってる」って言うんです。ブラジルでは古い方言が残っています。きれいで素晴らしいです。

沖繩料理ではアシテビチ・中身・沖繩そばがあります。沖繩そばが一番いいです。私はだいたい日本料理を食べます。アメリカ人の

場合、ステーキだったら一人一枚食べますが、私たちはみんなで切って分けて食べます。他のおかずがあるから、そのぐらいの量がいいです。アメリカ式は肉・野菜・ポテト。私たちは違います。肉は必ず切って分けて、またサラダと何かあるし、ご飯に漬物。ただ、お皿を洗うときはめんどろうですね。ご飯を食べるときは、ローラがいつもテレビを消しています。パンはあまり食べません。二女だけよく食べてますね。

英語の新聞は読みません。ラジオも聞きません。テレビは観ます。スポーツが大好きなので、スポーツとニュースだけ。日本のテレビはあんまり観てないですね。趣味で友達とゴルフやっています。あとは読書。沖縄県人会、浦添市人会に入っています。現在浦添市人会の副会長をしています。頼母子はやりません。三世はやりません。地元の銀行を利用しています。

沖縄には長いこといたので、いい思い出がたくさんあります。高なものひとつは、みんなが笑うけどコザの中の町でした。あつちで日本語を習いました。あるいはオフィスなんかで、大学生たちには英語を教えて、彼らは日本語教えてね。これで普通の会話ができます。祖父母は二世の父にあまり日本語を教えていませんでしたから。

【二〇一〇年十月十五日石川友紀調査】

USAハワイ州オアフ島ホノルル市

沖縄戦を経験、捕虜として渡ったハワイで兄たちと再会



大城政英

一世／ハワイ

新屋^{ミヤヤ}

大正十年三月十二日

私はハワイのカウアイ島のケカハ耕地、マナという所で三男として生まれて、一歳にならない前に沖縄に帰ってきました。

父は大城政正（小湾出身）。十九歳頃にハワイへ行ったらいいですね。最初の一番組で四人で行ったそうです。母は豊見城高安の人で旧姓は新垣、結婚当時はマイノという名前でした。ハワイに来てからカメラに名前を変えました^{*}。私が五歳のときに亡くなっています。写真結婚です。父と母のおじさんがハワイで同じ仕事をしていた縁だったようです。

ハワイから帰るときは、私と二男兄さんの政助、姉のツル子、そして母と一緒に帰ってきたんですよね。父と長男兄さんの政一はハワイに残っていました。でも、家がムートウヤーなので長男、二男を残して父も四〇何歳かのときに引き揚げてきました。戦前ですね。だから、長男の家族も、二男の家族もみんな向こうにいます。

※外務省の「海外旅券下付表」によると、大城政正は中頭郡浦添間切小湾村二番地に本籍のある戸主政仁長男で、明治三十九年十月二十九日下付の旅券でハワイへ渡航した。その後、妻マイノが夫の呼び寄せで明治四十四年十月二日下付の旅券で渡航。大正二年には、政正の父政仁が、子の呼び寄せでハワイへ渡航している。

小湾では海外移民は多かったですね。土地が少ないから。野菜専門でね、海の海岸端から何にも作るのなくて。フィリピンへ行ったのが多かったはずですよ。内地に行ったのも多かったですよ。女姓は紡績で和歌山なんかね。

父は最初からカウアイ島でした。サトウキビの生産でした。聞いた話では、向こうのボスは白人で、馬に乗って革ムチ持って叩いたらしいですよ。父はとても痩せっぽっちだったんですよ。だから、普通の仕事は一緒にできないもんだから、サトウキビの切れっぱしを集める仕事だったようです。だから、賃金は大人の半分くらいだったと思います。

戦争中は、親戚たちと一緒に喜屋武岬まで避難して捕虜となり、若い人たちはみんなハワイに連れて行かれました。北谷の海岸から出港したのが、旧暦の七月七日、ちょうどタナバタの日でした。捕虜になった人はたくさんいたのですが、捕虜は何も着せないで輸送船のなかに入ったんです。そして、ホノルルに着いて收容所に連れて行かれました。收容所は漁港も見えないようなずっと山の奥にあつたはずですよ。そこに一年半ぐらいいて、兄たちと再会しました。今日から軍仕事に行くっていう日に「大城さんじゃないの？」って声をかける人がいたんです。びっくりしてね、「何で私のことが分かるの」って聞いたら「ケカハで一緒だった」って。そして、「明日手紙書いて来なさい。私が出すから」って言うもんだから、手紙書いて渡したら一か月ぐらいして、兄二人がカウアイ島から面会に来たんですよ。私は陸軍病院の建設現場で働いていたのですが、お昼時間

に会おうとして「元気ですか」って一言、二言会話してすぐ、黒人の番兵に見つかって追っ払われてしまつて何も話せませんでした。でも、顔を見ただけでもよかったです。それから半年して、兄たちがホノルルに引越して来たんですよ。そしてね、ちょうど番兵が豊見城出身の二世の多嘉良さんになつてね。その人がいつも連絡して「今日はどこに仕事あるから、そこは面会ができるから」て連絡してきたんです。それからはずつくりですよ。差し入れもものすごいごちそうをもらいました。

沖繩に帰るといふときにね、兄たちが「あんたは籍がハワイにあるから残りなさい」って言ったんですが、戦争が終わつた時期で、もうアメリカ人の顔も見たくないもんだから、「いや、私は家に帰るよ。アメリカの顔見たくないから帰るよ」って帰つて来たんですよ。

戦後、区長を六年半やりました。私が区長をしているあいだ、ハワイの兄たちが呼び出しマイクを寄付してくれて、みんなに喜ばれました。あれは助けられました。妻よし子との間に子どもは五人（男四人・女一人）生まれました。

【二〇〇九年十月十八日石川友紀調査】

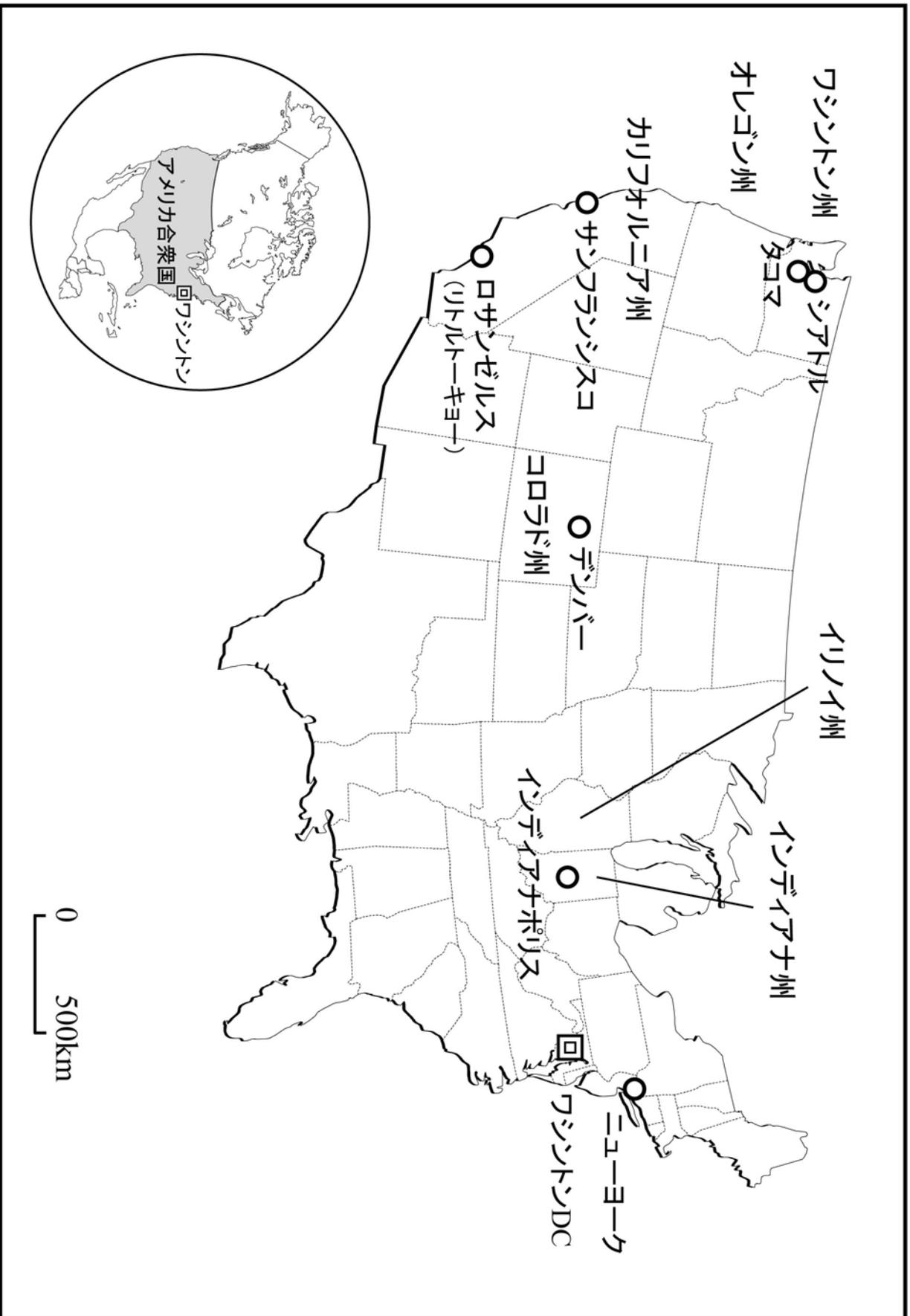
沖繩県浦添市

アメリカ合衆国本土

MAINLAND AMERICA

浦添からの最初のアメリカ合衆国本土への移民は、1919（大正8）年である。戦前の移民数は6人だったが、アメリカ合衆国本土は賃金が高かったため、ハワイからの転住者も多かった。戦後は呼び寄せ移民やアメリカ軍関係者等と結婚した女性たちが、アメリカ合衆国本土で生活をしている。





家族でアメリカ本土へ移民、高等教育を受ける



内間安松 あんしよう

二世／カリフォルニア
一九二三年一月十八日

父は内間安珍、字西原の出身です*。母は旧姓儀間ハルで中城村出身で、私はその二男です。祖父はアンゼンといいますが、父十五歳のときに祖父と一緒に来たようです。アメリカに来たのは、当時日露戦争があつてそこから逃げるため、召集を逃げるためにアメリカに来たといつてました。

父はサンフランシスコの地震にあつて、それから一年後に、ニューヨークに移り、一九二〇年に沖縄に一度戻つて結婚しています。第一次大戦が終わつたときに旅行が許されたということで、それを利用して沖縄へ行つたみたいです。ニューヨークではハウスボーイをしていて、その家のコックにまでなつたそうです。有名な漫画家の家に泊まつていたそうですよ。

私が生まれたのはフェイスノーを少し離れたサンガーという所です。二歳のときにストックトンの南の方のボールデンパークに行き、そこで学校も通いました。校舎はとても立派なものでしたが、今は

※外務省の「海外旅券下付表」によると、内間安珍は浦添村字西原二〇八六番地に本籍のある戸主安瑠の子で、三二歳十か月のときアメリカ合衆国本土へ、大正九年五月九日に再度渡航として旅券が下付されている。なお、同日安珍妻内間ハルも十八歳六か月のとき、夫の同行として旅券が下付されている。

もう残っていませんね。ボールデンパークではイチゴ農家でした。イチゴがよく売れてお金が多少貯まつたんですね。だから「もう農業辞める」つて言つてリトル・トーキョーに行きました。

戦争が始まると、日系人は立ち退きなさいという法律が出て、みんな奥地へ送られたんですね。私は自由立ち退きでデンバーの方へ行つたので、収容所には入りませんでした。当時長男のアンセイ兄さんは東京の大学に行っていました。デンバーでは沖縄出身のミヤシロさんの紹介で、南に十二マイルほど行つた所で農業をしていました。一九四二年の三月に移動させられ、戦争が終わるまでいたね。ここではキャベツとニンジンを作っていました。戦争が終わると、それぞれ自分たちの家に帰っていますよ。

戦争が終わつてから、私は志願して軍隊に入り五年間兵役に就いていました。朝鮮戦争のときには北線まで行きましたよ。それから日本に帰つて来て、名古屋と岐阜のCICの基地に行きました。一九五一年に除隊し、政府からもらった教育費で大学と大学院に通つて修士号をとりました。その後民間会社に勤めて、そこを一九六二年に退職した後、色々と本を書くようになりました。英文でロサンゼルス西南の日本人・沖縄県人の歴史と南カルフォルニアの戦前の柔道の歴史を出版しました。

国籍はアメリカです。二世ですから。宗教は仏教で、仏像を収集しています。仏壇も墓も持っています。私は二世なのでアシテピチなんかは食べないですね。両親はアメリカ式の食事でしたよ。ただ、食事は気をつかつてオートミールや納豆・梅干・肉、それから

フルーツなんかをジュースにして飲んでます。

両親とは片言の日本語で会話をしていました。日本人の妻とは日本で結婚したので、日本語で話をしていました。妻は長崎県佐世保の出身です。結婚当時、軍の仕事で情報部にいたものですから、軍の方から色々いわれて、結婚するのに大変でしたよ。子どもは息子が一人、一九五二年生まれのレイモンドといいます。日本名はフミオですね。UCLAを卒業して、不動産関係の仕事をしています。孫は一人、女の子で、大学を卒業しています。

新聞は『ロサンゼルスタイムズ』と『羅府新報』を読んでいます。雑誌は『ニューズウィーク』と『タイム』を読んでいます。ラジオは聞きませんね。テレビは前に日本語のものを観ていましたが、今は研究に忙しくて観る暇がありません。北米沖繩県人会の会長です。模合には参加していません。

【二〇一〇年十月二五日石川友紀調査】

USAカルフォルニア州ロサンゼルス市

祖父母・父母ともハワイ移民、妻は沖繩一世



トーマス・弘・玉那覇

二世／ハワイ

一九三五年四月二五日

父は小湾出身の玉那覇屋麻[※]。きょうだいはたくさんいたようですが、妹一人以外はみんな小さいときに亡くなったそうです。

父はハワイのオアフ島ワイアワのパイナップル畑で一九四八年まで働き、ホノルルに来て食料品関係の運送業をして、一九五八年に亡くなりました。母はシズ（旧姓セナハ）といい、中城村字津覇の出身です。母は十四歳ぐらいのときに来たようです。両親は六歳違いで写真結婚だと思えます。結婚相談所のような会社があったそうです。

私が生まれたのもワイアワです。沖繩出身の産婆さんが取り上げてくれました。ハワイ島にもいたらしいという話は聞いたことがあります。私には六番目の子どもなので細かいことは聞いていません。

小学校はカイワネで六年間出て、カラカウア中学校に通った後、ハニントン・ハイスクールに行きました。戦争前は日本語学校に

※外務省の「海外旅券下付表」によると、玉那覇屋麻は浦添村字小湾二五番地に本籍のある戸主虎良二男で、十一歳四か月のときハワイへ、父の呼び寄せとして大正二年八月七日に旅券が下付されている。なお、同日虎良妻玉那覇ウトも四一歳八か月のとき、夫の呼び寄せとして旅券が下付されている。祖父玉那覇虎良は浦添間切小湾村二五番地に本籍のある戸主で、三一歳一か月のときハワイへ、農業目的で明治三十九年十月二十九日に沖繩県庁から旅券が下付されている。

も通っていました。戦後は行っていません。ハイスクールを卒業した後は海兵隊に入り、最初はカリフォルニア州のキャンプ・ペンドルトンに一年間行きました。天願のキャンプ・コートニーにも行き、そこで海兵隊を退役してキャンプ・キンザーに行きました。

結婚は一九五八年頃です。私が二三歳、妻は二六、七歳ぐらいのときです。妻は旧姓知花千代といい、一九三一年生まれで嘉手納の千原出身です。結婚当初はお金がないので、キャンプ・ブーンにあった家を借りて住んでました。一時は喜舎場ハウジングにもいました。一九七二年に仕事の関係でキャンプ座間に行き、一九七六年から五年ほどソウルに行つて、また座間に戻ってきました。

子どもは二人います。長女のリン・ヤスコ・トーマスは現在、カリフォルニアに住んでいます。子どもは三人(男一人・女二人)います。二女リネット・ヨシノ・センザルは現在育児中で子どもは二人。弁護士の仕事をお休みしています。長女は沖縄で生まれ、ズケランのクバサキ・ハイスルクルを卒業してハワイ大学に行きました。二女も川崎のハイスルクルに行きました。

国籍は当然アメリカです。妻も市民権をとりました。ゴーヤーチャップルーは好きですね。私はあまりビーフは食べないですね。豚肉と鶏と魚を食べます。魚は大好きですよ。月曜日から土曜日の朝早く、だいたい一時間ぐらい妻と散歩をしています。妻とは日本語と英語を混ぜて話しています。日本語はあんまり分からなかったんですが、日本に行ったときには少し習いました。新聞は『シアトルタイムス』を購読しています。ラジオはあまり聞かないですね。テ

レビは観ていますよ。沖縄県人会ワシントン州沖縄県人クラブに入っています。頼母子は両親がやっていました。

【二〇一〇年十月二六日 石川友紀調査】

USAワシントン州シアトル市



トーマス・弘・玉那覇さんご夫婦 [2010年 津波清 撮影]

MBAを取得 三八年間アメリカの保険会社で働く



金城義男

戦後一世／内閣

一九四三年七月十四日

父は金城太郎。沖縄ではタルーですね。屋号はクシメーダ(後前田)です。父は長男で男一人、妹が二人。長女おばさんのカミィは二年前ほど前に亡くなりました。二女のつるおばさんは牧港にいます。父は大正の人でサトウキビを作っていました。ですから私は南部農林高校に進学しました。母は旧姓新垣キク。五二歳のときに胃ガンで亡くなりました。

私は六人きょうだいの二男です。仲西小学校、仲西中学校を出て、南部農林高等学校の拓植科に進学しました。拓植科の課程では第二外国語として、週に三回ぐらいポルトガル語の授業がありました。ポルトガル語を覚えてくれたのは東京農業大学出身の我部政照先生で、具志先生が数学を教えていました。

私は二男だったので、高校三年のとき最初はブラジルに移民するつもりで先生に相談したら、拓殖大学を紹介され、一九六一年に入学しました。拓大では英語クラブにおいて、英語はすごく好きでした。バンコクのタイ人の留学生がいて、彼らはあまり日本語は分からないが、英語だったら分かるということで、私が間に入って通訳をしていました。

あの頃は本当の開拓っていう教育はしていなかったけれども、海外雄飛、つまり「土の塩となれど」(地の塩なれ)という矢部貞治^{ヤベテイジ}※
学長の言葉を今でも覚えています。それがいつも学生に贈る言葉でした。

大学四年生の後期に、高校の友達がロサンゼルスにいた縁でここに来ました。一九六五年の十月でしたね。わざと卒業しないで、帰って来てから卒業するという風にして、アメリカに来ました。しかしこっちの方がすごくやる気が出て、このロングビーチ校に編入しましたね。そこには神戸大学を出た首里出身の伊志嶺先生という方がいたのですが、この人が「金城君、これからは学士だけじゃダメだから、もっと勉強した方がいいじゃないか」いうことで大学院に進み、一九七三年にMBA (Master of Business Administration) をとって卒業しました。

ここに来るときには、親から旅費として三〇〇ドルもらいました。当時のJAPANESE LINEっていう日本郵船に乗ってサンフランシスコまで二週間ほどかかり、十月の末に来たのを覚えています。横浜港から船が出たのですが、拓大では見送りに「カチマスオドリ」がありましたね。それに見送られましたよ。

サンフランシスコに着いたのはちょうど日曜日でした。ゴールドゲート(金門橋)のサンフランシスコ湾には、いっぱい白いヨットが出ていました。「アメリカっていうのはこんなにもすごいのか」って思いましたね。当時は石原裕次郎がハワイでヨットに乗っている

※第十代総長。昭和三〇年〜昭和三九年。鳥取県出身。東京大学卒。政治学博士。

と試してみんなあこがれていました。ゴールデンゲートをくぐって中に入っただけ。今でも覚えていますよ。当時まだ二二歳ですからね。何の怖さありませんでした。ここに来たときは観光ビザで来ました。でもここで学校に入ろうとしたらこのビザではできないということ、知っている白人の弁護士に頼んで、身元引受人になってもらいました。

翌年の夏には、カリフォルニア大学のロングビーチ校のサマースクールに通ったのですが、まだ英語の力が足りないということで、留年して英語を勉強しました。アメリカにはアダルトスクールといって、無料で英語が勉強できる学校があるんですよ。そこに朝八時半から午後三時まで通いました。サンピエトロアダルトスクールというところですよ。ロングビーチの少し西の方にありました。まだあるんじゃないですかね。

身元引受人のヒックス夫婦は、ともに弁護士をしていました。私は彼の家に住み込んで、学校が終わった後や休みの日に、彼が持っていた牧場の馬小屋の掃除や、馬の世話をし、月に五〇ドルもらったんですよ。彼らにはすごくよくしてもらいました。生活費や学費が足りないときには援助してもらったこともあります。結局、大学には五、六年間いました。今でも当時の夢を見ます。苦労したときのね。当時、日本からロングビーチ校に入ったのは八人いて、卒業できたのはたったの二人です。もちろん、みんな日本で一応卒業して、就職する前にちょっとアメリカにでも行くようになっていた感じの方もいたんですけどね。二人以外はみんな帰っちゃったんですよ。「こんな

に難しいんだったら」という感じですね。

MBAをとったのは一九七三年です。専攻はマーケティングです。卒業前に今の保険会社(New York Life Insurance Company)に就職を決めました。その前にまず、日立重機から入社OKされたんですよ。そしてJohn Deereというアメリカの農機具会社にも受かりました。でも、二つとも働き先は日本だったんですよ。せっかくアメリカで苦労して学校を出たのに、また日本に戻ってサラリーマンをするのは抵抗があったんですよ。それで、保険会社の方に「私のビザはどうするの」と聞いたたら「会社でとってやる」と。それで私は永住権を取ったんですよ。今でも覚えています。John Deereでは条件が月給一二〇〇ドルでした。当時の学校の先生が四〇〇ドル。日立は月給のことは言いませんでした。New York Lifeは六〇〇ドル。New York Lifeでは、まず「いくら欲しいんだ」と聞かれたんですよ。当時の部屋代が一二〇ドルだったので、「六〇〇ドルあれば生活できる」と言っただけ。それしたら「じゃあ六〇〇ドルやろう」と。そして、セールの腕が上げれば、ボーナスとして別にくれるわけです。だから六〇〇ドルあれば生活できる。それでやろうって。今でも覚えてますよ。三〇歳でスタートして三八年目になりました。この三八年間、ずっと同じ仕事です。

沖縄との思い出というのですね、大学院にいたとき、領事館で通訳のアルバイトをやっていたんですよ。当時ニクソンが大統領だったんですが、ここから南へ行っただけにサンクレメンテといって、ニクソンの別荘があったんですよ。ウエスタンホワイトハウスって

いつてですね。そこに田中元首相や三木元首相たちが会談に来ていて、私たちは通訳していたんです。そしてそのとき、沖縄の日本への復帰のことが発表されたんですよ。私は今でも、沖縄県民で沖縄復帰のことを最初に聞いたのは自分じゃないかと思っっているんです。記者会見で「今日は大切な記者会見だから」って言って、沖縄が日本に帰ると発表する前に聞いたんです。実際に沖縄に連絡したことを覚えていますが。だからすごく感慨深い。あれが学生時代の一番強い思い出ですよ。

妻は旧姓山城淑枝といい、看護婦でした。一九五二年生まれで糸満高嶺の出身です。一九七八年に沖縄からパンナム機でハワイ経由でロサンゼルスに来ました。沖縄にいた母が入院していた久茂地の病院で知り合いました。子どもは三人です。長女はクリスティーン・ヨシミです。一九七九年生まれでロサンゼルスに住んでいます。大学院を修了して、医者になるために病院で働きながら勉強しています。小児心理学が専門です。二女はジャーネス・ヨシノ。一九八〇年生まれで、今ニューヨークに住んでいます。メイクアップアーティストとして働き、時々テレビに出たりしていますよ。長男のレイモンドは一九八一年生まれ。ニューヨークで三年間、うちの会社の本社にいたんですよ。一昨年帰ってきて、今はアリゾナの大学院に行っています。

国籍は日本です。グリーンカードは持っていますので永住権はあります。市民権をとるといことは、帰化するということで、投票もOKになります。私は投票権はありませんね。頑固なんですよ。

要するに我々は日本人なんだと。ただその都合に応じてアメリカ人にはなれませんか。よく親からもらった名前を変える人もいますけれども、日本人で通じたいと。簡単な理由なんですよ。

新聞は日本語の『羅府新報』を取っていますね。それと英語の『ウォールストリートジャーナル』。雑誌は『フォーブス』『フォーチュン』とか。全部英語です。日本語の雑誌は取ってないですね。雑誌より本を読むことがあります。今は「竜馬」を読んでいます。ここには三省堂とか紀伊国屋がありますから。ラジオは聞きません。テレビはフジサンケイのニュースを見ているですね。住宅は四回かわり、アナハイムのプールつきの二階建ての大きな屋敷は一九八七年に建てました。別荘もハワイに持っています。家庭ではほとんど日本語です。ゴーヤー・トーフ・アシテレビチなど沖縄料理は大好きです。以前北米沖縄県人会の会長を務め、現在はオレンジ郡における日系協会の副会長を務めています。趣味はゴルフです。十年ほど前は大口の模合にも参加していました。銀行は「リパブリックバンク」を利用しています。

アメリカはやっぱり好きですよ。こうして何にも全然知らない若造にここまでしてくれてね。守ってくれたというのは、大げさかもしれないけれど、でもそういう環境を作ってくれたという意味では、すごくアメリカっていう国に対して感謝しています。特に私たちには、どっちかっていったら少数民族、マイノリティでしょう。にも関わらず、特に商売は、業績さえ上げれば英語が分かるうが分かるまいが、すごく地位が上がっていくわけですよ。そういう面

では、立派な国だと思います。教育も受けさせてくれて、大学も出してきて、仕事もこういう風にしてもらって。何の差別もなく生活できて。だから、アメリカに対して足を向けて眠れない。そのくらい気持ちで、アメリカっていう国はすごくいい国だなと思っていますよ。

【二〇一〇年十月二五日 石川友紀調査】

USAカリフォルニア州ロサンゼルス市

アメリカ在住四九年、家族のいる所がマイホーム



キリアン・好子・山城

戦後一世／屋富祖

一九三六年二月十五日

父は山城興善といいます。屋号はヤマダスクです。父は兵隊で満州に行っていたようで、第二次世界大戦で亡くなっています。きょうだいは五人で私は二女。長男興喜は戦後、ボリビアに単身移民し、後から家族を呼び寄せています。三女の春枝はボリビアに移民したのち結婚して、今はアルゼンチンに住んでいますよ。

浦添国民学校の二年生のときに戦争になり、戦後は浦添小学校の三年生から通いました。浦添中学校、首里高校を卒業して、一年間

幼稚園の先生をしていました。あの頃は特に免許がなくても先生ができたんですね。だから友達と一緒に伊祖で幼稚園の経営をしていました。そのうち、米軍のオーデナンスデポで働くことになり、仕事を通じて夫と知り合いました。夫のウェイン（一九二八年生）はオレゴン州ポートランド生まれで、陸軍に勤めていました。

七年ほどオーデナンスデポで働いた後、一九六二年八月に結婚して、その年の十二月にアメリカに来ました。来る前は少しぶん迷いましたよ。本当は私も、家族と一緒にボリビアに行く予定だったのですね。ただそれ以上に、姉に結婚を反対されてしまった。結婚式を挙げたときも姉は来てくれなかったんです。「もし結婚してアメリカに行ったら縁を切る」と言われて。

一九六三年一月にワシントンDCで一年半ぐらい過ごし、一九六四年から一年はインディアナ州、それからコロラド州に行き、一九六七年十二月には夫だけ韓国に行っただけです。私はそのとき娘が生まれていたの、コロラド州に残っていました。彼が帰って来た後はワシントン州に行き、そして一九六八年一月にはシアトルに引っ越して来ました。夫は二三年間勤めた軍役をリタイア（引退）して、その後はタクシー会社で配車係をしていました。

子どもは二人います。長女のキャサリン、ふだんはキャシイって呼ばれますね。ミドルネームはバージニアで生まれたからバージニア。ウェストワシントン大学を卒業して、シアトルの東の方、レントンに住んでいます。長男ウィリアム・ウェイン・キリアンはオレゴン州でエンジニアの仕事をしていて、子どもが三人います。

国籍はアメリカ。最初はグリーンカードで入ったんです。帰化したのは彼が韓国に行っているときでしたので、一九六七年ですね。市民権は自分から取りました。もう子どもがいるから、ここに永住しないといけないと思ってね。もし何かあつて送り返されたら困るからと、そう夫に話してね。

私はやっぱり沖縄の宗教を信じているけど、お友達に誘われて一応キリスト教の洗礼は受けたんですよ。ただ、最近教会に行っていないですね。ゴーヤーもよく食べます。豆腐とゴーヤーをよく使出し、麩やキャベツを入れてね。アシテビチはあまり作らないですね。ウチナーそばにはかまぼこも入れて。ウチナーのそばはハワイからパッケージになったのが来るんですが、最近韓国の店にも入っているんですよ。私が使っている米は錦というんですけどね、それにちよつともち米を入れて食べています。

日本語の新聞は私のところにはないので、『北米報知』の新聞を友人からまわしてもらっていますね。ラジオはなかなか聞かないですよ。テレビは観ます。日本の雑誌、『文藝春秋』なんかも友達からまわしてもらっています。模合は三味線をやっていたグループでやっています。三味線は二〇年前ぐらいからやっています。ただ、もう年だから三年前に引退したんですよ。一応引退したんですが、今度は箏曲の興陽会に誘われているんです。最近声が出なくなつたので民謡もやらなくなりましたね。踊りもやっています。「かじゃで風」もずいぶんやったし。「貫花」は私たちの十八番でした。模合もウチナーンチュ同士で親睦のためやっています。現地の銀行も利用して

います。

県人会に入っています。今年で発足三〇年ですね。今年の三月は三〇周年記念のお祝いでした。私は発足する際のミーティングに呼ばれて、発起人になつていられるんですよ。最初のうちは、ただ自分たちの小さな集まりという感じだったのが、だんだん大きくなつちやつて。そして今度ワシントン州にもできて。最初ときは会計を務めました。この前は沖縄から「鼓衆ちびんしゆう」の子どもたちが来て、男の子二人を受け入れたりしました。これまで沖縄に帰つたのは四回か五回ぐらいですね。帰つたときには小中学校の同期生たちが同期生会を開いてくれましたよ。

アメリカに住んでやがて四九年になります。やっぱり「住めば都」で慣れてしまいますね。それに子どもも孫もいて。家族のいる所がホームになつてしまいますね。

【二〇一〇年十月二七日石川友紀調査】

USAワシントン州シアトル市

ペルー

PERU

1906（明治 39）年に最初の浦添出身者がペルーに渡航して以降、戦前ペルーへ移民した浦添出身者は180人だった。当初は契約移民でサトウキビや綿花栽培等の農業をしていたが、次第に都市部へ移動し、自由移民として雑貨店や理髪店や飲食店等を経営するようになった。第二次世界大戦中、浦添出身者を含む日本人移民に対し、日本語の禁止や財産の没収などが行われた。

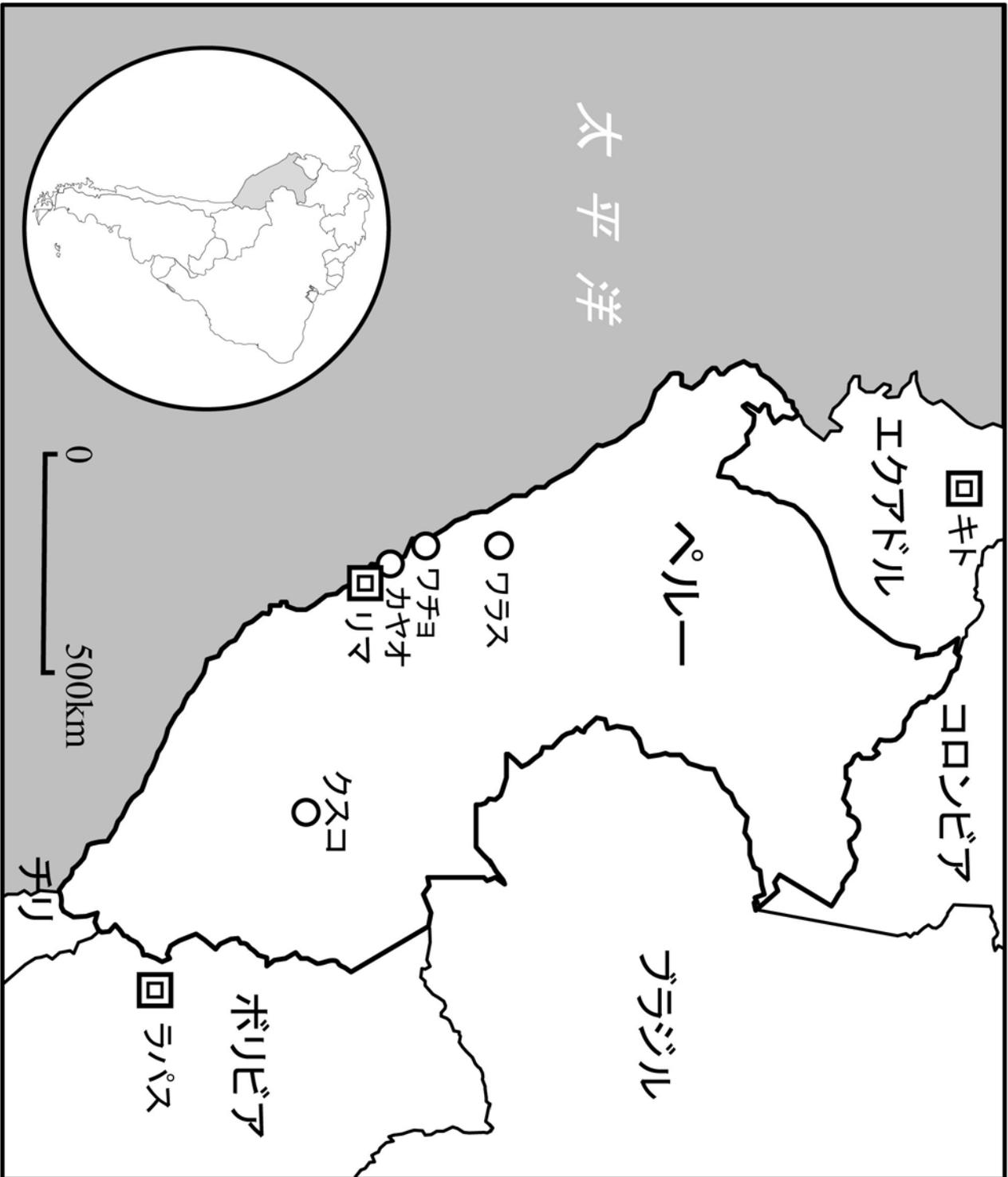
ハワイ・北米

南米

アジア太平洋

国内





ビルカワラ耕地で綿花づくり



与座エイ(旧姓外間)

一世/仲西

ミークラニー

一九一六年十二月二五日

父は外間太盛、母はツルといい、五人きょうだいの三女として仲西で生まれました。本籍は浦添村字仲西で、昔は五二番地といっていました。父は農業をしながら、区長や村会議員をしていました。長女は結婚後、子ども二人を連れてブラジルに移民しました。仲西尋常小学校を六年、高等科二年まで通いました。学校を出た後は、母の手伝いをしていました。家では野菜ばかり作って、キビは作っていませんでした。夏はスイカ、キュウリ、トマト、何でも作ったので忙しかったです。私はそれを売りに行ったこともあります。弟たちがまだ小さかったのでたくさん仕事をしました。女工などに行つたことはありません。

一九三五年、城間出身の与座仁明(一九〇四生)^{*}と結婚し、ともにペルーへ行きました。夫は兄の呼び寄せでペルーにいたのですが、沖繩に戻っていて、再渡航するときに私と結婚したのです。横浜から出発し、ハワイ、サンフランシスコを経由してカヤオ港に着きま

※外務省「海外旅券下付表」によると、與座仁明は本籍が沖繩県中頭郡浦添村字城間四一五番地。ペルーへは兄の呼び寄せで、大正十五年六月九日に下付されている。その後三〇歳四か月のときに再渡航のため昭和十年四月十二日に下付されている。與座エイも夫の同伴として昭和十年四月十二日に下付されている。

した。船は平洋丸で、着いたのは五月十五日だったかと思います。

それから、ワーチヨの北の方にあるビルカワラ耕地に行き、夫はそこで綿花作りをしたので、私も一緒に働きました。面積は相当広かったです。自給のためにトウモロコシなども作りました。夫は戦前、沖繩にいる自分の両親と私の親に少しずつですが送金していました。

戦後沖繩に送ったのは食べ物です。味の素とか油とか。援助開発を通して日本から送りました。あとは着るものです。着るものがないというので、きれいなものを送ってあげましたよ。ミシンも送りました。

一九四〇年の暴動のとき、私たちはビルカワラにいました。あそこは遠いので暴動はなかったです。ただ、一九四二年頃に綿畑を没収されてしまいました。没収されたときは苦労しました。仕事がないので、小作でバナナを作って配達もしました。没収されたものの補償は何にもありません。泣き寝入りですね。敵だったので仕方ありません。

一九四六年頃、子どもの学校の教育のためにリマに出てカヤオに住みました。カヤオでは今の場所で雑貨店をはじめました。あの頃は何もなかったので儲かりましたよ。現在は、一緒に住んでいる長男が引き継いでいます。長女は大学の教授をしていました。二女は日系人と結婚し、ワーチヨに住んでいます。三女は大学を卒業して会社で働いています。

国籍は日本です。帰化の必要は感じていません。ここに永住しようと思ったのは戦後です。戦前は早く儲けて早く日本に帰ろうと思っ

ていたんです。でも戦後、沖縄には何も無いというので、それから腰を据えました。

宗教はカトリックに入っています。仏壇、お墓はあります。やっぱり一日・十五日は仏壇にお茶をあげます。シーミーはありませんがここでは花祭りがあります。毎週日曜日に娘が菊のお花を仏壇とお墓にあげるんですよ。二世三世までは親のやることを見ていますが、その後はどうなるかわかりません。家ではスペイン語と日本語で、ウチナーグチは使いません。亡くなった夫と話すときはウチナーグチでした。ゴーヤーはよく食べます。そばも味噌汁も食べます。沖縄には戦後二度帰ったことがあります。一九六二年頃と一九八二年でした。最初のときは母の見舞いのためです。

【二〇〇九年九月十五日 島袋伸三調査】

ペルーリマ市

父はカヤオで豆腐屋を営む



宮城アントニオ幸太郎
みやしろ

二世／ワラル

一九二六年三月二六日

私が生まれたのはワラルアベニダグレテス一〇八番地。父は屋富祖出身の宮城加真^{かしん}、母は宮城カマ^{かま}※といっています。男六人、女四人の十人きょうだいの三男で、二重国籍となっています。私の父はとても有名な豆腐屋で、私たちも学校を卒業するまで親の手伝いをしていましたので、畑はしたことはありません。一九四〇年にインカ学園小学校を五年生で卒業してリマに出て、十四歳で羽地出身の親川さんという方のお店（親川商店）で店員をしました。そこは男性用の衣料品を扱っていて、この言葉でバサルといっています。店員は一世の方が六人、ペルーの女性が六人、私たち二世が二人という、とても大きなお店でした。

一九四一年から四四年までそこで勤めていましたが、お店が政府に没収されたので、次に本部出身のヨシモトさんのパン屋で働きました。そこも没収されました。あのときはひどかったですね。その頃、豆腐屋を没収された父たちがワラルからリマに来たので、お金を借りて兄たちと一緒に茶店を経営することにしました。

※宮城加真は、外務省「海外旅券下付表」には宮城嘉麻、本籍は浦添村字屋富祖三二二番地と記載されている。妻カマとともにペルーへ契約移民として大正八年十一月十日に旅券が下付されている。

一九四九年に兄が結婚した後、茶店は兄がそのまま続け、私たち家族はカヤオに戻り雑貨商を始めました。二三歳ぐらいのときでした。そのうちリマの茶店を経営していた兄が、家主から立ち退くようにわれたとのことで家族でカヤオに引っ越してきました。そこでもう一軒お店を買い、一緒に雑貨店を営みました。

一九五七年、三一歳のときに照屋エウヘニアマツエと結婚しました。結婚後も家族と仕事をしました。当時頼母子に入っていて、そこで作ったお金で一九六三年に今住んでいる家を建てました。翌年、雑貨店は人に貸し出し、今はそのお店の家賃とアパートの家賃で生活しています。子どもは亡くなった子を入れると五人です。現在、医者をしている二男マヌエルと生活していて、二男と三女は浦添市の子弟研修生として派遣されたことがあります。

宗教はカトリックです。墓地は持っています。仏壇は兄が持っていてお盆はやりませんが、妻の母のお盆はやっています。今年の五月に亡くなった妻とは日本語で会話をしていました。親子で話す場合はスペイン語ですね。妻は沖縄料理とかペルー料理を作っていました。ジューシーとか沖縄そば・チャンプルー・味噌汁はとても好きでした。豆腐やかまぼこもよく買っていました。新聞は『ペルー新報』を読んでいます。現地の新聞は時々買う程度です。テレビはNHKです。雑誌はとっていません。県人会、浦添市同志会に入っています。

【二〇〇九年九月十八日 島袋伸三 調査】

ペルーリマ市

ヒデーヨ・ノグチ学校を創立

金城宮城フアナユキエ

二世ノワラル

一九四一年十一月三〇日



私の父は屋富祖出身の宮城加真かしん、母は宮城カマといひます。父の姓は本当は松田というのですが、移民するときに母が自分の旧姓の宮城を名乗ってしまった、以来、私たちの姓は宮城と聞いています。私は、一九四一年にワラルで六男四女の三女として生まれました。私が生まれた当時、両親は豆腐屋を営んでいました。

一九四四年、私が三歳のときにリマに移り住みました。ここでは豆腐屋ではなくコーヒー店を経営していましたが、十一歳のときにカヤオに移り、ここではボデガ（雑貨店）をしていました。ボデガはフリーマーケットのような感じで、雑貨以外にもアップルパイやゼリーを作って売っていました。戦争中は特別な被害は受けていませんが、家にみんな隠れていました。差別やいじめもやっぱりありました。

カヤオ小中学校を卒業し、ウニベルシダ・カトリカ（カトリック大学）に通いました。仕事をしながら大学で学び、卒業後はプエントピエドラの学校で、五年生の担任を受け持っていました。そこで具志川塩屋出身の日系ブラジル人チンセイ・カナシロと知り合い、二三歳のときに結婚し、男の子一人、女の子一人を授かりまし

た。一九六六年までプエンテピエドラで過ごし、チャカラセル学校に行きました。この学校は経営は私立、財政は国が行っていて、一九八六年に一度潰れたのですが、翌年に夫とともにヒデーヨ・ノグチ学校を創立し、二九年間ずっと経営に携わっています。

長男が大学に入学したとき、ちょうどフジモリが大統領になったのですが、大学の先生たちはみんな日系人嫌いだったので、点数がよくてもわざと点数を落とすということがありました。それで息子は大学を中退して、日本にデカセギに行っていました。当時は私たち日系人がレストランに入ったら、ペルー人のお客さんが「出なさい」という意味で、みんな机を叩くんです。スーパーなどでもすごかったですよ。ここでは本当に生活ができなくて、多くの日系人は日本にデカセギしていました。

一九九六年に病気で夫が亡くなり、現在は長男夫婦と暮らしています。宗教はカトリックですが仏壇はありません。一日・十五日はウチャトーやっています。毎日ウートーしていますよ。家族で話す言葉はスペイン語。夫婦間もスペイン語でした。沖縄料理はゴーヤーチャンプルや豆腐を食べます。あと油味噌、テビチも大好きです。新聞は『ペルー新報』と『プレッサニッケイ』を読みます。あと『Comercio』も読んでいます。NHKはケーブルがないので観ていません。雑誌は『ニッポニア』を読んでいます。日本人会、沖縄県人会、沖縄婦人会に入っています。浦添市の同志会はたまに参加します。頼母子は十五年ほど前までやっていました。



宮城フアナユキエ（左側）さんとその家族 [2009年 島袋伸三 撮影]

レストランを三〇年営む



内間島袋ハルコテレサ

二世ノリマ

エージ

一九三〇年四月一日

父は島袋カマ*といい、浦添の城間出身です。母は宮城ウトといいます*。きょうだいは七人、男四人、女三人いて、私はその二女です。一九三〇年にリマで生まれ、それからカヤオのアシエンダ・タボワラに行き、父はそこでジャガイモなどを作っていました。

一九四八年に十九歳で結婚しました。夫はウチナー一世の内間一郎で、当時二九歳でした。夫は戦争前に母親と一緒にペルーに来たそうです。しかし、ペルーに着いて四二日後に母親を亡くしたと聞きました。結婚後はリマのビトリアに行き、バナナの卸売市場で働いていました。そこには二年ぐらいいて、カヤオに戻って雑貨店を九年間営みましたが、あまり儲けがなかったので、パララの卸売市場でレストランを始めました。

一九七四年、夫は娘と一緒におばを見舞うために沖縄に行ったんですが、そこで心臓麻痺をおこし、亡くなってしまいました。夫が亡くなった後も娘と一緒にレストランを続けましたが、一九八〇年

※外務省の「海外旅券下付表」によると、島袋浦は本籍浦添村字城間三九四番地で、大正八年三月二六日下付の旅券でペルーへ渡航した。その後、妻ウトが夫の呼び寄せで昭和二年二月十日下付の旅券で渡航している。

にお店を閉め、現在は隠居し、長男と長女と暮らしています。

子どもは二人です。長男はファン・カズオといいます。カトリカ大学を卒業し、国立銀行で働いていました。現在はリタイアしています。長女はコンスエルロ・フミエといいます。ふたりとも結婚はしていません。

国籍はペルーと日本、二つ持っています。宗教はカトリカですが、仏壇は持っています。お盆もやるし、七夕もやります。沖縄料理は何でも食べます。テレビはNHKね。沖縄県人会、沖縄婦人会に入っています。浦添の同志会にも入っています。

沖縄へは二回、内地へは三回行きました。沖縄を最初に訪れたのは一九八二年。財産処理のためでした。次は二〇〇六年のウチナーンチュ大会ですね。内地には弟がいるので訪ねて行きました。

【二〇〇九年九月十五日 島袋伸三 調査】

ペルーリマ市

戦後沖繩への引き揚げと再渡航



安座間平敷テレサ房子

二世／カヤオ

一九三二年三月一日

父の名は兼光^{*}、母はハルといい、両親ともに当山出身です。私はペルーのカヤオで生まれました。きょうだいは八人で、私は三女です。学校はホセガルゼに行きましたが、戦争が始まったので三年生までしか行っていません。父はカヤオで、最初の頃は小さいみぞれやアイスクリーム・チョコレート・果物などを売っていました。露天市のような感じで、道の真ん中にお店を広げていました。その後、それを売って大きな雑貨店を始めました。

戦争のとき、私たちもここで苦労しましたよ。その当時はお店を持っていても安心に暮らせない。暴動もされてひどかったです。また、勝ち組負け組もありました。勝ち組の方は、だいたい日本で軍人をしています。父も舅も軍人でした。それで日本は絶対に負けない、今まで負けたことないから絶対に負けてないといつて。

一九五〇年二月十二日、十九歳のときに結婚しました。夫は当時二二歳でした。子どもは八人、孫が十七人います。

戦後、舅と姑が「日本に行きたい」と言つて、一九六二年に一

※外務省「海外旅券下付表」によると、平敷兼光は本籍が沖縄県中頭郡浦添村字伊祖一五八九番地。安和長政の呼び寄せで大正十五年十一月三〇日に旅券が下付されている。妻春は夫の呼び寄せでペルーへ渡航するために昭和四年十二月二七日に旅券が下付されている。

度家族全員引き揚げました。行ってみたら、沖縄は終戦後だから何にもありませんでしたよ。沖縄に戻った頃は那覇市の泊でおそば屋を始めましたが、あの頃はまだドルで、小さいそばが十セント、大きいそばが十五セントでね。全然儲かりませんでした。その後、コザの山内に移りました。夫はメイシ商会という会社に勤めました。ジュークボックスを五、六台ほど購入してバーとかに置いてもらい、そこに入るお金の集金係をやっていました。

沖縄にいる頃、私たちの様子を見に姑のお兄さんがペルーから来ていました。私たちの暮らしを見て、「あんた達ここで何してるの。ペルーできれいに暮らしていたのに。ペルーに戻りなさい」つて。そのおじさんが色々な手続きをしてくれて、一九六四年に再び私たちはペルーに来ました。

ペルーでは親戚と一緒にお金を集めて、パン屋を買い商売を始めました。パン屋の次にクリーニング屋、そしてそのクリーニング屋を売って、もっと大きいクリーニング屋を買いました。今は長男と二男がそのお店を継いでいます。買った年は覚えてませんが、もう二〇年ほどになります。

現在、夫、長男夫婦とその子ども四人の八人で一緒に暮らしています。チリのアントファガスタに別荘を持っていて、チリで一か月住んだり、ペルーで一か月住んだりという生活をしています。また、貸家がチリに八軒ほどあります。車は自家用と仕事用で十台持っています。

宗教はやっぱり沖縄の宗教ですが、カトリックもやっています。

盆や一日・十五日も沖縄の習慣のようにして、それを子どもや孫たちにしつけています。仏壇やお墓もあります。

家で話すときはスペイン語と日本語です。夫はスペイン語ばかりなんです。私は日本語ですから、子どもや孫たちにも日本語で話しています。耳慣れしたら、子どもたちも習ってきますからね。

好きな沖縄料理はアシテビチとかゴーヤーチャンプル。イリチャーグワーも、子どもたちはみんな食べます。

新聞は『ペルー新報』と『ニッケイ』です。現地の新聞は『ララソン』です。テレビはNHKも観ます。浦添同志会、沖縄県人会、中央日本人会に入っています。

模合は前はやっていましたが、今はやっていません。母が沖縄から持ってきた訪問着や三味線をもらいました。今は十七歳になる長男の娘が、その三味線を弾いています。唄も歌います。

現在、とても幸せです。沖縄にもまた行ってみたいと思います。

【二〇〇九年九月十二日 島袋伸三調査】

ペルーリマ市

ペルー国家警察で大佐に



上原伸宗根千恵子

二世／カヤオ

一九四一年一月八日

私は牧港出身の父仲宗根カマ・母カメの娘としてカヤオで生まれました。両親は私が幼い頃は雑貨店を稼業としていました[※]。

私は国立サンマルコス大学で経済学を修め、ペルー国家警察に勤務し、女性としては最高の位の大佐まで昇任しました。三二歳で与那原出身の二世上原フェルミレと結婚し、一男二女を授かり、長男の正エドワルドは石油公団ペトロペルーに勤務しています。

家庭での言語は、夫婦とも二世なのでもっぱらスペイン語です。沖縄料理はイリチャー・テビチ・ジュシーメー・そばなど何でも食べています。新聞は『ペルー新報』、『プレサニッケイ』の他に現地語の新聞も読んでいます。テレビは主に現地の番組を観ます。時々NHKを観ています。

沖縄県人会、日本人会、浦添同志会、国家警察同窓会などに参加しています。模合は親睦目的で三か所に参加、月それぞれ五〇〇ドル、二〇〇ドル、一〇〇ドルばかりです。財産として、別荘と貸家二軒を所有しています。

※外務省の「海外旅券下付表」によると、仲宗根浦は本籍浦添村字牧港二一三番地で、兄の呼び寄せて大正一四年二月四日下付の旅券でペルーへ渡航した。その後、妻カメが夫の呼び寄せで昭和一四年十二月二日下付の旅券で渡航している。

沖縄の思い出は、太田知事時代に招待を受け訪問したことです。

【二〇〇九年九月十二日 島袋伸三調査】

ペルーリマ市

ペルー国家警察長官に就任



宮城マルコムつお

三世／リマ

一九五三年四月二五日

私は父宮城エンリケ・母旧姓新城エオニアの一男四女の長男としてリマで生まれました。祖父の出身地は浦添市屋富祖です。初等教育はカヤオ市の学校で受けました。両親は雑貨店を営っていました。私は国家警察大学を卒業し、国家警察に入りました。

私が四三歳のとき、忘れられない事件が発生しました。一九九六年十二月十七日、青木大使が主催する日本大使館官邸でのパーティ開催中、突然テロリストによる襲撃が発生しました。彼らは官邸の地下から構築したトンネルを通じて侵入し、日系人二十九人、警官一〇人を公邸内に監禁、私も監禁された警官の一人となったのです。

フジモリ政権時代の事件で、大統領自ら指揮を執り、テロによる人質の解放を一九九七年の四月二二日遂行しました。私は職に戻り

テロ対策の任務に就きました。当時ペルーのテロリズム思想指導者はサンマルコ国立大学のグスマン哲学教授で、彼は革命的なマオイズムに心酔した思想家でした。しばらくしてグスマン教授は逮捕され、孤島に投獄されました。そのあいだ、私は大使館武官としてボリビア・スペイン・コロンビアなどに勤務しました。日本へも出張しました。二〇〇四年にワーチヨ市にあるカリオ大学で行政学を学び、国家警察の色々な部署で働きました。

私は二〇〇四年から二〇〇九年までペルー国家警察長官の任務に就きました。現在でもアドバイザーとして警察で働いています。女きょうだいの長女マリア（一九五〇年生）、二女リタ（一九五一年生）、三女ピラール（一九六一年生）、四女マガール（一九六六年生）は、みんな健在です。

一九八五年に三一歳で結婚、妻リーダは当時二五歳でした。子どもは二人とも男です。長男マルコは大学で観光行政学を専攻し、二男デイエゴは情報工学を専攻しました。

父は痛風のため、四八歳で死去しています。沖縄的行事は母の家で行っています。日本料理は納豆以外は何でも食べます。

【二〇〇九年九月十九日 島袋伸三調査】

ペルーリマ市

ブラジル

BRAZIL

ブラジルへは 1917（大正6）年に81人の浦添出身者が移民したのが最初である。移民の多くは広大な土地で農業労働をしていたが、より収入の高い仕事をするため都市部へ移動していった。戦後は呼び寄せ移民をはじめ、産業開発青年隊や南米拓殖移民株式会社等による移民が行われ、浦添からも多くの人がブラジルに渡った。

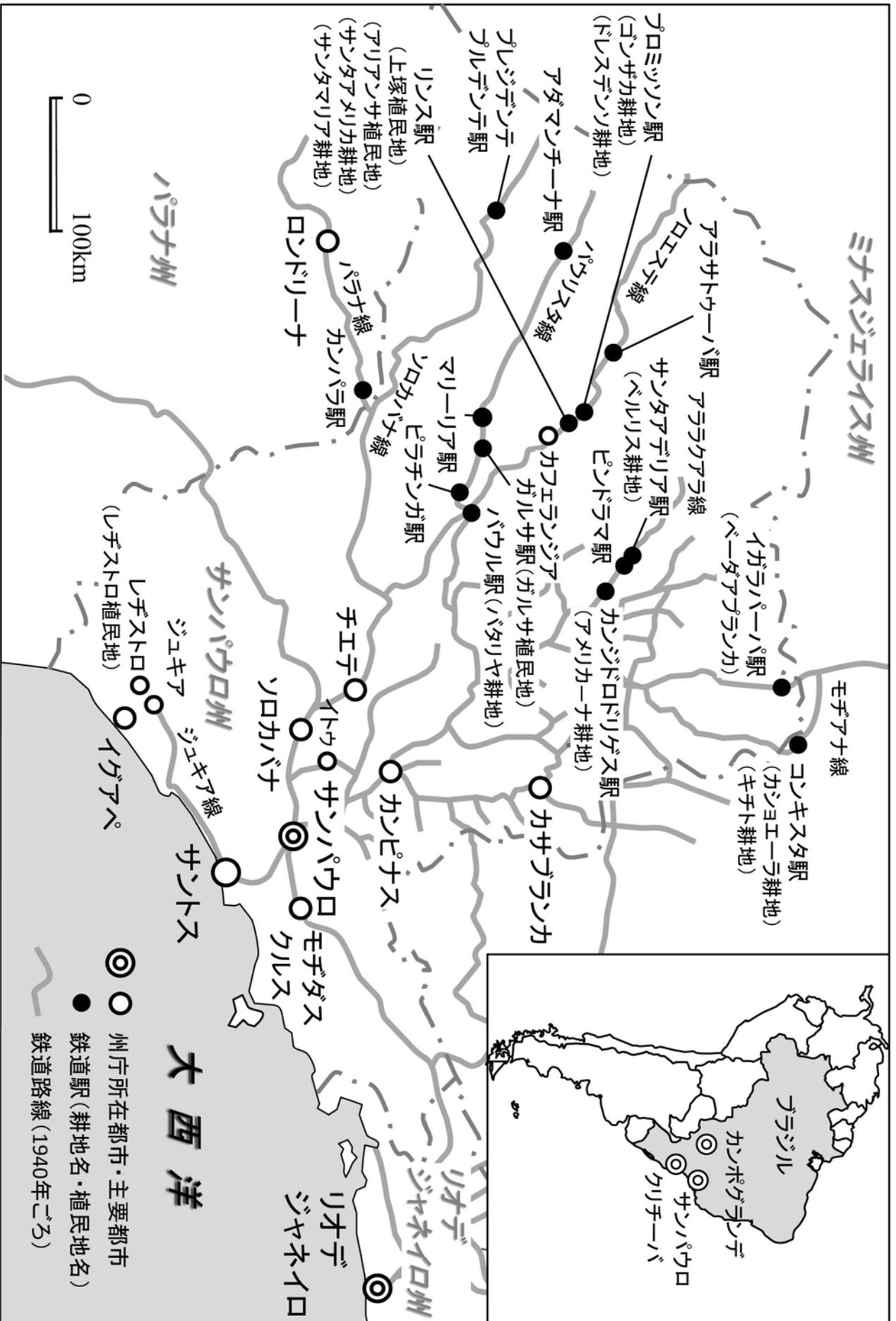
ハワイ・北米

南米

アジア太平洋

国内





自営業で成功し、楽しい余生を送る



栗国重信

一世／那覇市

一九二九年十一月二五日

私は城間の父誠介と母マスの六男一女の四男として那覇で生まれました。母の旧姓はよく知らないです。屋号も分からないです。父は那覇市役所で働いていました。一九三三年の正月、私は五歳で家族八人で移民、移民船はぶえのすあいれす丸と記憶しています。補助移民であつたそうです*。

最初の耕地は、モジアナ鉄道線のファゼンダオタバビツクのコーヒー農場でした。父はマラリアを患い働けませんでした。二年後、同じモジアナ線のイスペラーバ・アグーストに移動し、五アルケールの借地で綿花栽培を行ったがうまくいかなかったです。兄の意見に従い、一九四五年にノロエステ線の大きな町、パウルに移り洗濯業に仕事を変更しました。

私はパウル日本語学校で三年間勉強しました。仕事はうまくいかず、一九四七年に再度アグーストに移動し、綿花生産に従事しました。一七歳になった一九五〇年、私は単独行動し、知人を頼りにマツトグロソ州のカンポグランデへ行き、洗濯屋に就職しました。

※外務省の『本邦移民取扱関係雑件』によると、原籍浦添村城間五二九番地ノ一の粟國誠介・マス夫妻は、子ども六人とともに一九三三年十一月二二日出航のぶえのすあいれす丸で渡航している。

一九五五年、二八歳で結婚。妻は有銘マリア・ツル子(当時二三歳)といひます。

一九六五年に独立してパール(飲食店)経営を始めて成功しました。一九七一年には菓子卸業に転職、十二年間続け、結構儲かりました。そして六五歳には隠居しています。

子どもは三男一女です。長男カール重吉(一九五六年生)は州立大学医学部を卒業。医者として働いています。二男セージ重二(一九五九年生)は大学で経営学を学び、結婚して働いています。長女初枝ソランジ(一九六二年生)は大学で建築学専攻、夫婦とも国家公務員で、子どもが二人います。三男エール重三(一九六七年生)は大学で経営学を専攻し、広告業に従事しています。結婚し子どもが一人います。

きょうだいの半数は亡くなっていて、今は長女・三男・六男と私が入っています。

食事は妻が二世なので、フェジヨアダが中心で、そのなかにテレビは入っています。他に白いご飯・味噌汁なども食べます。山羊汁もおいしいです。新聞は以前『パウリスタ新聞』を購読していました。子どもがポルトガル語の新聞を読んでいます。ポルトガル語のテレビ番組を観ます。

以前は模合を盛んにやっていました。模合のおかげで家を建てることのできたのですが、模合の時代は終わりましたね。カンポグランデ沖繩県人会、日本人会に入っています。二〇〇四年には夫婦で沖繩を訪問しました。現在私は楽しい余生を送っています。

【二〇〇九年九月二七日 島袋伸三調査】

南マットグロツソ州カンポグランデ

人生はブラジルに



内間清三

一世／城間

一九三二年七月二日

私は城間出身の父内間カメと母ウタの五男七女の四男として出生、三歳で移民しましたので一九三五年頃にブラジルに渡航したことになります。私のきょうだい四人は健在で、三人はサンパウロ州で生活しています。

私個人の記憶はノロエステ国鉄道線のアラサトゥーバの小学校四年を卒業したところから始まります。そこで家族は綿花生産に従事していました。

一九四六年、家族は南マットグロツソ州のカンポグランデに移り、三アルケールの土地で野菜生産を始めました。一九五七年二七歳で旧姓当間幸子（当時二一歳）と結婚しました。妻の父は大里村、母は佐敷村出身でした。

独立してタクシー業やバー（飲食店）経営を行い、一九八九年

にブームにのりデカセギに生まれました。静岡県鉄鋼所で働いた後、一九九三年に戻って家を購入、六四歳で隠居しました。

子どもは四男三女授かりました。長女エミ子セリーナ（一九五六年生）は弁護士、長男マサハルジョード（一九六〇年生）は独身。二男清セルシオ（一九六二年生）はカンポグランデ連邦立大学医学部を卒業し医者をしています。三男セイジン・ロベルト（一九六四年生）は結婚しています。四男セイシロウ・アルベルト（一九六六年生）も連邦立大学医学部を卒業、現在ブラジリアで結婚して医者として働いています。三女マイラケリー（一九七四年生）は連邦立大学麻酔科を卒業。結婚して子どもが二人います。

私が育ったアラサトゥーバの移民は大半が日本人で、沖縄県人が少なく、そのため言葉は幼少の頃から日本語しか分かりません。沖縄料理は何でも食べます。新聞は子どもたちがポルトガル語の新聞を購読しています。テレビはもっぱらポルトガル語の番組です。かつて模合はよくやりました。カンポグランデ沖縄県人会、日本人会に入っています。

沖縄訪問は一九九三年、デカセギの際に親戚と対面しました。沖縄的な行事やお盆などはやっていません。墓は長男が住んでいるサンパウロ州のソロカバに家族墓があります。

現在、私たち夫婦・長男・四男の四人で生活しています。私の人生はブラジルにしかありません。

【二〇〇九年九月二六日 島袋伸三調査】

南マットグロツソ州カンポグランデ

ジュキアで人生を送る



内間安一郎

二世／サンパウロ州

一九三六年二月六日

父内間安林*、母トヨ（旧姓親泊）の一男一女の長男としてジュキアで生まれました。学校はジュキア学校を出て、その後十八歳まで隣のレジストロの学校に通いました。爾来両親とともにジュキアで人生を送っています。

父は呼び寄せでノロエステ鉄道のリンスの耕地に入ったが、ファゼンダ農園の仕事があまりにも苦難なため逃亡し、一九三三年に一人でジュキアに転住したといっています。そこで炭焼きやバナナ生産に従事していました。父は戦後沖縄に送金しています。

私は父とともにバナナ生産運送に従事し、父は一九六三年に六五歳で、母は七〇歳で亡くなりました。私はその後、釣り餌用のエビの販売を始めました。現在は野菜を生産しています。

一九七四年に三四歳で結婚、妻は当時二四歳で知念出身の外間シズ子といっています。子どもは一男三女が生まれました。自宅が建つ台地の二・四、二ヘクタールを所有しています。また、自宅下方の低地二・五ヘクタールはジュキア日本人会に寄贈しました。沖縄県人会ジュ

※『沖縄県史 資料編一一 移民会社取扱移民名簿』によると、内間安林は本籍浦添村字伊祖一四九〇番地で、大正八年七月二日神戸出帆の布哇丸でブラジルへ渡航した。

キア支部にも加入しています。

日常生活で使用する言葉は、夫婦子どもとも方言とポルトガル語です。子どもたちとは日本語も使います。沖縄料理はチンヌクジュシー・焼きそば・昆布・山羊・テビチなど何でも食べます。

テレビやビデオで琉球舞踊を楽しんでいます。正月・盆・七夕・毎日仏壇にウチャトーをあげています。県人、日系人のスコーにも忘れずに行っています。宗教はカトリックです。一九六九年に沖縄の親戚を訪問しました。

子どもは長女アケミ（一九七五年）、二女チエミ（一九七七年）、長男アルミル（一九七九年）、三女ヨシエ（一九八九年）の四人で、長男は日本へデカセギに出ている、現在夫婦と妹の三人で生活しています。

【二〇〇九年九月二三日島袋伸三調査】

サンパウロ州ジュキア

通訳与那嶺真次（沖縄県人会会長）



内間安林のパスポート
[2009年 前津政廣 撮影]

大学を卒業してエンジニアに



仲程通二

二世／サンパウロ州

一九四五年九月二五日

私は父仲程通善、母アキ子（旧姓新川）の三男六女の二男として、一九四五年パウリスタ鉄道線のマリーリアで生まれました。父は字西原出身です*。一九六七年パラナ州のクリチーバ市の予備校を出て、一九六八年にサンタカタリーナ大学機械工学部に入学。私のきょうだい九人のうち男三人、女二人は大学を卒業しています。

一九七一年に卒業し、一九七二年サンパウロ市のコンベイヤ製造会社に就職しました。一九八二年にサントス市の機械修理会社に移りました。一九八六年にはカンピーナス市に近い場所にある会社に転職、一九九六年に退職しました。

その後、知人の推薦で群馬県伊勢崎市にあるホンダの部品製造工場で一年ほど働きました。一九九八年に退職してサントス市に居を構え、現在に至ります。

一九七二年、二八歳のときに妻（当時二四歳）と結婚。妻の父は愛媛県、母は熊本県出身です。子どもは三人です。

私は父の弟の位牌を引き継いでいます。カンピーナスに家族墓が

あり、クリスマスには家族が集まります。

新聞はサンパウロとサントスのポルトガル語新聞を購読しています。二世なので現地の金融機関を利用しています。模合はしたことがありません。テレビは時々NHKを楽しんでいます。

子どもは、長女はサントス医科大学を卒業し、検察庁勤務医師として働いています。長男はサンパウロ大学(USP)土木工学を卒業。二男も同じ大学で経済学科を卒業して、ベルギーの経営コンサルタントに勤務しています。子どもたち三人が浦添市の研修でお世話になりました。

父の前妻にあたる方の娘が浦添にいて、一九九四年に面会しました。

【二〇〇九年九月二三日島袋伸三調査】

サンパウロ州サントス市

通訳 与那嶺真次（沖縄県人会会長）

*『本邦移民取扱人関係雑件』によると、仲程通善は、昭和五年七月十二日、神戸よりもんで丸で出帆。行先はノロエステ線プロミッソン驛トレスデンソ耕地となっている。

ペルーからブラジルへ転住した祖父に呼び寄せられて



宮城茂行 みやしろしげゆき

戦後一世／屋富祖

イリイリジョウ

一九三九年十二月一日

神山明子（旧姓宮城）

戦後一世／屋富祖

イリイリジョウ

一九四一年九月二五日



神山…祖父・宮城ジロウは、私たち兄妹の父・善吉を親に預け、妻のツルとともにペルーへ移民していました[※]。父が四歳のときのことです。しかし、夫婦二人でペルーから逃げて馬に乗ってアンデスを越えてボリビアに行き、そこでおじのゼンコウが生まれました。その後、祖父母、ゼンコウおじさんはアマゾン川から船でブラジルのサントスにきました。ゼンコウおじさんは最近まで元気だったので、この話はおじから聞いたことです。

一九五二年、私たち兄妹は祖父とおじの呼び寄せで、親戚の家族六人[※]と一緒に来ました。沖繩から神戸まで船で行き、そこからチチャ

※『沖繩県史 資料編十一 移民会社取扱移民名簿』によると、宮城次良・ツラ夫妻は本籍浦添村字屋富祖三二八番地で、大正八年四月四日横浜出帆の安洋丸でペルーへ渡航した

※屋比久孟清編著『ブラジル沖繩移民名簿』によると、宮城善吉を家長とする五人は、チチャ

レンカ号で一九五六年七月七日にブラジルに到着した。

レンカ号に乗りました。身体検査などはすべて那覇で行い、一週間ぐらい神戸にいました。私たちの旅費は祖父が準備しました。

宮城…アフリカ・アルゼンチンに寄ってブラジルに着きました。

神山…ブラジルでは祖父が迎えにきてくれました。そこから汽車に乗りました。夜の九時四〇分頃にサンパウロを出たことを覚えています。親戚たちはリンス駅で降り、私たちは祖父の住むアラサツーバに行きました。だいたい十六時間ぐらいかかりました。

宮城…アラサツーバでは野菜を作っていました。

神山…お米も作っていました。一九五六年には祖父の呼び寄せで父がブラジルに移りました。その二年前に母が沖繩で亡くなり、父は後妻と腹違いの妹を連れて来ていました。旅費は浦添にある土地や家売って自分で工面したようです。でも一年ぐらい経って、その後妻と妹は沖繩に帰ったので父は再婚し、その再婚相手の兄を頼って一九五八年十二月にサンタクララにきました。移民するとき、父は三味線を二棹持つてきました。自分では弾かないけれど持つてくるんですよ。他にもミシンやレコードも持つてきました。

宮城…サンタクララではフェーラ（露天市）でチンウヤー（着物売り）をしました。浦添にいた頃の父は、屋富祖の区長をしていました。そこでは野菜・トマト・ジャガイモなどを畑で作り、農業をしていました。高齢になっても新聞を老眼鏡もかけずに読み、世界情勢にも関心がありました。父は沖繩県人会館の土地の購入や建設に携わり、相談役を務めたこともありました。

私は西原町出身の三世幸地ヨシコと一九七一年に結婚し、子供は

二人います。長男カールルイスアルベルトは私と一緒にサッカーボールを作る会社を経営し、従業員は三〇人います。二男カールルイスアウグストもそこで一緒に働いています。

神山…私も兄も、ブラジル国籍を持っています。私は一九六九年に国頭村安田出身の神山義美と結婚しました。彼は開発青年隊の一員として移民してきており、私たちが結婚した頃はフェーラを営んでいました。子どもは二人おり、現在長男マルトスは神奈川県厚木に、長女カチャ・ノリ子は神奈川県横浜市にいます。私も一九九四年から二〇〇六年まで日本で働いていました。夫は一九八九年から日本へ行き、二〇〇六年に一緒に帰ってきました。夫とは方言とポルトガル語で話をします。テレビもブラジルの番組を観ます。

宮城…現在は浦添市郷友会の会計をして六、七年ぐらいになります。青年会長もやっていました。家庭では夫婦・親子ともポルトガル語ですが、県人会や郷友会ではもっぱら沖縄方言を使っています。沖縄料理をよく作り、ゴーヤー・シブイ・トーフ・アシテビチが好物です。模合も月一回参加しています。ヤマトンチュは信用のある人を入れています。現地のブラジル銀行も利用しています。

【二〇〇八年八月二日 石川友紀調査】

サンパウロ市サンタクララ



自社で製造されたサッカーボールと宮城茂行さん [2009年 前津政廣撮影]

三〇代で父母・子どもを連れてブラジルへ移民



新垣トミしんがき（旧姓新垣）

戦後一世／沢岬
次男上殿内ジナシイノドウウチ

一九二六年十二月十五日

私は父新垣盛俊、母ナへの五人きょうだいの末っ子三女として生まれました。母はブラジルに来る前に沖縄で亡くなり、父はブラジルに来た後の一九五八年に亡くなっています。両親は沢岬で農業をされていて、畑や田んぼがたくさんありました。父は沖縄にいたときに篤農家として一九五三年に浦添村から表彰されたことがあります。私は浦添尋常高等小学校を卒業した後、中学には行かず家の手伝いをしていました。

一九五七年八月、祖父のいとこの新垣長俊さんの呼び寄せで沖縄を出ました。最初から永住のつもりだったので、財産は全部片づけに来ました。旅費は日本政府から借りましたが、後から返さなくてもいいことになりました。神戸で一週間過ごした後、八月十五日に横浜港からブラジルに向けぶらじる丸で出発しました。ロサンゼルス・パナマ運河・ベレン・リオデジャネイロに寄り、同年十月十五日に四一日かかってサントス港に着きました*。

※屋比久孟清編著『ブラジル沖繩移民名簿』によると、家長新垣亀一・妻トミ・父盛一・母サヨ・長男盛助・二男盛栄・長女幸子の七人家族でブラジルへ渡航している。

ブラジルではサンパウロ州のトッパンで野菜作りをしていました。

屋富祖出身の宮城さんのところで一年間農業をしました。その後南マットグロッソ州ナビライに行き、四年間熊本県出身者のコーヒー園にいました。働きながら同じ南マットグロッソで二五アルケールの原生林を購入し、開墾してそこでもコーヒーを作りました。もう少しで収穫というときに霜が降ってしまい、すべてだめになりました。その後ドラードスで四年間野菜作りをして、それからバウルの方でも野菜作りをしました。葉野菜、トマト・玉ねぎなど何でも作って、毎日のように野菜を卸しに行きました。

夫の新垣亀一は沢岬出身の同じ門中の人です。三年前に亡くなりましたが、生前は浦添郷友会の役員もしていました。子どもは男五人と女二人の計七人おられます。長男の盛助は金物店を経営しており、二男の盛栄は神奈川県にデカセギをしています。国頭村出身の二世と結婚し、子どもが四人おられます。三男は二四歳のときに仕事上の事故で亡くなり、四男ヨシオ、五男キヨシは現在ボリビアにいます。長女幸子、二女安子・マリアもそれぞれに家庭を持っています。一九七一年頃に家を購入し、現在は貸家が二軒あります。

国籍は日本です。仏壇も墓もあり、一日・十五日には仏壇にきちんとお供えをし、お線香をあげています。彼岸祭り・七月正月もお供えをしています。子どもたちは特に宗教に入っていません。夫がいた頃、家ではウチナーグチで話をしていました。子どもたちはブラジル語（ポルトガル語）ですが、親子の会話は日本語です。沖縄料理はゴーヤー・ヘチマなどを使いンブシーも作りました。邦字新

聞は購読していませんが、日本語のNHKのテレビをよく観ます。また、日本語のビデオもレンタルして観ます。模合には参加せず、現地の銀行をよく利用します。

これまでに沖縄に二度帰っています。一度目は一九八一年で、みんな元気でやっているかなと思つて一人で行き、二か月間滞在しました。二度目は一九九四年に夫婦で行き、二週間は沖縄、残り二週間は日本にデカセギをしていた息子の所に行きました。世界のウチナンチュ大会とかは行ってないですね。

【二〇〇八年八月二〇日石川友紀調査】
サンパウロ市カーザベルデ地区

日本政府によるブラジル移民



米田正吉
まさよし

戦後一世／沢岬
上仲門
カミナカシヨウ
ウチノカ

一九四〇年六月五日

父米田久五郎、母スエの長男として沢岬で生まれ、浦添小学校、浦添中学校を卒業しました。父は男三人、女三人の六人きょうだいの三男なのですが、戦前、祖父母は父と女のきょうだいを沖縄に残し、長男・二男を連れてブラジルに移民し、成功したそうです。祖父母はブラジルで土地を買い、それを長男・二男に与え、自分たちは沖縄に戻ってきたと聞いています。そのためか、父はブラジルに行きたがっていました。戦後、移民ができるということで申し込み、ブラジルにそのまま残っていた二男に呼び寄せ人になってもらい、私たちはブラジルに移民しました。

沖縄の土地は全部売り、神戸の移住センターで五日間ほど滞在した後、ぶらじる丸に乗って神戸港を出航しました。船には沖縄出身者が十二家族ぐらいいました。旅費は日本政府が出しました。五七日間かけて一九五七年十月十一日にサントスに着きました※。

最初はサンパウロから四〇〇キロ離れたカフエランジャで四年間

※屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』によると、家長久五郎・妻スエ・長女政子・二女竹子・長男正吉・二男正雄・三男正秀・四男政弘・五男和男・三女京子の十人家族でブラジルへ渡航している。

野菜作りをしました。カフェランジャは沖縄植民地と呼ばれていた所です。その後、パウルーで五アルケールの土地を購入し、そこでも五年間野菜作りをしました。一九六六年頃にサンパウロのカーザベルデでクストウーラ（縫製業）を十年ほどした後、一九七六年からスーパーマーケットを始め、今は三人の子どもたちが経営をしています。スーパーはカーザベルデから二〇キロ行った所にあり、ブラジル人従業員を五五人雇っています。スーパーの土地も建物も購入しました。

移民当時から永住の決意でしたが、国籍は日本です。帰化する必要を感じたことはありません。妻のセツコ・ルーシアは内間出身の金城亀の娘で二世になります。持ち家の他に二八アルケールほどの畑があつて、今はブラジル人に管理を任せて、そこでトウモロコシなどを作っています。ソロカバーナの近くには別荘もあります。宗教はカトリックです。仏壇は父のものがあつて、墓もあります。妻とは日本語とポルトガル語、子どもたちとはポルトガル語で会話をします。妻は二世なのであまり方言は話しません。新聞は『オキナワタイム』という月刊紙を読んでいます。現地新聞もよく読みます。ラジオ・テレビともポルトガル語のものを聞いたり、観たりします。浦添市郷友会と沖縄県人会に所属しています。模合は今はやっていませんが、五年ほど前まではありました。

【二〇〇八年八月二〇日石川友紀調査】

サンパウロ市カーザベルデ地区

おじの呼び寄せでブラジルへ



知念千代子

戦後一世／屋富祖

カミーチニン

一九三〇年七月十日

父知念嘉明と母ツルの三女です。男五人、女三人の八人きょうだいで、長男と三男は戦争で亡くなり、二男は沖縄にいます。長女は戦前に結婚してハワイに移住し、最近亡くなりました。四男と二女は沖縄にいましたが、亡くなりました。五歳下の五男はブラジルに来ており、ブラジル人と結婚して男の子が一人おります。

私は一九五一年に同じ屋富祖出身の知念盛一と結婚、一九五七年に戦前移民していた夫のおじの呼び寄せで、自費でブラジルに移住しました^{*}。ブラジルには夫・私・二人の息子長男博孝と二男一文の四人で来ました。チサダネ号に乗ってきましたが、あときはボリビア移民もたくさん乗っておりました。ブラジルへはダンス等を持ってきました。戦後、ハワイの姉が送ってくれたミシンも持って行きました。アンダナービー（油用鍋）もまだあります。使っていないけれど捨てるのがもったいなくて。子どもたちの自転車も持って行きました。アフリカ経由で十二月二四日にサントス港に着きました。

^{*}屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』によると、知念盛一・千代子夫妻は、子ども二人とともにチサダネ号で一九五七年十二月十四日にブラジルに到着した。

私たちは夫のおじと一緒に、サンパウロから三時間ほど行ったヒュークランドという所で養鶏業を四か年しました。そこには鶏を三〇〇〇羽ぐらい飼いました。畑もやりました。畑仕事はしたことなかったもので、最初は水を担ぐのも肩が痛くてね。初めは底に水を少し入れて、練習していました。でも、仕事はつらいし、子どもの学校のこともあったので、サンパウロに出ました。仕事はフェーラ（露天市）で洋服の仕事をやっていました。フェーラを五年、パステーラ（パステース売り）を九年やりました。それから子どもたちが日本にデカセギに行ったので、夫も私も仕事を引退しました。

二〇〇〇年に夫が亡くなりました。フェーラは長男夫婦が続けていて、サトウキビのジュースを売っています。二男夫婦はクリチーバで貸衣装店を営んでいます。ブラジルで生まれた長女は大学を卒業して事務の仕事をし、二女はデカセギ先の浜松で日系二世と結婚。去年女の子が生まれて今年帰って来ました。

私自身、これまで三回沖繩に行っています。初めは一九六九年で母のトーカチのとき、二回目は母の十三年忌の一九九〇年、最後が去年で、娘の出産で浜松にいたので、沖繩に二週間ぐらい滞在しました。家は二階建てで、長男夫婦と暮らしています。国籍は日本です。移民してきた当時から永住のつもりでした。宗教はやっぱり仏教です。仏壇もあります。一日・十五日、お盆なんかみんなで拝みます。沖繩と同じです。ただこっちは新暦でやっていますね。でも、これを忘れたらいけないです。私は砂糖天ぷらが好きなので、自分でも作ります。ゴーヤーもあったら毎日食べます。シブイ・ナーベラー・

チブル何でもありますよ。本当に沖繩みたいです。夫とはウチナーグチで話していました。子どもとはポルトガル語も使いますが、うまく話せないので主に日本語を使っています。新聞は『サンパウロ新聞』（タイムスサンパウロ）ですね。こちらの新聞は読んでいません。ラジオは聞きます。沖繩県人会、浦添市の郷友会に入っています。この前、婦人会で踊りに参加しました。頼母子は親睦目的で婦人会のメンバーでやっていました。現地の銀行も利用しています。一週間に二回、一時間運動をしています。現在、週に四回友人の仕事を手伝っていますが、それが楽しみですよ。

【二〇〇八年八月二六日石川友紀調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

戦争孤児からブラジル移民へ



當山全勝

戦後一世／大平

アガリマストウヤマダフワ
東当山小

一九三八年九月六日

父は當山全吉、母はウシといい、本籍は浦添村字大平一三八番地です。きょうだいは男三人に女二人です。戦争で両親が亡くなり、

戦争孤児として喜如嘉の孤児院や田井等の孤児院に入っていました。十二歳から新聞配達の仕事をしていたので、中学校に通った記憶はあまりありません。浦添小学校、浦添中学校を卒業し、高等学校を卒業する前にブラジルに来ました。十九歳のときです。本当は兄がブラジルへ行く予定で南拓の株を買っていましたが、私が先遣隊として単身渡航しました。あの頃の沖繩は、学校を出ても仕事がなく「このままではだめになる」という感じでしたし、毎日ひもじい思いもしていました。渡航費用は友人たちからの餞別と兄が準備してくれたお金です。貸付資金は利用していません。船はテゲルベルグ号でした。私たち先遣隊は中頭郡を中心とした十四の市町村二七人でした。

一九五八年二月十二日、サントス港に着いた後サルトに行きました。そこには四か月いて、次はトッパンでカマラー（日雇い）をしました。それから運送業を手伝ったりしました。メルカード（市場）でカレガドル（運搬業）もやりましたが、あまりにきついで辞めました。嫌いになって沖繩に帰ることも考えました。本当、動乱の人生です。一番長く続いた仕事は畑です。

宜野湾市志真志出身の二世千代子と結婚し、子どもは三人います。

現在、自宅で歯医者をしている長男のアレモンドと一緒に住んでいます。屋敷が二、三軒あるので一つ貸家として提供し、家賃収入で生活しています。二男エドワードは大分県出身の日系二世と結婚し、三人の子どもがおります。長女アリンは屋慶名出身の一世と結婚し、十二歳になる女の子がいます。子どもと話すときは日本語です。し

かし、妻と話したり家族では沖繩方言を優先します。テレビはNHKを観ます。ラジオは聞きません。小説が好きです。宮本武蔵が好きなので、サントアンドレ会館の二階にある図書館にみんなで古本を持ち寄って貸し借りをします。趣味はウチナー相撲。昔はトゥイグワーオーラサー（闘鶏）もしました。宗教は祖先崇拜ですが、仏壇はありません。頼母子は仕事を辞めてからしていません。やっていた頃は、友達同士二〇人で一年八か月もかかり、一か月に日本円で七万ほどでした。割と大きい金額です。何かの資本にとりより「あれがチュウナマネーアラン、アレガ トラサー（今回はあの人がお金ないから、あの人に渡す）」という感じで、お互いに融通し合っていました。

【二〇〇八年八月二日石川友紀調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

移民して何ともいえない心残り



又吉清栄

戦後一世／牧港

ンタータマエ小

一九三二年十月八日

私は父又吉清、母カマド（旧姓仲西）の二男二女の長男として生まれました。父は戦後、軍作業で消防隊として働いていました。私は浦添小学校を五年で中退し、軍作業、そして城間で板金工として働きました。結婚し子どももいたが、いつも妻と仲たがいでいたので南米拓殖移民に応募し、移住の先発隊の大工として妻子を残して一九五八年サンパウロ市の北に位置するイトウのボアビスタに入植しました。しかし、入植地では具体的な計画の実施が行われず、土地の配分もなされず、先発隊は後発移住者たちを迎えました。結果、移住者たちは四散に追いやられ、悲惨な思いで入植地からみんななくなりました。あの広大な土地はどうなったであろうか。恨みの限りだ。

私はあえて言いたい。「移住に際しては特別の配慮をいただいた又吉村長など南拓の主要計画をした人物は、構想ばかりが大きく具体的に何とも計画はなかった」と。

私はその後、一九五八年にパウリスタ鉄道のトッパンの嘉数さんの農場に手伝いに出ました。同年十二月にはリオクラーダの又吉亀

千代さんの綿花作りの手伝いをし、一九六〇年に亀千代さんの四女春江（当時二三歳）と結婚。独立して野菜作りをしました。

一九六二年にサンタクララに転住し、フェイラ（露天市）を始めました。一九七五年にパステース売りに仕事を替え、一九七八年に現在の住所に移ってきました。

一九九〇年、妻が病気になり仕事を辞めました。二〇〇八年に妻は乳ガン、糖尿病で亡くなりました。子どもは三男一女が生まれ、先妻との間には長男がいます。沖縄訪問は一九八七年と一九九九年に行きました。

移民して自分に何ともいえない心残りがあるだけだ。

【二〇〇九年九月二四日島袋伸三調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

最初は気乗りしなかったブラジル移民



又吉正雄

戦後二世／牧港

ンタータマエ小

一九四二年十二月十八日

私は牧港生まれの父又吉清、母カマド（旧姓仲西）の二男二女の二男として生まれました。中部農林高等学校を卒業し、国際工業所に勤務、溶接業務に従事していました。

ブラジルへの移民は父が希望しました。父が、兄のいるブラジルに移民したいと言ってきたのです。私はあまり気乗りしなかったのですが、恩師も勧めたので両親と三人で移民しました。渡航費の補助金を兵庫県人として受け、一九六二年三月、ボイスベン号で出発し、五月三日にブラジルに到着しました^{*}。当時二〇歳、独身でした。兄のいるリオクラードで野菜作りの手伝いをし、九月にはサンパウロのサンタクララに転住し、フェイラ（露天市）を始めました。一九六八年に二七歳で結婚、妻は豊見城出身です。

一九七七年にフェイラをやめクストウーラ（縫製業）をはじめめました。一九八四年に住宅を購入し、改装して転住しました。一九八八年にはクストウーラを辞め、夫婦でデカセギに行きました。

^{*}屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』によると、又吉正雄を家長とする三人は、ボイスベン号で一九六二年五月八日にブラジルに到着した。

妻は二年後に戻りましたが、私は埼玉県で一九九一年まで働きました。

家庭での会話は日本語が中心です。しかし子どもたちとの会話ではポルトガル語が混ざります。沖縄料理はソーミン汁・ジューシー・ミー・トーフなど何でも食べます。新聞は邦字新聞の『サンパウロ新聞』とポルトガル語の『フォーヤデサンパウロ』をとっています。沖縄県人会には二〇年加入していましたが、現在では退会しています。浦添人会には参加しています。以前は模合で資金調達していました。

子どもは二人います。長女愛子是一九七〇年生まれでコンピュータの仕事をしています。結婚し子どもが二人います。長男正格是一九七一年生まれ。USPサンパウロ州立大学電子工学科を卒業しています。財産として貸家が二軒あります。

国籍はみなさん同様日本人です。盆正月は兄の家で行い、年に二回、墓参りをしています。現在は私たち夫婦と長男の三人で暮らしています。一九八〇年に両親とともに沖縄を訪問しました。最初はいやながら移民しましたが現在では満足しています。

【二〇〇九年九月二四日島袋伸三調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

第四次開発青年隊として新天地ブラジルへ



親富祖政吉

戦後一世／前田

川又前カヌメ

一九三七年十月六日

私の父は親富祖政昇、母はトヨです。父は私が生まれて二か月後に徴兵され、そのまま戻っていません。同じ連隊にいたという方の話では、父は湛江という所で亡くなったようです。小学校一年生頃に母、祖母を沖縄戦で失い、私は父の弟になる人に育てられました。母たちの思い出というか面影は、甘えたというぐらいでしょうか。ハワイの親戚が送ってくれた写真があるので、母と祖母の顔は分かりますが、父の顔は分かりません。浦添小学校、浦添中学校を卒業しました。

首里高等学校の定時制を卒業した後、ハルサー（農業）をしてみました。第四次産業開発青年隊の一員として単身ブラジルに来たのは、一九五八年のことです*。当時二〇歳でした。神戸には行かず、那覇から香港・シンガポール・アフリカ周りで約五五日かけてブラジルに着きました。船はルイス号です。旅費は琉球政府の移民金庫を利用しました。小遣いとして一〇〇ドルくらいは持ってきました。

*屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』によると、親富祖政吉は、第四次青年隊移民としてブラジルへ渡航。ルイス号で一九五八年六月十日に到着した。

当時の一〇〇ドルは大きかったですよ。だからアフリカやシンガポール辺りでお酒を飲んでいたら、開発青年隊隊長の山城勇さんに「夜まで飲んできて」と何度も叱られました。

ブラジルで私の引受人となっていたのは、沖縄県人会の手配による小禄出身の照屋政徳という方でした。旅券では私はサンパウロ州のリンスに行くことになっていましたが、照屋さんが引受人ということだったので、照屋さんのいるトッパンに行き、向こうで二年間働きしました。照屋さんは綿栽培と雑貨商を営んでいました。一四〇アルケールぐらいの大きな土地を持っていました。この方は自分も非常に苦勞している人だったからか、私に大変よくしてくれました。とても素晴らしい人でしたよ。ここで人生の勉強をさせてもらいました。



親富祖政吉さん一家 [親富祖秀美さん提供]

そこで二年働いた後「お前もだいぶ慣れたから独立して自分でやりなさい」ということで、リンスで綿栽培をしました。それから、色々仕事を变えたのですが、一九六五年にトッパンで土地を購入して綿栽培をし、一九六八年七月にサンパウロのカーザベルデに出ました。サンパウロに出たのは、宮城信吉さんのお父さんが「早く街に来なさい」と言ってくれたからです。

カーザベルデでは、初めは縫い物の仕事をしましたが、すぐに飽きてしまい、一年もしないうちにタクシー運転手の仕事をしました。タクシーは田里さんたちとの頼母子を受け取ったお金で購入しました。タクシー運転手を二年半したのち、一九七〇年から一九九〇年までダブルオーコウギョウで再び縫い物の仕事をしました。

国籍は日本です。帰化の考えはありません。ブラジルの永住権はリンスで取得しました。牧港出身の宮城勝子（一九三九年生）と結婚し、五人の子どもがいます。長女の悦子・エリーゼ（一九六一年生）はボリビア移民の一世と結婚して、コンピューター技師として働いています。二女則子（一九六三年生）は日系の人と結婚し、健康食品の店を経営しています。長男悟・ロベルト（一九六五年生）は、二男進・リカルド（一九七〇年生）と一緒に車関係の仕事に従事しています。三女いずみ・セシリア（一九七三年生）は日系三世と結婚し室内装飾の仕事をしています。

家は二階建てで地階は車庫にしています。子どもたちもみんな家を持っていきます。祖先崇拜です。仏壇も墓地も持っています。沖縄的な行事は当然行います。ゴーヤー・ナーベラー・シブイも作り

ます。妻と話すときは沖縄語。子どもとは日本語とポルトガル語です。子どもたちは方言は話せませんから。『ニッケイ新聞』を読んでいます。ラジオは聞きませんが、テレビは観ます。浦添市郷友会の第五代会長になって七年になります。横合は五年ほど前まではよく参加していましたが、今は参加していません。「レアウ」という現地の銀行を利用しています。郷里へは何回も帰った経験があります。

【二〇〇八年八月二七日石川友紀調査】

サンパウロ市カーザベルデ地区

戦後ブラジルへ家族で移民



宮城清徳

戦後一世／牧港

ジナンメーフサト
二男前富里

一九三二年九月五日

私は父宮城麻作^{マサ}、母カメの長男として、浦添市字牧港七六一―二番地で生まれました。兄弟姉妹は多く、四男四女の計八人です。実家は農業で畑が八〇〇坪もあって、サトウキビなどを栽培していました。

郷里では浦添尋常高等小学校を卒業し、父と一緒に農業をしてい

ました。成人に達すると徴兵され、一九四三年一月から一九四七年五月まで軍隊生活を送り、支那（中国）の北支・南支に約二年、南方に約三年派遣されました。除隊のときには兵長の位まで昇任していました。

戦後は軍作業の仕事などに従事し、一九五八年三六歳のとき、妻と三人の子どもを連れて、家族五人で自由移民としてブラジルへ渡航しました[※]。沖縄から日本本土へ渡り、兵庫県の神戸港からあるぜんちな丸（一万二七五五総トン）で出航しました。渡航後はサンパウロ州で農業を、次いでサンパウロ市に転住して、商業などの仕事に従事しました。

一世なので日本国籍のまま生活しています。移民当時から永住の決意であったし、現在もそのとおりです。妻千代（一九二三年生）は同字牧港の出身で、屋号はアンガー又吉の長女です。亡くなって十三年忌も過ぎました。子どもは三男三女の計六人で、ほとんどが日本本土へデカセギに行き定住しています。

長男たけしは日本へのデカセギで、ブラジル人の妻と女の子が二人います。二男つよしはブラジル人の妻と女の子が一人おられます。三男ひろし・マリオは独身で、七年前から日本へデカセギに行っています。長女えつ子は神奈川県へデカセギに行き、結婚して子どもが男二人・女一人の計三人います。現在二男と一緒にアメリカのサンフランシスコに住んでいます。二女あけみは小祿出身者と結婚し、

子どもが男一人・女二人計二人いて、サンフランシスコに住んでいます。三女みえ子はブラジル在住です。

家屋・屋敷とも自己所有で、仏壇も持っています。墓はサンパウロ市郊外のグアリュエロスにあります。

家庭では、妻とは沖縄方言で話していました。親子は日本語とポルトガル語を併用し、家族の場合ほとんどポルトガル語を使用しています。沖縄料理はよく作り、ゴーヤー・ナーベラー・大根などを食べます。

邦字新聞、現地語新聞は購読していません。ポルトガル語のビデオはよく観ますね。約十八年前に浦添村人会が創設され、その後浦添市郷友会に名称を変更し、存続しています。当初より会員です。模合は親睦のため、我喜屋さんのグループに参加しています。月一回出資額二〇〇レアル、十か月間のもので、二世もブラジル人も親しい者が参加しています。サトウキビで作られたピンガ酒（酒精四〇度以上）もよく出されます。

一時帰国は一九九〇年に一度あります。そのときは妻と二人で浦添市郷友会のグループに参加し、牧港へも行き、日本に約二か月間滞在しました。

【二〇〇八年八月二〇日石川友紀調査】

サンパウロ市カーザベルデ地区

※屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』によると、宮城清徳・千代夫妻は、子ども三人とともに渡航。あるぜんちな丸で一九五八年八月にブラジルに到着した。

キリスト教を通して妻と知り合う



比嘉清

戦後一世／城間

イリヒジャケフイ
西比嘉小

一九四三年一月二〇日

父比嘉仁義と母比嘉ウシの長男です。父は戦前、大阪の造船所で働いていたそうです。独身時代のことです。戦後は牧港の発電所で溶接工をしていました。祖父の識牛しきうは何回か身売りされ、大変な苦勞をしたそうですが、相当な働き者で馬車スンチャー（馬車引き）をしながら財産を築き、土地をたくさん持ったということです。そのほとんどは軍用地に接収され、今は沖縄に残っている親戚が管理しています。

一九五八年、私が仲西中学校の三年生のときブラジルへ移民しました。当時村長をしていた又吉正雄さんが移民事業を奨励していたこともありすが、私たちよりも先にブラジルに移民していた母のおじにあたる又吉加那が、かなりブラジルをプロパガンダしていました。この人は戦前ブラジルに行つて戦争前に沖縄に戻り、戦後再びブラジルに渡つた人で、ブラジルのいいところばかりを言うのでそれも影響したかと思ひます。沖縄はまたいつ戦争に巻き込まれるか分からないというのもありました。私たちは軍用地料をブラジルに来るための資金として運用して南米拓殖会社の株を購入し、さら

に、日本政府の貸付を利用して移民したのです。来るときから永住のつもりでした。移民するとき、五右衛門風呂やミシン、昔のエレキレコードなんかを持って来ました。ブラジルは娯楽がないと聞いていたので相当持つて来ましたよ。父は三味線を持つて来ていました。

チチャレンカ号は神戸港から一度沖縄に寄港して、それから香港・シンガポール・アフリカのダーバン・ケープタウン・リオを経て、八月十一日にサントス港に着きました。ブラジルへは両親・姉良子（長女）・私・三人の妹まさみ（二女）・保子（三女）・教子（四女）の七人で来ました[※]。

サントス港に着いた後、引受人となった母のおじが私たちの持つてくる資金をあてにサンパウロ州サルトル郡ボアビスタの近くに土地を購入していたので、私たちはすぐそこに行きました。向こうではトウモロコシやジャガイモ、米を作りました。それから現金を作るため、スイカを植えたりもしました。牛も五〇頭以上飼いました。しかし、作つたから儲かるわけではなく、赤字になりました。そこでおじたちと土地を分割して農業を続けようとなりましたが、色々あつて一九六一年頃にカンピーナスに移つて来りました。

カンピーナスには沖縄出身者もいて、湿地帯を開拓して彼らと一緒に野菜、主にナスやアルファッセ（レタス）、さや豆などを作り、カンピーナスの市場に売りに行っていました。カンピーナスでも生

※屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』によると、比嘉仁義を家長とする七人は、チチャレンカ号で一九五八年八月十一日にブラジルに到着した。

活は楽じゃなかったです。経験はもちろん、市場の状況も知っていてこの土地に何がいい、この時季に何を植えたらいいいということを知っておかないといけないし、組合に入つて、肥料や農業技師の指導とかも必要です。私たちは農業の経験もなく、暗中模索でした。

カンピーナスにいる頃、北米日系二世の国広さんの影響を受けて一年半ほど福音を聞き、キリスト教（ホーリネス教会）に入信し、神学や実践、伝道の奉仕をしていました。そして教会関係の友人を通じて日系二世の妻（一九四七年生）と知り合い、一九七六年に結婚しました。子どもは男二人、女二人の四人です。子どもたちの名前はみんな聖書からとりました。

長女のリージア順子は現在、日系三世の夫と埼玉県の北坂戸にいます。向こうで生まれた孫は小学校一年になります。二女のロイデ知恵美は、岐阜県可児市にあるリンナイで働いています。長男エリアス実も二女と同じ可児市にいます。二男シラス論^{サシ}は、ブラジルの大学に通っています。彼は日本で中学校を卒業し、帰ってきて高校の資格を取りました。将来は国際貿易関係の仕事がしたいということで、日本語も英語も力を入れて勉強しているところです。子どもたちの中では彼だけ二重国籍です。

カンピーナスからサンパウロに移ったのは一九七二年頃です。サンパウロでは自分で作った野菜をフェーラ（露天市）で売っていました。一九八八年まで教会で奉仕もしながらやっています。一九八九年に母が沖繩で召されたので、その追悼祈念も兼ねて沖繩に行きました。子どもたちはまだ幼かったので妻と子どもを残し、

私一人で行きました。そしてそのまま、一九九一年の四月まで日本で就労しました。神奈川県横浜市鶴見区で電気配線の仕事をしました。ブラジルに戻った後、二〇〇〇年十二月までセアーザ（州営卸売市場）で健康器具のアンブランテ（行商）をしていました。

二〇〇〇年十二月に妻・長男・二男を連れて再び日本に行きました。そのときは東京電力の孫請けで配線の仕事を神奈川や東京・千葉・埼玉などあちこちでやっていました。今年の六月一日、私と妻、二男の三人でブラジルに帰ってきました。

国籍は日本です。屋敷は二階建てで、一階は貸して二階に住んでいます。宗教はプロテスタントです。仏壇はありません。沖縄料理はゴーヤーチャンプルーを食べます。ゴーヤー茶やノニのお茶とかも飲みます。妻との会話は日本語とブラジル語（ポルトガル語）です。子どもが日本語に関心を持っていますので、子どもとは日本語で話します。邦字新聞は帰って来たばかりなので、『ニッケイ新聞』をとっています。ここの新聞は買ってまで読みません。ラジオはほとんど聞きません。

【二〇〇八年八月二一日石川友紀調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

コーヒー園からフェーラ、縫製業へ

仲西盛幸

戦後一世／屋富祖

仲知念ナカチネ

一九四一年一月二一日



父は仲西亀次郎、母は仲西ウタといい、父は四人きょうだいの長男だったと記憶しています。私は男三人、女四人の七人きょうだいの二男にあたります。戦前のことは覚えていませんが、熊本に疎開をしていたと聞いています。父は防衛隊として兵隊にとられたのですが、父の弟にあたるおじの善四郎さんが、ちょうど手を火傷したために兵役を免れたので、おじ・母・長女的美枝子・二女のツル子・三女のトミコ・私・そして生まれて二〇日ほどの四女の七人で熊本県に疎開していました。

沖繩にいた頃の父の仕事は農業でした。当時、台湾と中国が戦争状態というか、不安定な情勢だったので、「もう戦争はこりごりだ。それよりはブラジルに行った方がいいじゃないか」という感じでした。また、兄の盛徳が一九五七年にブラジルに渡航していたこともあり、両親は長男を頼って行こう、という気持ちもあつたようです。それで財産を処分して、ブラジルに移民することになりました。一九五八年の十一月十二日だったと思います。大阪商船のあるぜんちな丸、第二航海でした。一五〇メートルぐらいの大きな船でした。神戸の幹旋所（神戸移住幹旋所）に行つて、そこでブラジルの事情

や講義などを聞いたりしました。十日ほど滞在したかと思えます。身体検査は那覇の保健所で済ませていました。その頃は嚴重でした。何か薬を飲むために泊まり込みでした。それを済ませた後に書類手続きを始めました。その審査は確か、海外協会で作っていたように思います。

ブラジルには戸主の父、母・二女・妹・私・弟の盛一の六人で来ました*。私は当時十七歳でした。長女的美枝子はすでに結婚していたので沖繩に残り、現在城間に住んでいます。

神戸を出て翌日横浜に着き、そこからロサンゼルス、パナマ運河を渡つてクリストバル島、ベレンの沖で停泊しました。そこで二〇〇人ぐらいの人たちが、あるぜんちな丸のそばに着けた小船に乗つて移住地などへ去つていきました。パナマを過ぎてちよつとしたところで、赤道祭りもありました。

リオにも立ち寄つたのですが、リオは昔からあまり治安が良くない所と聞いていたので、ちよつとだけ下船して、コーラを飲んで帰つたぐらいでした。その前にレシーフェの港に着きました。そこではメルカード（市場）をあちこち見て回りました。それからちよつと郵便局まで行つてみよう、はがきぐらい出してみようと思つて、ブラジルの人に「郵便局はどこですか」と聞いて、はがきを沖繩に送りました。多分届いているんじゃないかと思えます。

とにかく、街がきれいだなと思えました。あの当時、道は広くて

*屋比久孟清編著『ブラジル沖繩移民名簿』によると、仲西亀次郎を家長とする六人は、あるぜんちな丸で一九五八年十二月にブラジルに到着した。

きれいだなあと思つたし、日本人はそんなにいないので珍しがられてみんなに囲まれましたよ。

ブラジルでは私の兄と、呼び寄せ人となっている知念亀次郎さんが迎えに来てくれました。知念亀次郎さんはアリアンサ植民地について、私たちもそこに行きました。そこにはウチナンチュも内地の人もたくさんいました。私たちはコーヒー園で働いたのですが、鋤を引くことが全然慣れてなくてとにかく大変でした。父はお金を持っていたので「これでは早く農場を買った方がいい」と思い土地を購入し、現地のイタリア系労働者と日雇い人を雇ってコーヒーを作っていました。他にも豆やマンジョッカ（キャッサバ芋）も植えていました。両親はマンジョッカとパイヤを一緒に煮て、豚に与える仕事をして、僕らはコーヒー園での労働でした。コーヒー園は雨がちょっと降っても仕事がありました。

アリアンサ植民地には九年間いましたが、「これでは金が残らない」ということでそこを売ってサンパウロ市内に出てきました。一九六七年のことです。最初はフェーラといって、ミカンやスイカなど果物を売る露天市をしました。朝三時には起きて仕入れをし、朝六時、七時頃から十二時まで、土・日曜日は繁盛するので月曜日を休みにしていました。ただ父が「寒い」と言ったり、妹が結婚することもあったので一年でやめ、縫製の仕事をすることにしました。縫製は兄の妻が少しやっていたので、ミシンを十台ぐらいに増やし、現地の人も使ってビーダジャルジュンピラソラマーザという所でやっていました。

一九六九年、私はウチナンチュ三世のルイザ・キク子（父親が城間二世）と結婚しました。結婚した後も兄とともに縫製業を続け、一九七一年に独立、ピラカルーンの近くに五年ほどいました。そして、一九七六年にサンマトウスに移ってきました。子どもは五人で、一九七〇年に長男の一義・エージ、一九七三年に二男雄次・アレシハンドレ、一九七五年に三男裕三・リカール、一九八五年に四男明・ヘルナンド、一九八六年に長女愛子・アンドレアが生まれました。

長男はパステース売りをしながら勉強し、現在弁護士になっています。開業してもう五年ぐらいます。今は長男嫁がパステース売りをしていて、私の妻がその手伝いをしています。二男は二三歳のとき、兄の仕事の手伝いに行く途中、交通事故に遭い亡くなりました。

四男は現在、サンパウロ大学で化学を専攻しています。大学はバスで二時間ぐらかかる所にあるので、今は友人と家を借りて学校の近くに住んでいます。土曜日には帰ってきます。

長女愛子は日本で宜野湾二世の米須リカルドさんと結婚し、女の子を出産しました。帰国後、リカルドさんはブラジルで車の修理工場を自営しています。愛子は子供服販売店のチェッカーをしていて、二年前には双子の女の子を出産しました。

一九八六年、子どもがちょっと大きくなったこともあり、妻がクストウーラ（縫製業）を続けている間、弟の盛一を頼りに単身神奈川県平塚へ、二年間デカセギに行つて来ました。二年間で四〇〇〇ドル余り稼ぐことができたので、特殊ミシンを一台購入しました。

一九八八年にもデカセギをして、一九九〇年に家を建てました。その後、二〇〇一年には妻と一緒に平塚へ行きました。

兄・盛徳の子どもたちのうち三男ジョージは茨城県、四男カオルは埼玉に、長女のジュンコが横浜にデカセギしています。弟の盛一も神奈川県平塚市に長い間デカセギしています。沢岬出身の女性と結婚し、子どもは二人います。

現在、私は妻と娘家族の七人で暮らしています。私たち夫婦は十一年前にエバンゼルク(プロテスタント)キリスト教の洗礼を受け、日曜日の朝は、礼拝に行っています。教会にはブラジル人も多いんですが、ウチナーンチュもたくさんいます。ウチナー語の賛美歌があります。牧師はウチナーンチュ三世のナカマ氏といっています。

墓地は二男のものがサンパウロ市内にあります。仏壇は持っていません。ブラジルでは十一月一日がお墓参りの日となっているので、そのときにお墓へ行きます。焼香はしません。お盆も行いません。妻とは沖縄語とポルトガル語両方で会話をしますが、家族とは自然とポルトガル語になります。ポルトガル語のラジオやテレビも楽しみますし、雑誌もポルトガル語です。沖縄県人会、浦添市郷友会には加入しています。

国籍は日本です。もう歳ですから、そのままいくことにしました。帰化を考えたこともあるんですが、お金も時間もかかるみたいで、面倒くさいと思って。日本に行きたいときも堂々と行けるから。永住のつもりというより、父と一緒に来ているのでそういう考えがなかったです。模合にも参加し、現地の銀行も利用しています。

【二〇〇八年八月二六日 石川友紀調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

ブラジルで日本語教師として働く



内間ツル子(旧姓仲西)

戦後一世/屋富祖

仲知念
ナカチニ

一九三五年三月十日

私は仲西亀次郎とウタの二女として生まれました。母の父にあたる人の名は知りませんが、久米島に出稼ぎに行き、向こうで亡くなったそうです。また、父の長女姉さんはハワイに、二女姉さんはペルーに移民したと聞いています。仲西国民学校三年生のとき、熊本県の湯の児という所へ家族疎開をし、その小学校に通いました。

戦後、琉球大学の短期大学を一期生として卒業後、今帰仁小学校で教えていました。そのとき校長先生をしていたマエダ先生は、浦添出身の親富祖先生のお知り合いだったこともあり、一年間今帰仁で教えた後、親富祖先生が勤めていた仲西小学校に呼ばれて、同学校で教えることになりました。

私がブラジルに移民したのは一九五八年です。その一年前に、一

番上の兄が、奥さんと二人の息子を連れてブラジルに移民していました。ある日、その兄から「ブラジルに来ない方がいいよ」という内容の手紙が送られてきましたが、母が「長男の後をついて行く」ということになったので、永住のつもりで家屋敷を売ってブラジルに移民しました。私個人としては、外国に行きたいという気持ちもあつたし、まだ独身でしたから。結局は来てよかつたと思っています。

渡航費は日本政府からの貸付でした。那覇から神戸の教習所（神戸移住斡旋所）に二週間ほど滞在した後、あるぜんちな丸の第二航海でサントス港に到着しました。サントス港に着いたのは同じ年の十一月二三日でした。サントスから汽車に乗ってサンパウロ市まで行くと、私たちを呼び寄せてくれた祖父の弟、知念亀次郎さんが出迎えてくれて、市内の旅館で一泊しました。その後、ノロエステ線でアリアンサ植民地のゼツリーナのコーヒー園に行きました。

兄たちがコーヒー園で働いているあいだ、私は母の勧めで遠い親戚を頼ってアダマンチーナにある日本学校で先生をしていました。その日本学校には子どもたちのための寄宿舎があつたので、私もそこで一緒に住みながら働いていました。朝は子どもたちのために、夜は大人たちに日本語を教えていました。四年ほど教えていたと記憶しています。

その後、妹が働いていたカンピーナスのアメリカーナにある日本紡績の日本人上役の子どものための日本語教師をしました。午前中は子どもたちに日本語を教え、午後は近くの病院で看護婦見習いのような仕事をしていました。そこで一年ほど勤め、一九六五年

に一歳年上の二世内間正次（一九三四年生）と結婚しました。夫の両親は十八歳のときにブラジルに移民したそうで、夫が小さい頃には親の働いている畑で、荷馬車に草を載せたり、日雇いの人たちのお昼ご飯を準備したりするなど、苦勞をしていたと聞いています。

結婚した当時は、家族ともにサンパウロの中央メルカード（市場）でフルーツなどを売っていて、結婚後は私も一緒に働くようになりました。子どもは男の子二人、女の子一人の計三人で、一九六六年に長男の正明・エドアルドが、一九七〇年に二男のユベルト、一九七五年に長女のヤスヨ・エージャが生まれました。現在、長男と長女はコンピュータ関係の仕事をし、二男はフォルクスワーゲンの宣伝に関わる仕事に就いています。

コーヒー園で働いていた私の兄たちは、その後日本人からコーヒー農園を買って経営していましたが、一九七五年頃にサンパウロ市で縫製業を始めました。

日本へのデカセギも経験しました。日本人なので、日本に行きたいという気持ちもあり、息子と兄の子どもを連れて神奈川の平塚にあるソニーの子会社でテレビの修理などをする仕事をしていました。給料はそれほど高くなかったのですが条件がとてよくて、会社側が一戸建ての家を準備し、家賃も取らず、家具や家電類も無料で提供してくれました。帰りの旅費も会社が払ってくれたので、とても助かりました。日本で働いて帰って来た人、行ってない人は違うんですよ。向こうで頑張った人は、何でもできるっていう気持ちがあつて。ですから、一度くらいは経験した方がいいと思っています。

沖縄料理が恋しくなったときは作ります。昆布・大根・それからコンニャクを入れたンブサーとか。夫は沖縄式に育てられているので何でも食べてくれます。お米もちよつと高いですが日本の水田米をずつと使っています。こちらのお米も炊き立ては美味しいですけど、油とか塩を入れないといけません。油の入ったご飯よりは、そのまま水炊きのご飯がおいしいです。また、日本語で書かれた小説が本屋で売っていたりするので、それを買って読むときもあります。

現在でも夫は中央メルカードで働いているので、毎朝四時半に起きてお昼ご飯を作って、それから夫と雇い人のコーヒーとミルクを沸かして、サラダなんかも持って行って朝食をあげるんです。朝は忙しいので、この時間だけ人を雇っています。夫は「アパートも買ったし、それを貸したら生活に困らないから隠居したい」と言ったりしますが、私は「仕事しないと、すぐ年とってしまふよ」と言っていて、今も頑張ってもらっています。

自宅は二階建てで、屋敷もあります。仏壇もあり、一日・十五日には拜んでいます。墓地は高級住宅街のあるムルンビーにあります。夫婦では日本語とポルトガル語を併用しますが、家族の会話はほとんどポルトガル語です。邦字新聞は『ニッケイ新聞』を購読しています。テレビは現地語のものを観て、雑誌は日本語のものを読んでいます。同郷人団体は浦添市郷友会と在伯沖縄県人会に所属しています。模合はせず、現地の銀行を利用しています。

【二〇〇八年八月二一日石川友紀調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

兄の呼び寄せて单身ブラジルへ



伊智春子（旧姓又吉）

戦後一世／勢理客

東門小

一九三七年十二月二一日

私は父又吉屋加、母トミの一男二女の二女です。父が戦死して母子家庭でした。仲西中学校の三年生から個人的に洗濯業をし、のちに牧港住宅地域でメイドとして働きました。

一九六〇年、二二歳のときに兄又吉義雄の呼び寄せてひとりブラジルに移りました[※]。船賃は兄に出してもらい、後で支払いました。一九六一年二三歳で仲西出身の伊智柴徳と結婚、当時夫は二九歳で、サンパウロでフェイラ（露天市）をしていました。一九六三年に家を購入し、一九六五年には既製服店を開きました。仕事はうまくいき、しばらくして土地を購入して家を新築しました。

子どもは一男三女です。私たちは二〇〇三年に隠居しました。

長女エレナ明美は一九六二年生まれ、歯科医大を卒業、現在歯科医師です。結婚して子どもは二人、夫は不動産業を営んでいます。二女尚美ジュリアは一九六三年生まれ。フンダソン大学でコンピュータ工学を学び、現在メルセデス社で働いています。結婚して

※屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』によると、又吉義雄はボイスベイン号で一九五七年一月八日にブラジルに到着。その後、兄の呼び寄せて又吉春子がテゲルベルグ号で一九六〇年三月十三日にブラジルに到着した。

子どもは二人。夫は三菱関係の企業に勤務しています。

長男浩パウロは一九六六年生まれ。フェイ大学の電気工学を卒業、鉄物店を経営していて、子どもは二人です。三女サユリロザーナはマッケンジー大学を卒業、建築士をしています。結婚し、子どもが二人います。

家庭での言語は日本語・方言・ポルトガル語です。食事はほとんど沖縄料理。新聞は邦字新聞の『サンパウロ新聞』を購読しています。琉球箏曲の沖縄県人会支部興洋会に所属しています。模合は婦人の親睦会に参加。月一回で金額は三〇〇レアルです。沖縄訪問は一九八二年から二〇〇七年までのあいだに五回です。財産は貸家一軒、店舗一軒。父の遺産で仲西にアパート一軒を所有しています。お盆は兄の家で行っています。移民して大満足です。

【二〇〇九年九月二四日 島袋伸三調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

移民してよかった



比嘉千代子

戦後一世／勢理客

東門小

一九三五年七月六日

私は父又吉屋加、母旧姓知念トミの一男二女の長女として生まれました。父は戦死しました。私は仲西中学校を中退してハウスメイドとして働き、二三歳で同い年の夫と結婚しました。夫は移民を希望し、一九五九年に第八次移民として単身ボリビアに移民しました。私は長女と二人で一九六〇年の第九次移民としてルイス号で出発しました。

第二コロニアで米を作りましたが、翌年一九六一年には兄の又吉義雄を頼ってサンパウロのサンカエターノに転住、フェイラ（露天市）をしながら母に送金しました。しばらくして現住所に土地を購入し、家を建てました。一九八九年にフェイラをやめて夫はデカセギに出て、一九九〇年のウチナンチュ大会に参加してブラジルに帰ってきました。充分働きましたよ。

子どもは二男三女の五人。貸家が一軒あります。長女千恵美は一九五九年生まれで、フンダソン大学を卒業し、母校の大学図書館に勤めています。長男の幸勝は一九六一年生まれ。フェイ大学で電気工学を学び、会社勤めをしています。二男実は一九六二年生ま

れ、マワール大学を卒業、結婚し子どもが二人います。二女の弘美は一九六五年生まれ。フンダソン大学で情報工学を学び企業で働いています。

三女和美は一九六七年生まれでフンダソン大学で情報工学を専攻、結婚して子どもが一人います。夫のテツオ・オキノカブはIT A（工科大学）を卒業しています。

家庭での会話は日本語・方言・ポルトガル語が混ざっています。沖縄料理は何でも食べます。山羊汁は大好物です。邦字新聞は『ニッケイ』を購読。県人会、浦添市郷友会、興洋会（琉球箏曲）に参加しています。模合は興洋会と婦人会をやっています。金額はそれぞれ一〇〇レアルです。

現在夫婦と娘二人の四人暮らしです。お盆は兄の家で行います。故郷への訪問は四回で、一九九〇年のウチナンチュ大会には参加しました。よろこんで移民しました。来てよかったです。

【二〇〇九年九月二四日 島袋伸三調査】

サンパウロ市サンタクアラ地区

二〇世紀の大国ブラジルへ大地主を夢見て



宮城信吉

戦後一世／牧港
カミイワサトケア
亀大里小

一九三九年十一月十日

父は宮城信義、母は安枝。六男四女の二男です。本籍地は浦添村字牧港一一五番地。これは戦前の番地だと思えますよ。

父は戦争勃発時に区長をしていたようです。あの当時、子どもや女性ではできるだけ避難させるよう県庁から通達がありました。沖縄の人は島から出たがらなかったそうです。父は他の部落民を避難させるため、自分は残り、私たち家族を率先して、熊本県阿蘇郡の白川町まで疎開させました。上在かみざいという所のお寺でした。向こうの小学校に一年半ほど通い、一九四六年に佐世保から沖縄に引き揚げて仲間収容所に入りました。自分たちの所に帰れる人たちはすぐに帰っていますが、牧港は戦争で破壊されて全滅でしたので、改めて区画整理をして、入るときにくじ引きをして戻りました。

浦添小学校、浦添中学校を卒業しました。私が首里高校二年生のときに兄信一が南米拓殖会社の先発隊としてブラジルに行くことになり、いずれは自分も後を追ってブラジルに行くことを兄と約束していました。そのため就職活動もせず、勉強も中途半端な感じでしたので、休み時間のあいだ、同級生たちが一生懸命に勉強する姿を

見て、何だかうらやましい気持ちになったこともあります。首里高校を卒業後、浦添村役場で半年ほど庶務課の臨時をし、その後給料がよかったですので牧港のWWテラという自動車会社で在庫管理の仕事をしていました。

一九六〇年、財産を処分して二〇歳の私が戸主となって、両親・兄妻・弟妹たちの合計九人でブラジルにきました[※]。姉の長女文子と二女トヨコは結婚していたので、ブラジルに来ていません。なぜ私が戸主になったのか、理由は分かりませんが、父に「お前が戸主になれ」と言われたのです。琉球政府による渡航費の貸付は戸主に行っていたので、「高齢の父よりは働ける私を戸主に」と思ったのかもしれない。最初は泊港から神戸まで行きました。あの時代はもう二度と帰ってこないだろうという気持ちでした。これでもう生き別れかなど。そういう感傷がありましたね。ミイグスク（三重城）の移住センターで身体検査をしました。神戸港でさんとす丸に乗り、ブラジルに着いたのは一九六〇年五月一日のことです。

私は兄がいたので、あまり余計なものを持たずに渡航しました。持って行ったのは衣類ぐらいで、農業用具を持って行った記憶はありません。サントス港には兄が迎えに来ていました。そして、兄のいたサルト・デイ・イトウに行き、五アルケールほどの土地を購入しました。この土地は南米拓殖会社とは全然関係のない土地です。

南米拓殖会社の移民は、中部（沖繩本島中頭郡）が中心となって

※屋比久孟清編著『ブラジル沖繩移民名簿』によると、宮城信吉を家長とする九人は、さんとす丸で一九六〇年五月一日にブラジルに到着した。

進めていました。浦添では、当時の又吉正雄村長が徹底して進めていたんです。又吉正雄さんは非常に人格者で、彼の家は牧港では昔から名家でした。兄は「株券を余計に持つていけば、ブラジルへ行つたときに、より多く土地がもらえる」という話を聞いて、無理して資金を作つて株を買い、移民しました。しかし、私たちがブラジルに行く前に兄から「もう会社はダメになった。自分は会社を出るぞ。先発隊はみんな出た」という手紙をもらいました。兄は住む所を探しながら、沖繩にいる私たちに手紙を送つて来ました。兄は苦労話を一切しませんが、ブラジル中を放浪しながら歩いていました。南米拓殖会社の株はすべて灰になりました。その中でも被害が多かったのは浦添の牧港出身の移民だと思います。みんなは又吉元村長を批判しますが、私は尊敬していました。

サルト・デイ・イトウは、街からもそれほど遠くないし、そこには南米拓殖会社移民の池原さん、本部さん、宜志さん、比嘉さん、浜比嘉さんたちがいました。今、そこには浜比嘉さん、比嘉さん、仲宗根さんの三大家族が残っています。比嘉正助さんは浦添出身です。

私は兄と一緒にそこで農業をしながら、弟妹たちを街の学校の分校に通わせていました。学校では年齢は関係なく、みんな同じ教室で授業をしていました。家では方言だったので、ブラジル語（ポルトガル語）が分かるわけもなく、上の子たちは泣いて帰ってくるんです。このままでは、彼らは無学、無識字になってしまふと思います。一九六三年に単身街に出て家族を呼び寄せるための生活基盤を築きながら、養鶏を始めました。

その頃は養鶏ブームで、パウリスタ農業組合の理事長をしていた西原町出身の田場セイトクさんから「養鶏がブームだから、鶏舎を建てる費用や雛代を出してあげるからやりなさい」と勧められたのです。生んだ卵はパウリスタ農業組合に卸して、それで借りた資金を返していくやり方でした。組合からは飼料なんかも送ってくれました。多いときで三〇〇〇羽ぐらい育て、週に三回ほど大きなトラックに一トンずつ卵を持って行きました。しかし、どうやらピンハネされていたようで、出荷すればするほど赤字になっていきました。それで組合を通さずに直接自分たちで卵を売ろうということで、見切りをつけて土地を処分し、家族とともにサンパウロ市カーザベルデに出て来ました。一九六六年頃でした。カーザベルデに来るまでに、だいぶ借金をしていました。カーザベルデには同じシマンチュの喜屋武義雄さんもいて、ここがいいと思ったので移り住みました。

最初の頃は、ブラジル人から家を借りて住んでいました。そこは大きな家で「大阪城」と呼んでいました。今住んでいる家は一九七四年ぐらいに購入しました。その前にポアフープキラに家を買ったんですが、今は兄がそこに住んでいます。カーザベルデではフェーラ（露天市）をしました。卵や果物を売って、その後、一九九一年からはお土産品店、一九九六年にはスーパーマーケット、二〇〇一年頃から肉屋、その三年後に花屋をやりました。今は隠居しています。

西原町上原出身の屋良千佳子（二世）と結婚し、子どもは男の子が三人おります。長男・リカルド（一九七〇年生）は職業技術学

校を出て銀行員として働いています。二男・オスカル（一九七五年生）、三男・レオナルド（一九七九年生）はサンパウロの大学を卒業し、公務員として働いています。

国籍は日本のままで、不自由は感じません。下の弟信徳はブラジルに帰化しています。仏壇は兄が持っています。お盆は兄の家で集まるので、子どもたちも一緒に行きますよ。宗教は祖先崇拜といったところです。自宅は一階建てで屋敷は道路側が八メートル、奥行きが四〇メートルあります。ゴーヤー・トーフ・カマボコは大好きですよ。ただ子どもたちはゴーヤーはあまり食べません。夫婦では沖縄方言を話しますが、子どもとは日本語とポルトガル語を併用しています。邦字新聞は購読していません。現地語新聞は子どもと一緒によく読みます。ラジオは聞きませんが、テレビはNHKの日本語放送を、雑誌は日本語のものを読みます。浦添市郷友会・沖縄県人会の役員を務めています。

最初から永住のつもり、覚悟のうえで移民しました。なにぶんにも「二〇世紀の大国ブラジル」ということで、ブラジルで大地主になつてという夢もあったんですよ。まさかこういう道を辿るとは思いませんでした。郷里へは一九九〇年に一度帰り、親戚や友人に会いました。

【二〇〇八年八月二七日石川友紀調査】

サンパウロ市カーザベルデ地区

家造りから始めたブラジル生活



比嘉茂子（旧姓宮城）

戦後一世／牧港

亀大里小

一九四三年十月二八日

父は宮城信義、母は宮城安枝といい、ともに浦添牧港の出身です。きょうだいには男六人、女四人で、私はその三女です。両親は浦添で農業をしていました。

浦添中学校を卒業後の一九六〇年、十六歳のときに長男兄さんの呼び寄せで、姉二人を沖繩に残し、両親と他のきょうだい合わせて八人でブラジルに移りました。行くときから永住の形で行つていきますね。先に行った長男兄さんは、ブラジルに行く前、軍の消防隊で働いていました。しかし、当時は沖繩が日本に返還される見通しが全然ありませんでした。軍の給料は一般の沖繩の人に比べたらまだよい方だったんですけど、家族も多かったのですのまま沖繩にいても見込みがないと思ったようで、仕事を辞めてブラジルに渡ったんです。私より十二歳上だから二六、七歳になっていたと思います。私たちが渡航するときの費用は、政府の貸付を利用しています。財産もみんな売り払って準備しました。政府の貸付は向こうに行つて働いて返済するような仕組みだったと思うんですが、後になつて払わなくていいということになりました。

三月十五日に那覇港から白雲丸に乗つて神戸の移住斡旋所に行き、そこでブラジルの言葉、たとえば「おはよう」とか「こんにちは」とか、ほんの少しですが教えてもらいました。また、色々身体検査があったので二週間ぐらい神戸にいました。そして四月二日、神戸港からさんとす丸に乗りました。船はとても大きかったので、揺れることはありませんでした。船の中では赤道祭というのがあって、色々な格好をして踊つたり、甲板の上で運動会をしたりしました。船はパナマ運河を通つて、キューラッソーなど、あつちこつち寄つて、五月にブラジルのサントス港に着きました。サントス港からトラックで家財や荷物を積んで、サルトという所に行つたんです。五月といっても、ブラジルと日本は季節が逆なので、向こうは冬の初めで寒かったですよ。

着いた翌日から、家を造るために家族みんなで木の切り出しを始めました。木を組んで土壁で周りを塗つたんですが、風まじりの雨が降つたらサーつて壁の土が落ちて、雨が入ってくるんです。だから、風雨が来るたびに翌日は土をこねて、また壁を塗つて、ということを繰り返したものです。そして、自分たち家族が食べる分のお米を作り、また、ピーマンやポプリンヤというちよつと小ぶりのカボチャなんかを栽培しながら、養鶏を始めました。三〇〇〇羽ぐらい飼っていたのでサンパウロにパウリスタ農業組合にも出荷して売っていました。

サルトには私たち以外にも、川を挟んだ向う側にウチナンチュの家族が四軒ぐらいありました。みんな南拓の人たちで、三味線担

いでお互いの家を行ったり来たりすることもありました。

養鶏を始めたのはいいのですが、卵を売っても経費を賄えない時期があり、また、妹や弟たちの学校も遠かったので、一九六五年頃にサンパウロに出てきました。

サンパウロではフェーラ（露天市）といって、毎日売る場所が変わる市場で果物や野菜を売っていました。あの頃のブラジルにはスーパーマーケットなんかはなくて、買物はほとんどフェーラでしていたんですよ。今はデパートとかスーパーマーケットがいっぱいできて、フェーラもだんだん下火になっていきますがね。フェーラは兄たちと一緒に結婚するまで続けました。私が結婚した後も兄たちは三〇年近くフェーラをしていました。

二八歳ぐらいの頃に、大里出身の比嘉幸雄ゆきおと結婚しました。夫は青年開発隊としてブラジルに渡って来ていて、自分で作った野菜をフェーラで売っていました。結婚後、夫の家族と一緒に住んで生活しました。そのうち妹たちもそれぞれ結婚して落ち着いたので、サンパウロ市内グアルーリョスという場所に家を建てて、そこで野菜や鶏肉なんかを売りはじめました。

子どもは五人、男の子一人に女の子四人います。長女が十四歳のときに夫が亡くなり、お店を続けることが難しくなったので、店舗は人に貸してその家賃収入で生活をしていました。一九九三年から二年間、日本へデカセギに行きました。最初は和歌山で介護の仕事をして、次は静岡のお弁当屋さんで働き、ブラジルに帰る前に沖縄の姉たちを訪ねました。ブラジルに十六歳で渡って、デカセギのた

めに日本に来るまでの約三〇年は、日本に帰ってきたことはありませんでした。ウチナーンチュ大会は今回が初めての参加です。

国籍はずっと日本のままです。ブラジルに移そうと思ったことはないですね。宗教は祖先崇拜ですね。家には仏壇があつて、一日・十五日はウチャトーをやつてますよ。ヒヌカンも作つてあつたんだけど、子どもたちに意味を説明できなくて。ヒヌカンにお通ししても「仏壇があるじゃないの」って言うのよね。お盆は旧暦が分からないので新暦でやっています。姑が元気なときは沖縄の揚げ豆腐やクーブ、三枚肉をお供えました。もちを作つたり饅頭を作つたりしていましたが、今の子どもたちは、作つて供えても食べないんですよ。だから今は簡単にやっています。正月も新暦です。お墓もありますよ。ブラジルでは十一月二日に、全域でお墓参りに行くんです。そのときにお花と日本のお線香を持って行きます。私たちはお線香を持って行きますが、向こうの人たちはろうそくをつけてます。

夫とはずっとウチナーグチで話していました。親子ではチャンポンですね。ウチナーグチ・日本語・ブラジル語（ポルトガル語）で話します。沖縄料理はイリチャー・チャンプルーを作ります。ゴーヤーもあるし、シブイはクーブやデークニーと鶏肉と一緒に入れて炊いて食べます。新聞は『サンパウロ新聞』を前は読んでいましたが、新聞ではニュースはあまりにも遅くてね。テレビの方が早いから、今は読んでいませんね。地元のポルトガル語の新聞を、子どもたちがとっています。県人会、浦添市郷友会に入っています。

食べ物や気候などの面での苦労よりも、言葉の苦労が大きかった

です。言葉が通じないということですよ。サルトで卵を売って歩くのも大変でしたし、日用品の買物をするときも、名前が分からなくて「あれ、あれ」って指差しながらでした。夫を早く亡くし、子どもたちの教育とかそういうのが自分一人に責任が来たので、その不安がありました。色々あったけど、今は幸せです。

【二〇一〇年十月十八日佐久川志麻調査】

沖縄県浦添市

ブラジル移住四八年



又吉盛喜

戦後二世／牧港

新玉利小

一九三六年五月四日

私は父又吉貞刈・母カナの二男として、浦添村字牧港で生まれました。父母は戦前、南洋群島のサイパン島・テニアン島・パラオ諸島へ出稼ぎに行っていました。浦添の実家は田や畑があり、サトウキビや大豆を作っていました。家屋は茅葺きでした。浦添小学校、浦添中学校を卒業し、卒業後は父と一緒に農業をしていました。

一九六〇年、二四歳のときチサダネ号で神戸港を出航し、同年七

月十七日にサントス港に着きました。神戸では移住幹旋所で約一週間滞在し、その間に身体検査があり、ポルトガル語の勉強などをさせられました。渡航時の家族構成は、私が高長で、父（六四歳）と母（六一歳）、そして弟長栄（二八歳）の四人でした*。

渡航後、サンパウロ市から南へ六〇〇キロメートルも離れたアサーマンチーナまで一日かかって移動しました。その日本人植民地ホマレで一年半働き、次にプレジデンテプルデンテのアルバデスマシャードで、十五アルケールの土地を借りて、一年間落花生と綿花の栽培をしました。

三度目はサンパウロ市サンタクララに移住し、セアーザ（州営卸売市場）で野菜を仕入れて、フェーラ（露天市）の商売を約十年間続けました。

一九八四年から一九八八年まで、デカセギ先の横浜にある日産自動車会社の下請の「三池工業」で働きました。二世など約八〇人の従業員がいて、月給は三〇万円ありました。一九八八年から一九九〇年までの二年間は「日本やまさき」という会社で働いていました。

一世で国籍は日本です。移民当時から永住の意志があり、現在もそのとおりです。宗教は仏教で、仏壇も墓地もあります。台所には火又神を祀っていますよ。

家屋は自己所有で一階建て、屋敷は八メートル×五〇メートルの

※屋比久孟清編著『ブラジル沖繩移民名簿』によると、又吉盛喜を家長とする四人は、チサダネ号で一九六〇年七月十七日にブラジルに到着した。

広さがあります。夫婦の会話は日本語です。親子間ではポルトガル語も併用しますが、ほとんどが日本語ですね。

沖縄料理はよく作ります。ゴーヤー・ナーベラー・シブイは自宅の菜園で作り、トーフ・カマボコ・豚肉は市場で買います。ただ、ブラジル二世の子どもたちはシュラスコやフェイジョアードなどブラジル料理を好みます。

邦字新聞は『サンパウロ新聞』を購読し、現地語の新聞は時々読んでいます。日本語のテレビを観ていて、雑誌を読みます。同郷人団体としては、浦添市郷友会、沖縄県人会に所属しています。

模合は参加していません。十四、五年前までは盛んに行われていました。銀行は現地の「バンクオブラジル」を利用しています。

ブラジルへ移住して四八年になりますが、一時帰国は一九九五年五月に一回あるのみです。その滞在期間は大阪などを含めて約一月でした。

【二〇〇八年八月二日石川友紀調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

移民青年隊とともにポルトガル語を学ぶ



松田優

戦後二世／フィリピン

前西松田
メイイリマチダ

一九四二年十一月十五日

私は松田真徳（屋富祖出身）と松田フミの長男で、五人きょうだいの二番目に長男として生まれました。父は戦前、フィリピンに行っており私もそこで生まれました。向こうでマニラ麻をつくっていたようですが、当時の記憶は全然残っていません。

一九六〇年、両親と私・長女のサヨ子・二女の喜枝・二男の良善の六人でブラジルに渡りました[※]。当時私は仲西小学校、仲西中学校を卒業し、那覇商業高校の三年生でしたが、学校を中退して渡航しました。私には姉が一人いますが、姉はすでに結婚していたので、そのまま沖縄に残っています。また、妹のサヨ子は、今は浦添で生活をしています。

まず、那覇から浮島丸で神戸に行き、移住斡旋所で一週間ぐらい過ごしました。そこでは、身体検査やブラジルの習慣や心構えについて教育を受けました。そして、オランダ船ボイスベン号に乗り、香港・シンガポール・ダーバン・ケープタウンを経て十一月十一日

※屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』によると、松田真徳を家長とする六人は、ボイズベン号で一九六〇年十一月十一日にブラジルに到着した。

にサントス港に着きました。渡航費用は日本政府の貸付を利用しました。ブラジルに来るときには、蓄音機・ミシン・レコード・豆腐の石臼、そして沖縄で作った小さい水屋（食器棚）を持って行きました。水屋は今もあります。

私たちは父のおぼの夫、知念カメジロウさんの呼び寄せだったので、その人の住んでいるサンパウロ州アリアンサ植民地（移住地）のコーヒー園に行きました。五か月ぐらい見習いのようなことをした後、同じアリアンサ植民地にあった、沖縄出身者の経営していたコーヒー園を買いました。そこは五アルケールほどの土地で、五〇〇〇本くらいコーヒーの木が植えられていたと思います。そこを私たち家族だけで経営をしました。

私はブラジルでは働き手の一人だったので、学校に通うことはありませんでした。アリアンサ植民地には日本人も多いので日本語が通じました。最初の頃は現地の人と一緒に仕事をしながら、言葉を覚えていきました。また、アリアンサには青年隊でブラジル語（ポルトガル語）の勉強会もあったりしたので、それで習ったりしました。運動会とか演芸会とかやってましたよ。楽しかったです。

一九六七年十二月、サンタクララに移りました。コーヒーは一年に一回収穫するのですが、豊作の翌年にはコーヒーの木自体が疲弊して実がつかなくなります。その繰り返して、父も「街がいい」と言うようになったのです。その頃、アリアンサでも街に行く人がだいぶいました。それもあって、街に出てフェーラ（露天市）の仕事を始めました。一九八八年にフェーラを辞め、一年ほどパステー

ス（天ぷら）売りをして、その後は人の手伝いなどをしました。今は現役では働いていません。一九九〇年頃には東京の方で四、五か月ほどデカセギをしました。そのとき、沖縄に住む妹を訪ねて一か月ほど滞在し、翌年にブラジルへ帰ってきました。それ以降、ずっと日本には帰っていません。

一九七七年に結婚。旧久志村出身の女性と結婚しました。彼女も戦後移民一世です。子どもは二人いて、長男つよし・リカルドは事務所勤め、長女みゆき・クラウジアは郵便局で働いています。

一九九一年に妻を亡くしたため、現在は娘と二人暮らしです。妻は生前、ウチナー料理を作ってくれましたが、今は私が作っています。ゴーヤーも屋敷内で毎年作っています。仏壇には両親・弟・妻の位牌があり、きちんと拜んでいます。妻との会話は主に日本語でした。子どもとはやっぱりブラジル語（ポルトガル語）ですね。日本語の新聞は以前とっていたのですが、今はとってないです。現地語の雑誌は、意味が分からないのであまり読まないです。テレビだったら大丈夫なんです。趣味はカラオケです。ブラジルでは今、カラオケが盛んなんですよ。友達と集まって週に一回歌っています。ブラジルには民謡クラブもあります。浦添市郷友会の会員です。

【二〇〇八年八月二一日石川友紀調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

仕事を求めて家族六人でブラジルへ



銘荊成二

戦後一世／仲間

前銘荊^{メーメカ}

一九二七年七月六日

私は銘荊ガコウとツルの二男として生まれました。きょうだいは三男三女で計六人でした。浦添尋常高等小学校を卒業後、高等科へ二年間通いました。一九四四年五月に志願兵となり、鹿児島県の出水港で海軍に入隊しました。入隊後、六か月間は新兵教育を受け、普通科も卒業していつ出陣してもいいように準備をしていましたが、戦場に行くことなく佐世保で終戦を迎えました。

終戦後、沖縄に帰るたかつたのですが、すぐには帰れず、いったん鹿児島に向かいました。しかし、辺り一面焼け野原で寝る場所もなかったため、宮崎県の宮崎市から都城に行きました。そこには疎開してきたウチナンチュがたくさんいて、コザ市出身という男性が「うるま農園」というのをづくり、旧日本軍の馬や農耕器具などをもらい受けて開拓していたのを私も手伝っていました。

一九四七年頃、都城から沖縄の那覇港に引き揚げて来ました。上陸した際、DDTをかけられたのを覚えています。その後、実家のある仲間に戻りました。終戦から時間が経っていたこともあってか、世の中は大分落ち着いていたように思います。引き揚げ後は北谷の

米軍基地で、鋳物をするときに冷やすための水を通すパイプを作る仕事をしていました。

私がブラジルに渡ったのは一九六二年のことです。あの頃の沖縄は、毎年の台風で米軍のコンセットが壊れたので仕事があったのですが、コンクリート造りになると、仕事が失くなったので、妻のよ・長女の順子・長男の昇・二男の良隆・三男の秀雄の四人の子どもを連れ、六人でブラジルに渡航しました^{*}。船の名前はチサダネ号だったと記憶しています。船には四五〇人ぐらいのウチナンチュが乗っていました。当時の沖縄には、私のように移民を希望する人がたくさんいましたが、渡航費が準備できない場合もありました。私は稼いだお金を貯金していたので、それを崩して渡航の費用に充てました。

移民する際、鍋や石油コンロを持って行きました。当時のブラジルの事情が分からず、とりあえず石油コンロを買って持って行きました。しかし、ブラジルではガスコンロがあったので、結局一度も使うことはありませんでした。

ブラジルに着いてからの十年間、農業をする契約でした。しかし、場所が田舎だったこともあり、サンパウロに住んでいたおばが引受人と相談して、私を引き受けてくれました。

おばの住むサンパウロのリベルダージの洗濯機工場で働いた後、カンピーナスで九年間農業をしました。畑の規模はニアルケールぐ

^{*} 屋比久孟清編著『ブラジル沖縄移民名簿』によると、銘荊成二を家長とする六人は、チサダネ号で一九六二年二月にブラジルに到着した。

らいたったと思います。そこで、地元の人たちを使って野菜を作っていました。その後はまたサンパウロに戻って、アースヴィラーレスという国営の鉄鋳加工会社で働きました。

妻や子どもたちとの会話はウチナーグチなので沖縄にいるときと何も変わりません。料理もゴーヤーチャンプルーやトーフンブサー、何でも食べます。ゴーヤーやナーベラなどはブラジルでも作るほどこです。正月やお盆、一日・十五日も沖繩と同じようにきちんとやっています。

子どもたちもみんな自立し、現在、長男はジェネラルエレクトロニツクの技師として働いていて、サンタカタリーナの発電所建設に携っています。二男はサンカエターノで自動車関係の仕事を経営、三男はブラジルのヴァリグという航空会社に勤務、長女は宜野湾の二世と結婚し、夫婦でスーペルメルカード（スーパーマーケット）を経営しています。そして、ブラジルに来てから生まれた二女のマユミは、商業デザイナーとして、主に中国と仕事のやり取りをするなど、ブラジル社会に溶け込んでいます。

【二〇〇八年八月二日 石川友紀調査】

サンパウロ市サンタクララ地区

戦後ブラジル拓殖移民で南米へ

喜屋武義雄

戦後一世／牧港

踏切家^{フミキリヤ}



一九三三年八月二〇日

父は喜屋武忠吉、母はツルといひます。父は北谷町砂辺の出身で、屋号ははつきり分かりません。戦前は軽便鉄道の牧港の駅（嘉手納線の城間駅）で勤めとつたらしいです。きょうだいは六人、男四人女二人で私は長男になります。浦添国民学校を三年生まで出て、学童疎開で宮崎に行っています。一九四四年だったはずです。船は対馬丸の撃沈の一週間くらい先に行きました。学童疎開に行ったのは家族では私一人で、他の家族はみんな沖縄に残っていました。戦後家族は全員無事でしたが、終戦直後に父が亡くなりました。戦後、宮崎から戻っても部落の土地を耕して芋を植えて、それを腹いっぱい食べる生活でしたので、一年くらいしか学校へは行けなかったですよ。

一九六一年の暮れに家族十一人で移民しました。世帯主は私で当時二七歳でした。母と弟三人、妹二人、そして私の子どもたち三人、妹の子どもです。旅費は、神戸からブラジルまでは日本政府から

※屋比久孟清編著『ブラジル沖繩移民名簿』によると、喜屋武義雄を家長とする十一人は、チサダネ号で一九六二年二月にブラジルに到着した。

の援助がありました。那覇から鹿児島まで船で行き、熊本周りで神戸まで汽車で行きました。そして、神戸からチサダネ号に乗りました。途中いったん那覇に寄港しよったんですよ。そのとき、船に乗ってくるウチナンチュがたくさんいましたね。みんなブラジル行きだったようですが、なかにはアルゼンチン行きもありました。

あの当時は軍作業に行っていて、土地も何にもなかったですよ。牧港の又吉村長が中心となって移民を勧めていました。夢がなくて、妹や弟、そして子どもたちにもいったい何ができるんだ、これからどうなるんだろうと思っただけです。ブラジルでは金持ちになれるって聞かされました。だから、南米拓殖の関係でここに来ました。牧港からは移民をたくさん出していきますよね。送り出すときに、こういうことがあったんですよ。余計に株券を持っていけば、現地に着いたときにより多くの農地を早くもらえるって。でも、向こうがつぶれたから、頭が真っ白でした。夢を抱いてきたブラジルなんですけどね。ここに着いた人たちは、ずいぶん恨みつらみを持ったと思いますよ。私は個人的に又吉さんをよく知っていたので、尊敬もしていたし、立派な人でしたよ。

ブラジルに着いて、一週間ほどはおばがいるアラサツバに行きました。それからすぐサンパウロのカーザベルデでクストウーラ（縫製）の仕事をしてたんです。仕事は三〇年くらい続けました。

妻は宜野湾宇地泊出身で、子どもは三男一女の四人います。最初から永住のつもりでしたので、仏壇は両親のものを持っています。墓もありますし、お盆とかもやっています。家族との会話はウチナー

グチで通していますよ。テレビはNHK。ラジオなんかはあまり聞かないです。新聞は『ニッケイ新聞』をとっています。ポルトガル語の新聞は子どもたちが読んでます。浦添市郷友会に入っていますよ。沖縄にも四回ほど帰っています。

【二〇〇八年八月二〇日石川友紀調査】

サンパウロ市カーザベルデ地区

第一次ボリビア移民からブラジルへ転住



又吉正二まさじ

戦後一世／牧港

アガリクラニ
上倉根

一九三〇年六月二〇日

私は父又吉良雄、母カマドの二男として牧港で生まれました。浦添尋常高等小学校を卒業し、県立一中に進学しましたが、戦争のため二年生で中退です。

一九五四年、琉球政府計画移民の第一次として、永住のつもりで妻の弘子と共にボリビアに移りました[※]。ボリビアに行ったときの

※『コロンビア・オキナワ入植五〇周年記念誌 ボリビアの大地に生きる沖縄移民』によると、又吉正二・弘子夫妻は第一次ボリビア移民として一九五四年六月十九日にチサダネ号で出航した。

船の名前はチサダネ号というオランダ船で、ウチナーンチュは三〇〇人くらい（第一次移民二七八人）乗っていましたね。浦添からは四家族だったと思います。団長は今帰仁村出身の西平守蔵さんという方で、この方は満州の開拓でも向こうの組合長をしておられたそうです。そして諸見里朝清さん、長嶺盛良さんは先発隊として、私たちが来る前に向こうで人夫を雇って下準備をしていました。船の旅は楽しかったのですが、サントスからボリビアに行くまでは大変でした。なかでもピサの谷は暑くてつらかったです。その当時の汽車は燃料が薪で、ちよつとでも坂があると登れず、汽車を止めて、薪を入れて蒸気を出して、それからまた走らせたんですよ。旅費は政府から借りました。耕地に入ってから二、三年後に支払の請求が来たので一部は払いましたが、後から免除になったそうです。

第一耕地では一号線に五〇ヘクタールの土地をもらい、そこで米を作りました。私の土地は低地だったので、米作りにとっても適しておりました。他にトウモロコシも作りました。開拓は自分たちだけで木を倒すのも大変なので、地元の人たちに頼んで木を切ったりもしました。

一九六三年にブラジルに来ました。動機はこうです。子どもたちを街に連れて行ったときに電気がついていっている様子を見て「ボリビアでは教育ができない。ブラジルに行った方がいいんじゃないかな」と思ったんです。ブラジルには妻のおばがいたので、その人を頼ってエアプルデンテに行きました。エアプルデンテではフェーラ（露天市）をしていたのですが、最初は言葉も分からない、お金がない、

食べるものがないなど、とても苦勞しました。ボリビアにいたときは食べ物に困ったことがなかったですからね。

ブラジルに来たら子どもたちが食べるのがなくて、とても心配しました。そのときばかりは、沖繩に帰りたいという気持ちになりましたが、今となつては来てよかつたと思っています。一年ぐらい経つた後にカーザベルデに家を借りて、ここでもフェーラの仕事をしました。一九八〇年には現在のの所に移つてパール（飲食店）をしました。

子どもは七人います。本当は八人でしたが、長男はボリビアにいた頃、一歳半のとき事故で亡くなりました。三男以外の子どもたちはみんな大学まで行くことができました。三男は高校三年生のときに兵隊にとられてしまい、大学に行くことができませんでした。ボリビアで生まれた二男オサム・パウロは大学を卒業後、IBMでコンピュータ技師をしています。長女・二女・四男は国家公務員になり、長女は会計検査官の仕事を、二女は内務省で働いています。長女と四男ミサオはブラジルに住んでいて、二女は私と一緒に暮らしています。三男サトルは愛知県の造船会社に勤め、向うでブラジル人と結婚して暮らしています。三女みえ子・クリステイナは専業主婦、四女リンダは理学療法士として働いています。

国籍は日本国籍です。日本の選挙権は持っていますので、選挙のたびに領事館まで行って投票しています。現在の家は持ち家で、屋敷は十メートル×二五メートルあります。家は地階を含めて三階建てで八メートル×二〇メートルぐらいます。宗教はウチナーの習慣そのまま、祖先崇拜といったところです。墓には母・妻・それから

沖縄戦で亡くなった父と姉の遺骨も入っています。妻とは日本語で会話をしていました。子どもたち同士はブラジル語（ポルトガル語）です。ウチナーグチはウチナーンチュ同士でしか話しません。料理もウチナーで食べるようなものですよ。ボールで食事も出していたので、普段の料理は全部私が作ります。カマボコなんかも作ります。豆腐は毎週食べるし、ゴーヤーは植えています。

新聞は『サンパウロ新聞』を購読しています。ブラジルの新聞は娘がとっています。テレビは日本語のNHKを観ています。たまにはビデオも観ますよ。ウチナーの民謡とか日本の演歌なんかね。日本で出版された本はたくさん持っています。模合も昔はやりましたが、現在は参加していません。銀行は日系人出資による「南米銀行」（現在レアル銀行）を利用しています。

沖縄には夫婦で二回ほど帰っています。最初の一九八八年は妻の両親を訪ねるため、二回目の一九八九年は妻の父が亡くなったために帰国しました。浦添の様子はすっかり変わっていて、どこがどこだか分からなくなっています。二回とも友達に会うことができました。二回目ときは三男のいる愛知にも行きました。ポリビアにも二回行っています。今はみんな開拓されてすばらしくなっています。

【二〇〇八年八月二〇日石川友紀調査】
サンパウロ市カーザベルデ地区

ポリビアから転住、今はブラジルがいい



比嘉志世子

戦後一世／牧港

アグリクラニ

一九四八年八月十一日

私は父又吉良雄、母カマド（旧姓照屋）の四女として、牧港で生まれました。きょうだいは六人です。浦添小学校を五年まで出て、第一陣でポリビアに行っていた兄に呼び寄せられ、家族六人でポリビアに行きました[※]。第八陣です。当時十二歳でした。母は家も土地もみんな売って来たと思います。船賃のことは、私は子どもでしたので覚えていません。ポリビアには白・シンメーナービ・味噌のカーミヤ脱穀機も持っていききましたよ。あと、蚊が入らないように蚊帳も持って行きましたね。

船は那覇港から出発し、アフリカ経由で香港・シンガポール・モリスヤス・ケープタウン・リオ・そしてサントス港に着きました。船旅での一番の思い出は、香港とシンガポールでした。何も知らないですから、香港を見てとても素晴らしいと思いました。あと、ケープタウンでは、アフリカだから黒人だけいるのかと思ったら、みんな白人だったので珍しかったですね。

※『コロンビア・オキナワ入植五〇周年記念誌 ポリビアの大地に生きる沖縄移民』によると、又吉カマドを家長とする六人は、第八次ポリビア移民として一九五九年七月十九日にチサダネ号で出航した。

サントスからは汽車で二週間かけてボリビアに行きました。汽車の旅は寝ることが大変でした。母が文句ばかり言ってましたね。途中で止まって、男の人が木炭を積むこともありました。だんだん山奥に行くので「どこに連れて行かれるのかねえ」って、口には出さないけど内心とっても心配でした。ボリビアは第一陣で渡航していた兄がうるま病にかかっています、奇跡的に治りました。その後、一九六三年にブラジルのサンパウロに行きました。このときも兄が先に行つて、後から家族みんなで行きました。

結婚したのは一九七三年十二月。二五歳ぐらいのときでした。夫は屋嘉出身の比嘉茂です。夫は北海道で生まれ、嘉芸中学校を二年のときに中退して、第十二陣でボリビアに来ています。夫がブラジルに来たのは一九七〇年の頃だと聞いています。結婚後はサンパウロのカサドルに住みました。

結婚当時、私は女性用の洋服を売り歩く行商をしていて、子どもが生まれた後も十五年間続けました。夫は新日鉄の鉄工所で通訳をしていました。一九九三年には旅行社を経営し、二〇〇三年から日伯連合協会に携わりました。今は夫婦ともに隠居しています。

子どもは男の子二人、女の子は一人です。長男は現在三四歳。公務員をしています。ウチナンチュの三世と結婚しています。県費留学生として琉大に一年間留学した経験もあります。長女は現在三〇歳、上智大学で語学を学んでいます。二男は現在二九歳、ホテルで働いています。息子二人はブラジルの大学に行っています。

仏壇は夫が長男なので持っています。沖縄の行事、お盆も正月も

やっています。シーミーはないですね。夫婦での会話はウチナーグチ・日本語・ポルトガル語もみんな混ぜこぜで使っています。子どもとは日本語とポルトガル語です。ポルトガル語が一番多いですけど、私たちはなるべく日本語で話そうとしています。沖縄料理はゴーヤーチャンプルー・沖縄そば・ナーベラーなんかも食べています。新聞は『サンケイ新聞』と現地の『エスタド・デ・サンパウロ』という新聞をとっています。テレビはNHKも観ています。ラジオはあまり聞かないですね。貸店舗を二つ、貸家を三つ持っています。カサリアル沖縄県人会に入っています。最近から琉球舞踊を始めました。

現在、夫と二男の三人で暮らし、何の不自由もなく生活しています。今はブラジルがいいです。ただ、自分のシマは懐かしいです。

【二〇一一年十月十六日 島袋伸三調査】

沖縄県那覇市

アルゼンチン

ARGENTINA

1931（昭和6）年に浦添からの最初のアルゼンチン移民が渡航、浦添からの戦前の移民数は4人であった。最初は工場などで働いていたが、次第に都市で洗濯業や花卉栽培等を営むようになる。現在、日系人の7割以上が沖縄県出身者となっており、浦添出身者も浦添市民会を組織して活動を行っている。

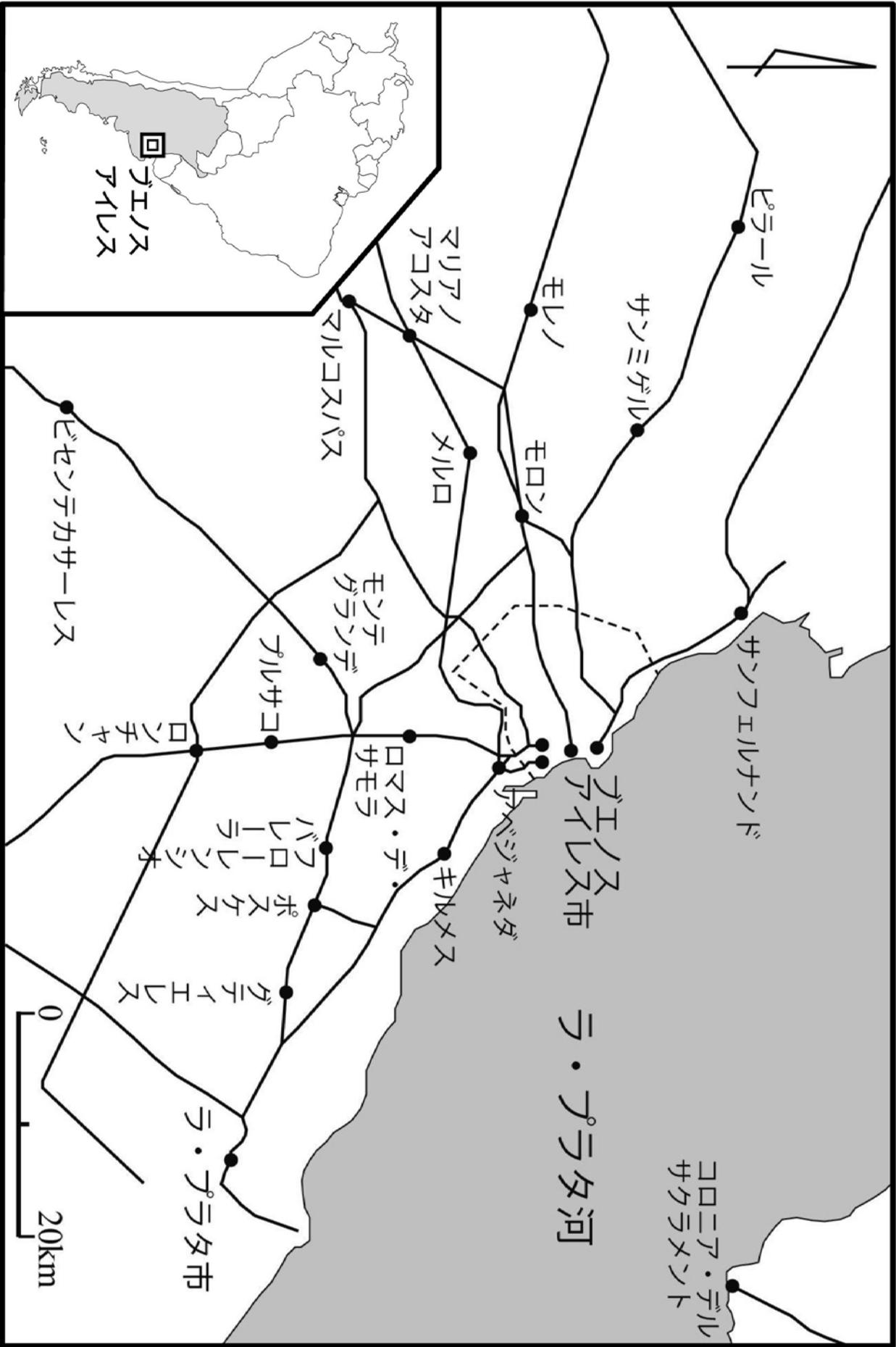
ハワイ・北米

南米

アジア太平洋

国内





あつという間の五十年



伊舎良初子（旧姓 又吉）

戦後一世／牧港

親富祖小
オヤフツグワコ

一九四〇年七月二九日

私は父又吉次郎、母カマドの二女として牧港で生まれました。私たち家族は、母の兄にあたる又吉三郎の呼び寄せで、アルゼンチンへ行きました。私の家は男四人女五人の九人きょうだいで大家族でした。アルゼンチンに来たのは両親と、すでに沖繩で結婚していた姉を除くきょうだい八人の計十人です。当時、私は野嵩高校二年生に上ろうとしていたときでした。私は残るつもりでしたが、手続きがなされていたので、やむを得ず高校を中退してアルゼンチンに来ました。アルゼンチンに行くことを決めたのは父です。父は防衛隊にとられたときに負傷したようで、「また戦争が来たら大変。ない所に行こう」と思っていたようです。

一九五七年一月十七日に那覇港を出て、三月二二日にブエノスアイレス港に到着しました。神戸には行かず、アフリカ経由でした。船はオランダ船籍のテゲルベルグ号です。船にはウチナーンチュが一〇〇人近く乗っていたと思います。私たちは呼び寄せなので、自費で行きました。浦添にいたとき、父は精米所を持っており、養鶏もしていました。また、アメリカ軍の洗車場もあり、経済的には恵

まれていました。ですから、アルゼンチンに来た頃は「なんで来なければいけないかったか」と考えたりしていました。浦添で住んでいた瓦葺の家は残したままだったので、一度は沖繩に帰る準備もしていたようです。しかし、せつかくみなさんから餞別も贈られ、帰るに帰れない感じでした。父は義理堅かったんですね。

一九五八年に東風平村字富盛出身一世の伊舎良政弘（一九三二年生）と結婚しました。夫は遠い親戚のおじさんの養子として、戦後ひとりでアルゼンチンに来て、ランドリー（洗濯業）を営んでいました。子どもは女の子三人、男の子一人です。長男はダニエル・マルセーロといいます。長女アリーシャ（一九五九年生）はアルゼンチンで二世の夫とともにアクセサリーの店をもっています。二女のミルタ（一九六〇年生）は二〇〇五年七月から家族で日本にいますよ。三女エレナ（一九六二年生）は小児科医で私と一緒に住んでいます。

以前は日系人が経営するランドリーはたくさんありましたが、一世の方々が歳をとっていくにつれ、後継ぎがいらないんですよ。今の子どもたちは勉強して医者や弁護士とかいろんな仕事をするか、デカセギに行くかです。そういう時代なんです。

父は故郷ふるさとが恋しかったのか、何度か沖繩に帰っています。沖繩には姉と沖繩に戻った兄がいるので、三か月とか四か月ぐらい滞在していました。そして沖繩旅行中に病気になり、那覇病院で亡くなりました。

私自身も何度か日本に行っています。姉に会うため一九八二年に

帰ったのが最初です。姉はアルゼンチンにも遊びに来てくれました。舅の八八歳のトウシビー（米寿）祝いのときにも夫婦で一か月ほど沖繩に戻りました。一九八九年には夫とともに群馬県桐生市で一年間仕事をしました。アルゼンチンに戻った後、夫が体調を崩したので琉球大学附属病院で治療を受けるため、一九九二年に再び沖繩に行ったのですが、そのまま亡くなりました。葬式は沖繩で行い、遺骨をアルゼンチンに持って帰ってきました。夫のところには門中墓があるので、義兄がどこに埋葬した方がいいのか聞いて来ましたが、息子が「自分たちはアルゼンチンにずっといるから」ということで連れて帰ることにしました。二〇〇五年には、浦添市の南米移住者子弟研修生に選ばれたためのマリーナと一緒に浦添に帰っています。そのときに儀間光男市長（当時）にお会いして、研修生のための寮が欲しいという話をしました。

アルゼンチンの国籍はとっていません。父は最初から永住のつもりだったと思いますが、私は二年ぐらいで帰るつもりでいました。帰りたいという気持ちはありました。自宅は一階建てで二四〇平方メートル、屋敷は十二メートル×六〇メートルです。貸家を二軒もっています。

宗教はやっぱり仏教ですね。子どもたちはカトリックになっています。お盆や元旦、一日・十五日は仏壇にお供えものをして拝んでいます。長男がいるのでイーフェー（位牌）も持ってきました。夫とは方言で会話をしていました。子どもと話をするときにはスペイン語・日本語がマンチャーヒンチャー（混合）です。子どもたちはウ

チナーグチを聞くことも話すこともできません。日本語も少ししか分からないですね。食事はやっぱり日本食がいいです。毎日ご飯を炊いています。パンは一週間にも一回程度です。邦字新聞は購読していません。スペイン語のラジオを聞き、テレビを観ています。雑誌は日本語のものを読んでいます。『文藝春秋』とか週刊誌が入ってきます。横合は月一回、一〇〇ドルのものに参加しています。現在、浦添市民会の代表として活動をしています。二〇〇八年三月に宜野湾浦添市民会から独立し、現在会員は二五人です。在亜沖繩県人連合会の婦人部で理事も務めています。

あつという間に五〇年も過ぎてしまいました。沖繩へ帰ったときに同級生で集まりましたけれど、私たちは取り残されたような気がしますよ。アルゼンチンにすっかり慣れて。

【二〇〇八年九月一日石川友紀調査】

ブエノスアイレス市

戦後ボリビア移民からアルゼンチンへ



石川春枝（旧姓山城）

戦後一世／屋富祖

ウツヤダスグ
大山城

一九三九年十二月三〇日

私の父は山城興善、母はツルといい、その三女です。屋富祖出身で当時は屋富祖二班といっていました。仲西小学校、仲西中学校を卒業し、那覇高校の定時制二年生のときに兄の山城興喜の呼び寄せでボリビアへ渡航しました[※]。一九五七年琉球政府計画移民の第四次移民です。このとき一緒に渡航したのは、兄嫁の徳子・兄の息子の興一郎・私・姉の美代子の四人でした。十月二二日に那覇港を出発しました。船はオランダ船のチサダネ号で、上半分は客船、下半分は貨物船でした。旅費は琉球政府の貸付を利用しました。浦添出身の又吉光子さんが同じ船に乗っていたことは覚えていません。

ボリビアでは兄のいる第一移住地に行きましたが、水害があったので第二移住地に移動しました。一九六〇年に宜野湾市真志喜出身の石川脩（一九三二年生）と結婚しました。夫も私と同じ第四次ボリビア移民です。一九六一年に長男の正が、一九六三年には長女の

※『コロナ・オキナワ入植五〇周年記念誌 ボリビアの大地に生きる沖繩移民』によると、山城興喜は第一次ボリビア移民として一九五四年六月十九日にチサダネ号で出航した。その後、徳子・興一郎・美代子・春枝ら四人が第四次ボリビア移民として一九五七年十月二二日にチサダネ号で出航した。

恵美子が生まれ、恵美子が二歳のとき、一九六五年三月にアルゼンチンに来ました。アルゼンチンには飛行機と汽車を乗り継いで来ました。最初はホセセパスに五年間いました。そこでカーネーション作りの労働者として一年半ほど働き、その後独立して花屋を営み、現在は洗濯屋を夫と二人で経営しています。「ティントレリアハポネーサ」という名前のお店で「日本人のクリーニング店」という意味です。ウィークデーの昼間は落ち着いていますが、金曜日や土曜日はそれなりに忙しいです。

ボリビアで生まれた長男正は、現在群馬県で船のプルーフを作る仕事に携わっています。最初に日本に行ったのは十八年前で、いったん戻ってきた後、再度日本に行き、現在の会社には十五年勤めています。向こうでブラジルの日系二世フジハラタカコと結婚し、男の子が一人（八歳）いて、現在日本の学校に通っています。孫はアルゼンチンの言葉が話せなくて、日本語を使っています。

長女恵美子も現在横浜で生活をしています。アルゼンチンのNECで働いているときに知り合った名古屋出身の日系二世のアオヤマシゲアキと結婚し、女の子が二人（七歳と五歳）います。シゲアキは日本で、NECの正社員として働いています。アルゼンチンで生まれた二男敬（タニエル）は、現在バイクの修理工の仕事をしています。

国籍は日本です。移民して来たときから永住のつもりでした。宗教は祖先崇拜。仏壇は沖繩から送られてきました。私は長男嫁なので義姉たちからいつも教えられています。命日とかウチカビ（紙銭）

とか、シーミーとか。墓もサンレーの墓地内にあります。十人ぐら
い入れる大きなお墓です。「長男だからこれが大事だ」とお婆あちゃ
ん（義母）がいつも言っていました。

家も自分たちの家で二階建てです。三〇〇平方メートルぐらいあ
ります。屋敷は十一メートル×三五メートルです。夫と話をすると
きは、日本語・沖縄語・スペイン語ちゃんぽんですが、主に沖縄語
ですね。子どもには日本語を使っています。沖縄料理はゴーヤーと
かですね。家の裏にゴーヤー・大根・キャベツ・ゴボウ・ナーベー
ラー・シブイ・トマトなんか植えていますよ。野菜の種は日本から
みんな送ってくれています。家の向かいには、糸満出身の仲西さん
の豆腐工場があって、そこで温かいゆし豆腐を週に一回買いに行っ
ています。もう四〇年間も続いています。豆腐は健康食品としてア
ルゼンチン人も買いますよ。ここではかまぼこ・納豆・みそ・醤油
も作っているんですよ。新聞は『らぶらた報知』を購読しています。
スペイン語の読み書きはできますが、こちらの新聞は買ったことが
ありません。このラジオは一応聞いています。日本の雑誌は娘が
送ってくれます。浦添市民会、沖縄県人会の婦人会に入っています。
夫は豆腐屋の仲西さんと一緒に親睦としての模合をしています。月
一回三〇〇ペソのものです。

沖縄には一度だけ帰ったことがあります。きょうだいに呼ばれ
て一度はぜひ行かないといけなからって、一九九三年に三五年ぶ
りに帰りました。でも、どこがどこかすっかり変わっていました。
私の住んでいた家は三階建てのアパートになっていました。こ

のときは、母の弟の宮城高仁さんにもお会いしました。沖縄には三
週間滞在し、それから北海道旭川に行つて、神奈川にいる夫のおい
に会いに行き、それからアルゼンチンに戻りました。日本本土には
二〇〇〇年、二〇〇一年、二〇〇三年に子どもたちの所に行きまし
たが、沖縄に帰つたのは一九九三年の一回だけです。

私たちをボリビアに呼び寄せた兄興喜が亡くなったとき、すぐ電
話があつたのでボリビアに行きました。両親を戦争で失つていたの
で、十歳違いの兄は親代わりでした。兄は現在第二移住地の墓地で
眠っています。二女の好子姉さん（一九三六年生）はアメリカ人と
結婚して、現在ワシントン州シアトルに住んでいます。

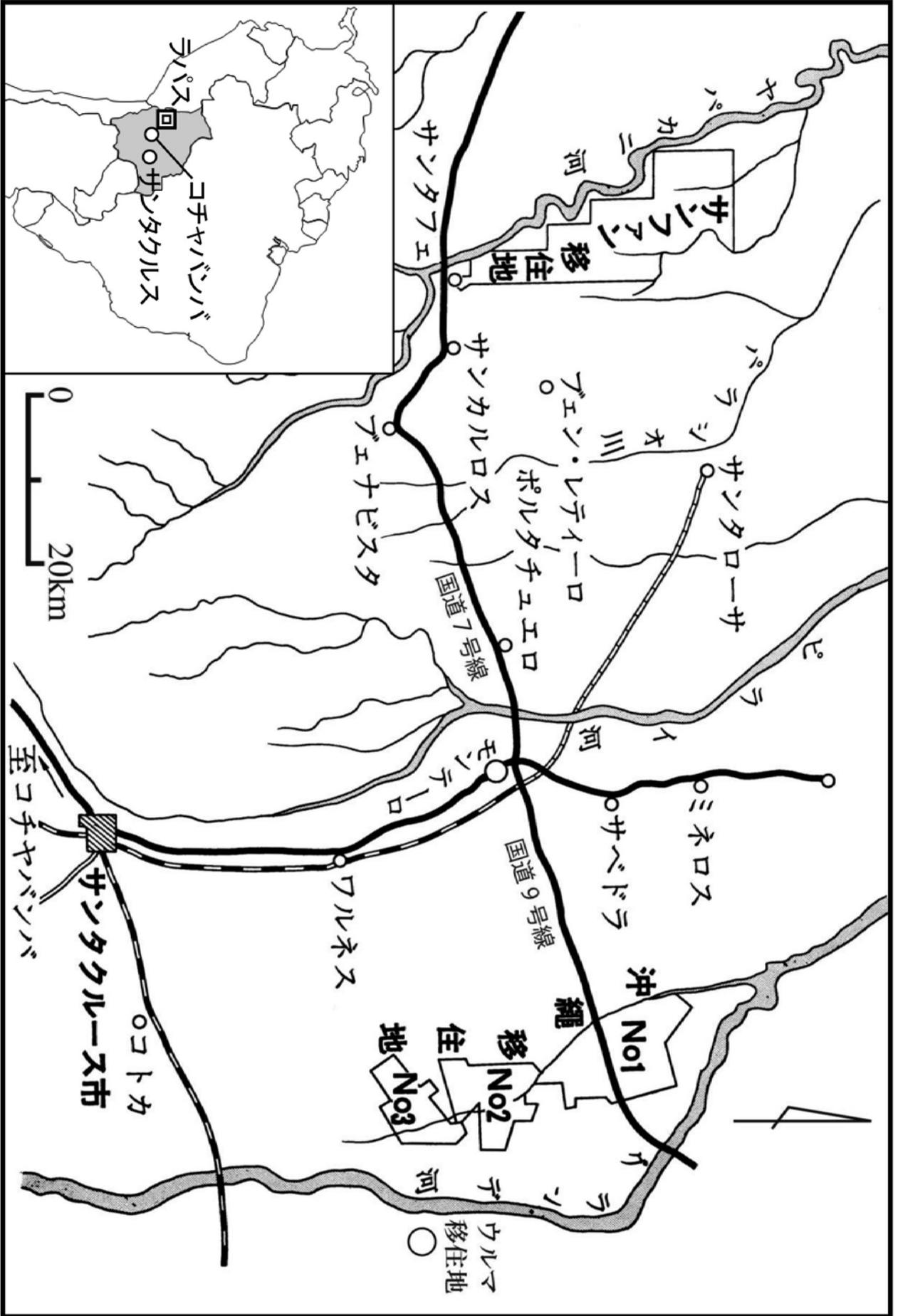
【二〇〇八年九月二日石川友紀調査】
ブエノスアイレス州サンミゲール

ボリビア

BOLIVIA

沖縄からのボリビア移民は、戦前ペルーへ移民した人々の転住が始まりだと考えられている。戦後は1954（昭和29）年、琉球政府による計画移民の第一陣がボリビアに渡った。最初の入植地「うるま移住地」で「うるま病」と名づけられた熱病が発生し、85人が罹患、浦添出身者を含む15人が亡くなった。人々はパロメティーヤへの移住を経て、1956（昭和31）年、現在のオキナワ第一移住地へ移り住んだ。その後、継続して移民が送り出され、1959（昭和34）年に第二移住地、1961（昭和36）年に第三移住地が創設された。浦添からは計画移民で39人がボリビアに渡っている。





沖 No1
 移 No2
 住 No3
 地
 移住地
 〇

至コチヤビンバ
 サンタクルス市
 〇コトカ

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

サンタフェ

サンカルロス
 フェナピスタ

ジェン・レティエロ
 ポルタチュエロ

ミネロス
 サベドラ

ウルム
 移住地
 〇

サンタクルス市

移 No2
 住 No3
 地

ウルム
 移住地
 〇

試行錯誤を重ねたポリビア開拓



比嘉秀充

戦後一世／兵庫県杭瀬

樽比嘉小タルヒシヤグワ

一九三五年十月十六日

父比嘉秀明（港川出身）、母園その（旧姓宮城。仲間出身）の長男として、兵庫県杭瀬で生まれました。父は普天間農学校を二年で中退、大正十五年に大阪府大正区鶴町にあった日立製作所に入所して鋳物を作っていたといえます。母も同じ会社に勤めていたそうで、二男の健男は大正区鶴町で生まれています。その後戦争が激しくなり、父は大都市はやられると思っただけ、会社を辞めて福岡県久留米のブリジストンタイヤ株式会社に入社し、福岡県の県境にあった佐賀県に引越しました。そこで三男貞夫が生まれ、終戦後、私が小学校五年生のときに沖繩に帰って来ました。沖繩に戻ってきた父は、与儀の農事試験場畜産科に勤めたのですが、退職して自宅で養豚業を始めます。

私が那覇高校を卒業した後、すぐに家族でポリビアに移民しました。私たちは第一次移民で、一九五四年六月十九日にチサダネ号で出発しました[※]。渡航費用は全額琉球政府が負担しています。当時私

※『コロナ・オキナワ入植五〇周年記念誌 ポリビアの大地に生きる沖繩移民』によると、戸主比嘉秀明・妻園・長男秀充・二男健男・三男貞夫ら五人は、第一次ポリビア移民として一九五四年六月十九日にチサダネ号で出発した。

は十九歳、健男は中学三年生、貞夫は小学六年生でした。移民すると決まったとき、南米っていったらアメリカ大陸だっていうことで、広大な土地で農業ができるんだって思いました。農業はやったことはなかったのですが、そういう魅力がありましたね。

入植した年の十二月、父と三男の貞夫がうるま病にかかりました。うるま病で最初に亡くなったのは西銘さん、次が平良さん、そして三番目は貞夫でした。弟はわずか十三歳で亡くなったのです。その一週間後私も罹病し、父とともに他の病人と一緒にサンタ・クルスの病院に行くことになりました。このとき母が付き添いとして一緒に来ました。健男はまだ罹病していませんでしたので、一人移住地に残っていました。サンタ・クルスの病院に着いたのが十二月二四日、クリスマスイブの日でした。途中、あと一時間で病院に着くというところで、私達と一緒に行ったイトスさんが車の中で亡くなりました。病院には一か月近く入院していました。私は若かったので回復が早かったのですが、父は当時五六歳でしたのでなかなか回復できず、完治するのに一年くらいかかりました。その後、移住地はパロメティーヤに移動しましたが、私たちは父がそういう状態でしたので、当時、移民の受け入れ責任者だったホセ・アカミネさんの家の倉庫を借りて、そこで六か月くらい療養生活をしていました。結局、私たち家族は移住地と合流せず、親戚にあたるマエシロ嘉常さんがコチャバンバから九キロほど行った場所に土地を持っていたので、その土地四〇町歩を購入し、バナナやコーヒー栽培などをやってみました。そのとき港川にあった軍用地を売り払い、その

お金を購入資金とし、そこで農業をしました。沖縄移住地でまだ何もやらなかった頃に、ブルトーザーで抜根したりトラクターを導入したりして開墾していきました。

しかし、農場がきれいになったものの、収穫時期に雨が降り過ぎる、必要なときに雨が降らないという感じで、二、三年は失敗の連続でした。また、その頃は市場が小さかったので、トウモロコシを植えても売れない、野菜を作ったけれど売れない、ミカンも相当作ったのですが、何を植えても売れない。そんな状態が続き、今度は人からお金を借りて、毎年利息だけ返して全額払うのに十五年間かかりました。お米や大豆、最終的にサトウキビもやりました。あの頃、琉球政府からボリビアに來られた知花さんという方から、農業試験場の種を色々もらって作ったり、あるいは種として売ったりしました。養豚場もやりました。三〇〇頭か四〇〇頭ぐらい飼ってましたけど、これも市場がなくて大変でした。

一九六〇年、三五歳の頃に東風平村出身で四つ年下の久手堅弘子と結婚しました。子どもも生まれ、幼稚園や日本語学校に通うためにサンタ・クルスの街まで行かなければならなくなったとき、私の母がずっと引率してくれたのですが、妻が「田舎に住んでいたんじや教育もできない。街に出よう」ということになりました。

そして、妻は市街地でちよつとしたキヨスクを始め、朝早く商品を仕入れして、夜は十二時頃に閉めるという暮らしを何年かしていました。キヨスクを三年ぐらい続けた後、だんだん街にも慣れて、もつと手広くやろうと思ひ、中央市場の近くでレストランを始めたら、

それが成功して、借金も減り始めてきたんです。一九七五年、借金を完済し、両親を初めて沖縄に里帰りさせることができました。

妻がレストランをしているあいだ、私は引き続き農場でサトウキビを作ったり牧場をしていたりしたのですが、日本企業でストという化粧合板を製造する工場に通訳として採用され、一九八五年まで勤めていました。建男も同じ会社に入り、彼は今年の五月まで働いていました。

マエシロさんから買った土地は、仕事を辞める前に売りに出し、そのお金で長女ソノミと二女アケミをアメリカの大学に留学させました。ソノミは大学卒業後、日本に住んでいた時期もありましたが、今はボリビアで日本人会の事務局長をやっています。アケミは日立に就職し、スペイン・ロンドン勤務を経て、今月日本へ転勤になりました。

三女ヨウコと四女エツコはブラジルへ行きました。ヨウコは大学で経営学を学んだ後、ブラジル日系二世の小野タダトシと結婚。エツコは長野県で結婚し、現在もそこで生活をしています。

五女ユウコは浦添市の南米移住者子弟研修生として一年間日本に滞在し、その後すぐ東京の創価大学で一年間日本語を学びました。それが終わって、今度は本科の方で四年間勉強しましてね。現在は名古屋で通訳の仕事をしています。

私の子どもたちから刺激を受けたのか、健男の息子も創価大学に行きました。あのときはお互いに刺激を与えて、「外へ、外へ」という傾向が強かったですね。

一九八五年にストを退職した後、旅行会社をはじめました。友人の紹介で、「ラパスにあるサクラ旅行社がサンタ・クルスに支店を出すので、是非やってみないか」という話をいただき、三年くらいやりましたかね。ちょうどあの頃は日本へのデカセギが多かった時期で、猫も杓子も日本に行き、飛行機便がとれないほどでした。だからあの頃は、うんとよかったですね。その後は妻の看病に全力を尽くしました。

妻は脊髄小脳炎膜症という難病で、十一年間闘病生活を送りました。母が一九九六年に九三歳で亡くなり、その後から「何だか歩くのがおかしい」と言い始めたのが最初でした。『リットルの涙』という映画がありましたが、あれと同じ病気です。最初は歩けなくなつて、杖もつけなくなつてそれから車椅子です。手も自由に動かなくなり、それから徐々に食事、言語障害が出ました。

一九九九年の九月に日本で精密検査を受け、二〇〇二年にはちょうど二女が仕事の都合でスペインにいたので三か月ほど滞在し、治療を受けたりしましたが、治す方法がないということでした。十一年の闘病生活の末、二〇〇七年五月に亡くなりました。

妻には今まで本当に苦勞をかけました。食堂の仕事は大変なんですよ。仕入れのために、朝五時頃に市場に行つて、肉を買ったり油を買ったりね。大変な思いをして借金を返すために一緒にやってくれました。そういうなかで子どもたちを育て上げ、子どもたちみんなに囲まれて亡くなりましたからね。

妻が亡くなってから二か月後、本土に住んでいる娘とともに沖縄

にいる妻の母親のところに行きました。義母は今、沖縄に戻っていて、妻の病氣のことですつと心配をかけていたので、私が元気なうちに報告しておかなければと思つて、急ぎよ一週間ほど沖縄に帰りました。

その前にも、一九六七年と一九七二年に親戚に会うため沖縄に行きました。最初に帰つたとき、同じ中学の同級生だった比嘉昇元市長がみんなを集めて同窓会を開いてくれたのですが、まさかあんな急に亡くなるとは思わず、本当に残念です。

農業で失敗を重ね、借金ばかり抱えてにっちもさっちもいなくなつちやつたんですね。父は「子どもたちをこんな所に連れてきて、こんなに苦しませて申し訳ない」と思つていたんです。そんなときに偶然創価学会の人と知り合い、入信しました。それからいろんな人とも巡り会つて、また日本にも何回も行かせてもらいました。

ボリビアに来て初めのうちはね、なんでこんな所まで来たんだろううつて思いましたけども、子どもたちもこれだけ成長させて、それぞれの道を歩めていますのでね。後悔はないです。

【二〇〇九年九月二一日 島袋伸三調査】

サンタクルス県サンタ・クルス市

うるま病で弟を失う



比嘉健男

戦後一世／大阪府大正区

樽比嘉小タムシヒキヤウ

一九三八年四月七日

父は比嘉秀明（港川出身）、母は園（旧姓宮城）といひます。男三人きようだいの二男として大阪府大正区鶴町四丁目一一七九番地で生まれました。父は戦前、大阪で出稼ぎをし、戦後は港川で農業をしていました。

私は仲西中学校を中退し、一九五四年十五歳のときに第一次ボリビア移民として家族五人で渡航しました。沖繩を出発したのは六月十九日だったと思ひます。船の名前はチサダネ号でした。沖繩での財産は来るときに処分して来たと思ひます。渡航資金は琉球政府資金だったと思ひます。当時は中学生だったので、南米つてアメリカですから「いい所にいくんだな」と思つて来たらびつくりしました。

八月十五日にサントス港に上陸し、その後うるま耕地に入植しましたが、うるま病が発生したため二か月後の十月には耕地を出ました。父と弟の貞夫がうるま病に罹り、弟はそのままうるま耕地で亡くなつてしまいました。弟を亡くしたところに、同じ浦添出身の山城興喜さんが私のところに来てくれました。「弟のことは自分たちが残つてやつておくから」ということで、父をサンタ・クルスの病院

に入院させたのですが、病院に来たと同時に私も発症し、二週間ほど入院しました。安心したのかもしれませんが。その後、兄は他の移住者と一緒にパロメティヤに行つたのですが、私と両親は行かずに赤嶺カメさんという方の家で七年ぐらのお世話になりました。その後、ラパスにいたマエシロカジヨウさんという方が、コチャバンバから九キロほど行つた所の土地を持つていたので、そこを借りて家族で農業をしました。その土地にはすでにミカンやバナナの木があつたので、それを収穫して街の方に売りに行つたこともあります。お米を作つたがうまくいかず、最終的には兄と一緒にサトウキビを十五年間作つていました。

一九六一年、一二歳のときに牧港出身の旧姓又吉光子と結婚し、子どもたちの学校のことを考へて一九七〇年にサンタ・クルス市街に移りました。サンタ・クルスに移つた後もコチャバンバで農業を続け、妻は内職の洋裁で家計を助けてくれました。しかし、一九七二年にサトウキビ農場が焼けてしまい、収穫をあてにして借りていたお金が返せず大変な思ひをしました。結局、日本企業で原木の買付けの仕事に就き、三五年間勤め上げ今年の五月に退職しました。

子どもは男の子一人、女の子四人の五人おります。長女の由美子はペルーのウチナー二世と結婚し、神奈川県藤沢市に住んでいます。二女美代子・三女妙子・四女幸子もそれぞれ結婚、二女と三女は長女と同じ神奈川県で、四女は東京都で生活をしています。長男の弘治は創価大学を卒業後、メキシコ大学大学院で経営学を修了後、

二〇〇一年にメキシコでデンソーに入社。二〇〇八年に退職して現在にはポリビアで鉱山ドリルの販売店を経営し、私もその会計事務を手伝っています。

これまで日本には六度、沖縄に三度帰っています。最初に沖縄へ帰ったのは一九七二年です。次は浦添市制二〇周年記念式典の招待を受けて、一九九〇年に夫婦で帰りました。一九九四年にも沖縄に帰っています。

今住んでいる家は、勤めていた会社の社宅を社長にお願いして譲ってもらった家です。ここに住んでもう二〇年以上になります。他にも市内に一つ、郊外に二つ屋敷を持っています。宗教は創価学会です。仏壇は持っていません。お墓はニツカイの共同墓地を持っています。沖縄の行事はやっていません。お盆もやっているしウチャトーもやっています。夫婦で会話をするときには日本語とウチナーグチです。親子では日本語を話すようにしています。料理はウチナー料理でも何でも食べます。ヒージャーも好きです。新聞はたまに『El Deber El Día』を読みます。日本人会館に行けば『沖縄タイムス』、『琉球新報』が置いてありますよ。最近は図書室ができたんですよ。日ボ協会、日本人会、沖縄県人会に所属しています。頼母子は一時やったけど、今はやっていません。

十五歳で来た当時はがっかりしましたけど、今は結婚をして子どもたちもいますし、来てよかったかなと思っています。

【二〇〇九年九月二二日 島袋伸三 調査】

サンタクルス県サンタ・クルス市

二か月間の船旅



比嘉光子（旧姓又吉）

戦後一世／牧港

アガリクラニー

一九三九年五月十三日

私は父又吉良雄、母照屋カマドの三女です。きょうだいには男一人、女三人の五人ですが、沖縄戦で父と二女を亡くしました。浦添中学校を卒業後、ひめゆり橋服装学院という所で二年間洋裁の勉強をしました。その学校は今もあるかどうか知りません。

長男兄さんが第一陣として夫婦でポリビアに渡った後、私は兄夫婦の呼び寄せで一九五七年に第四次としてチサダネ号に乗ってポリビアに渡りました[※]。当時十八歳でした。この後第八次で母・二男兄さん・姉・姉の子ども二人・妹の合わせて六人が来ました。ポリビアでは長男兄さんのいた第一コロニアの南一号线に行きました。家族一緒だったこともあって「外国に行く」ととても喜んで来ました。チサダネ号は貨物船でしたので、荷物を降ろすためにあちこちの港で停まるんです。ポリビアまでの二か月間は旅行みたいで楽しかったです。サントスに着いたときにはがっかりしました。私たちは

※『コロニア・オキナワ入植五〇周年記念誌 ポリビアの大地に生きる沖縄移民』によると、

光子の兄又吉正二・弘子夫妻は第一次ポリビア移民として一九五四年六月十九日にチサダネ号で出航した。光子は第四次ポリビア移民として一九五七年十月二二日にチサダネ号で、カマドを家長とする六人は第八次ポリビア移民として一九五九年七月十九日にチサダネ号で出航した。

呼び寄せだったので、土地の配当はなく、結婚するまでは長男さんの土地で家族一緒に農業をしていました。

現在、長男兄さん・姉・妹はブラジルのサンパウロに、二男兄さんはチリのイキキで生活しています。結婚後は内職で洋裁をしていましたが、今はもうやっていません。大正琴や三味線・コーラス・舞踊などの愛好会に参加して、その衣装をボランティアで作るぐらいです。今は趣味で毎日忙しいですし、ここに来て満足しております。

【二〇〇九年九月二一日 島袋伸三調査】

サンタクルス県サンタ・クルス市

チリとボリビアを歩き来



又吉正行

戦後一世／牧港

アガリクラニー

一九三四年五月十一日

父良雄、母カマドの二男です。学童疎開で宮崎県に行ったことがあります。父を戦争で失い、戦後は浦添中学校を卒業後、牧港補給地区でエンジニアの仕事をしていました。ボリビアに来たのは一九五九年九月で、当時満二四歳でした。第一次移民として渡航していた兄の呼び寄せで、母・姉・姉の子ども二人、妹と私の六人で、チサダネ号に乗って来ました。第八次で渡航費用は琉球政府が持ってくれました[※]。私は呼び寄せだったので土地の配当はなく、第一コロニアの南一号に一〇〇〇ドルほどの土地を買い、そこで農業と運送業をしていました。しかし、この土地はあまりにも悪かったので、家族はみんなブラジルに移りました。

一九六二年、二九歳のときに第一次移民で越来村出身の町田ナへと結婚しました。その後長男が生まれ「やはり家族一緒がいい」と思い、一九六五年の六月頃に兄たちのいるブラジルに行きました。ブラジルに渡って一年を過ぎた頃、妻が病気になる、妻の家族がい

※『コロニア・オキナワ入植五〇周年記念誌 ボリビアの大地に生きる沖繩移民』によると又吉正行は、母カマドを家長とする六人で第八次ボリビア移民として一九五九年七月十九日にチサダネ号で出航した。

るポリビアに戻りました。最初は妻が回復するまでというつもりでしたが、義母がここに残って欲しいと言ったので、南一号の土地を売却し、北一号でマエシロさんから土地を買い、そこで農業をしました。北一号では大豆・トウモロコシ・コーリヤン、裏作で麦なんかを作っていました。北一号の土地はとてもいい土地だったので、両脚のリウマチが原因で農業ができなくなる一九九六年まで農業を続けました。現在は子どもたちも農業をしないのでこの土地も売り、サンタ・クルスにきました。最初はサンタ・クルスの街から五キロ半ほど離れた場所に住み、一九九六年六月に今の家に移りました。

リウマチにかかったのは一九七五年です。急に熱発してしまつて。専門医が移住地にいなかったため、リウマチ熱だつてことは後から分かりました。そのとき日本から派遣された医者だったので、治療を受けながら救急車の運転を八年間していました。救急車の運転手の傍ら、養鶏や養豚もしていました。治療のため一九九九年七月に東京に行き、その年の十一月と二〇〇〇年一月の二回に分けて手術をしました。現在はチリで医者をしている長男馨の家とポリビアを行き来する生活をしています。

子どもは男二人女二人の四人です。みんな散らばっていますが、ポリビアには長女と二女がいます。二男の健次は、ペルーで日本やアメリカから来る中古車を売る会社に勤めています。二女純子はサンタ・クルスで国際貿易の運送業をやっています。

国籍は日本です。ここに来るときから永住するつもりでした。宗教は創価学会です。夫婦での会話はほとんど方言ですね。親子では

スペイン語です。子どもたちは方言を聞くには聞くんですが、やはり話すのは難しいようです。ウチナー料理は妻が作っています。ゴージャチャンプルとかナーベラーンプサー・チブルンプサーとかチンクワ（島かぼちゃ）なども食べます。新聞は創価学会の新聞をたまたに読みます。農業をしているときには『CAICO新聞』、『沖縄タイムス』なども読んでいました。日本人会は今のところ入ってないです。県人会には入っています。頼母子は昔はやってました。

【二〇〇九年九月二一日 島袋伸三調査】

サンタクルス県サンタ・クルス市

第四次ポリビア移民として



山城徳子（旧姓玉城）

戦後二世／伊江村

一九三二年八月十五日

父玉城徳行、母島袋サダの長女です。ここに来る前は教員をしていました。屋富祖出身の夫山城興喜とは、彼が伊江島の弾薬部隊の通訳をしていたときに知り合いました。

一九五六年に二六歳で結婚、夫は第一次ポリビア移民として単身渡り、私と息子、夫の妹二人は一九五七年の第四次ポリビア移民と

してポリビアに行きました[※]。船の名前はチサダネ号で、那覇港から香港、ダーバンとか経由してきました。渡航費は夫が準備し、七〇〇円をもらったことを覚えています。正直な話、私はあまりポリビアに行きたいとは思っていませんでした。ただ家族がいっぱいいたので、仕方なく来たという感じです。屋富祖にあった土地は処分して来ました。

初めは夫のいる第一コロニアに行きました。そこに三年ほどいて、米を作っていました。向こうは水害が多く蛇も多くて大変でした。そのため、一九五九年に第一コロニアの土地を売り、第二コロニアに移り、一号線で土地の配分を受けました。ここでは主に米を作り、トウモロコシ・ユッカ（キャッサバ芋）・大豆・野菜も作りました。

一九七四年に那覇出身の新垣さんから今住んでいる土地を購入し、以来ここに住んでいます。子どもは三人いて、長男の興一郎は現在、横浜市鶴見区で生活をしています。長女ヨウコ、二女真理子もそれぞれ家庭を持っています。

国籍は日本です。仏壇も持っていて、お盆は旧暦でやります。家族での会話は日本語が多いです。方言は最近使いません。沖縄料理はイリチャーをよく食べます。新聞はとっていません。『CAICO ニュース』も今は見かけません。テレビはNHKです。日ボ協会、ポリビア県人会に入っています。浦添市人会、伊江村人会のような

※『コロニア・オキナワ入植五〇周年記念誌 ポリビアの大地に生きる沖縄移民』によると、徳子の夫山城興喜は第一次ポリビア移民として一九五四年六月十九日にチサダネ号で出航した。徳子は長男興一郎とともに第四次ポリビア移民として一九五七年十月二二日にチサダネ号で出航した。

ものはありません。現在、家の農地は一五〇ヘクタール程度です。それ以外は売り、残った農地でサトウキビを作っています。

【二〇〇九年九月二〇日島袋伸三調査】

コロニア・オキナワ第二移住地



山城徳子さん（中央）とその家族 [2009年 島袋伸三 撮影]

今は広いポリビアがいい



善平千代（旧姓比嘉）

戦後一世／那覇市

一九三三年八月二五日

生まれたところは那覇市安謝です。父の名前は比嘉加奈。母は読谷の人です。戦前は安謝の小学校に行きました。浦添出身の夫善平朝弘と結婚したのは二三歳のときです。二四歳で長女を出産しました。ポリビアに行く前、夫は大平で畑をされていて、その後安謝で大理石を加工する仕事を五、六年ほどしていました。

ポリビアに来たのは一九六八年。四月に神戸に行つて、移住センターで二週間、研修を受けて四月の半ば頃に、ポリビアに向かいました。船の名前はルイス号です。当時、私は三六か三七歳。渡航費は琉球政府からもらいました。行つたのは私たち夫婦と十二歳の長女・十一歳の長男・九歳の二女・四歳の三女・合わせて六人です。第二〇次でした[※]。本当は行きたくなかったけど、夫が行きたがつていたので行つたつて感じます。移民するときには豆腐白を持って行きました。他にもナタとか斧とか持つて行つただけで、向こうでは使い物にならなかつたですね。ノコギリも向こうの木には使えなかつたです。

※『コロナ・オキナワ入植五〇周年記念誌 ポリビアの大地に生きる沖縄移民』によると、善平朝弘・千代夫妻は、子ども四人とともに第二〇次ポリビア移民として一九六八年六月十九日にルイス号で出航した。

ポリビアでは最初から今の所、第三移住地です。二男は現地で生まれています。移住地では五〇町歩もらいました。お米を作ったり、綿花を作ったりしていましたが、現在はリオグランンドの向こう、ブラジルとの国境沿いにあるコンセプションにある二〇〇〇町歩の牧場を長男と二男が経営しています。

一九七九年、二女がJICA研修で沖縄に帰りました。看護学校を出るためにね。そしたら「もうポリビアには戻らない」というので一人じゃ危ないからと、一九八二年に長女が沖縄に帰りました。その後長女は沖縄で結婚して、今も沖縄に住んでいます。三女はポリビアでウチナンチュの二世と結婚して、今は横浜にデカセギで来ています。

現在、長男、二男と一緒に暮らしています。宗教はカトリックですが、仏壇はあります。お盆はやってますよ。家で話すのはウチナーグチ。沖縄料理はゴーヤーチャンプルーとか作りますね。豆腐は自分で作るんですよ。魚があるときは、かまぼこ作ります。テレビはNHK。子どもたちはポリビアのテレビですね。日ボ協会に入っています。模合はやってません。

沖縄には三回来ました。最初は二二年ほど前、二回目は第二回のウチナンチュ大会のとき、そして二〇一一年です。でも、今はもう向こうがいいですね。沖縄に来て十日くらいで飽きています。

【二〇一一年十月二六日 島袋伸三調査】

沖縄県浦添市

